

長野県松本市

NAKAYAMA-KOHUN-GUN

中山古墳群

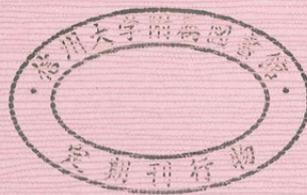
KUWAGATAHARA-ISEKI

鍬形原遺跡

KUWAGATAHARA-TORIDESI

鍬形原砦址

—中山霊園拡張に伴う第Ⅰ～Ⅳ次発掘調査報告書—



2003

松本市教育委員会

長野県松本市

NAKAYAMA-KOHUN-GUN

中山古墳群

KUWAGATAHARA-ISEKI

鍬形原遺跡

KUWAGATAHARA-TORIDESI

鍬形原砦址

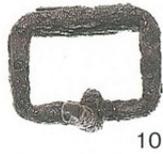
—中山霊園拡張に伴う第I～IV次発掘調査報告書—

2003

松本市教育委員会



南東方向から中山古墳群、中山霊園を眺む（平成11年撮影）

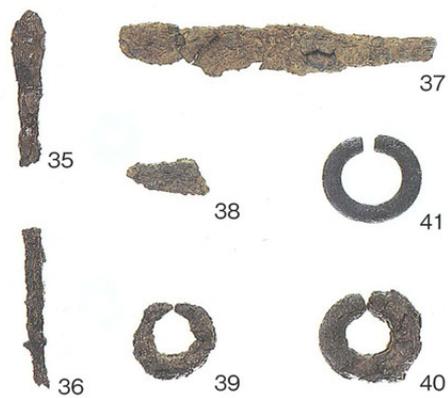


第38号古墳

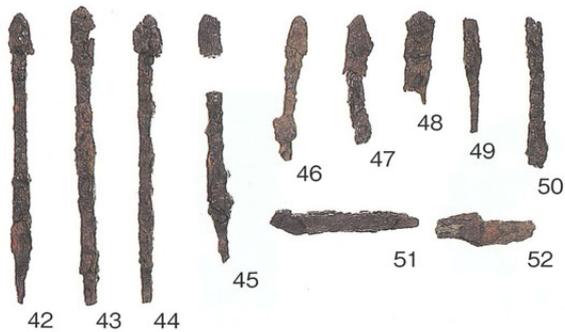
金属製品1



第52号古墳



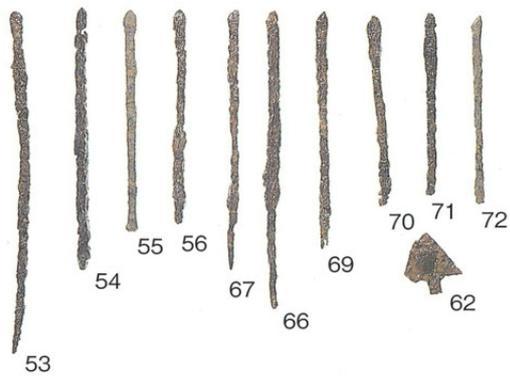
第53号古墳



第54号古墳



第55号古墳



第55号古墳



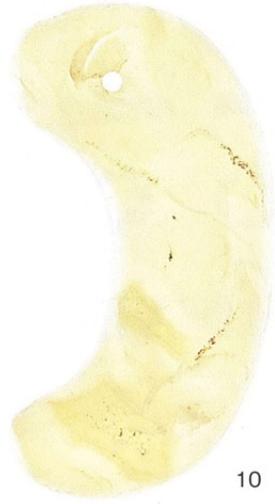


16



17

第54号古墳



10

第38号古墳



14



12



11



13



15

第55号古墳



18~37

第55号古墳

玉類

序

中山古墳群は松本市の東部、中山地区南半に所在する遺跡です。本遺跡は古くから所在が知られ、戦前から本格的な発掘調査が実施されてきました。昭和40年代の中山霊園造成事業においては2基の古墳が発掘されています。

その後、市民から墓地造成の要望が高まり、中山霊園の南方一帯に霊園が拡張されることとなりました。該当地には周知の古墳3基があり、他にも湮滅古墳が多数埋蔵されている可能性があります。そこで、松本市教育委員会が拡張工事に先立って、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は、平成2年から同13年にかけて、13次にわたり断続的に行われ、総面積は42,000㎡余りという大規模なものになりました。連年、春から炎暑の夏、あるいは凍霜の頃まで間の調査となりましたが、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、未確認だった古墳、奈良時代から平安時代にかけての炭焼窯群や古窯址、縄紋・弥生時代の集落址の発見など、多大な成果をあげることができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた地元関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

目次

序	(4) 第Ⅱ次調査のまとめ	21
例言	3 第Ⅲ次調査で発見された遺構	21
目次、図目次	(1) 古墳	21
I 調査の経緯	(2) 土坑	22
II 調査地と遺跡の環境	(3) 集石	22
1 調査地の位置	(4) 炭焼窯	22
2 遺跡の地形地質	(5) ピット	23
3 遺跡の歴史的環境	(6) 鍬形原砦址関連の遺構	23
III 調査の経過と概要	(7) 第Ⅲ次調査のまとめ	23
IV 発見された遺構	4 第Ⅳ次調査で発見された遺構	23
1 第Ⅰ次調査で発見された遺構	(1) 土坑	23
(1) 古墳・周溝	(2) 炭焼窯	24
(2) 集石	(3) ピット	24
(3) 土坑	(4) 暗渠	24
(4) 炭焼窯	(5) 溝	24
(5) 石積	(6) 第38号古墳	24
(6) 列石	(7) 第Ⅳ次調査のまとめ	24
(7) 石垣	V 出土遺物	
(8) 溝	1 土器・陶磁器	42
(9) 配石	2 金属製品	44
(10) 第Ⅰ次調査のまとめ	3 玉類	46
2 第Ⅱ次調査で発見された遺構	4 石器	46
(1) 土坑	VI 調査のまとめ	61
(2) 溝	抄録	
(3) その他の遺構		

図目次

第1図 遺跡位置・周辺遺跡	4	第14図 第51号古墳	31
第2図 調査位置図	11	第15図 第52号古墳	32
第3図 調査全体図	12	第16図 第53号古墳	33
第4図 I～IV次調査全体図	13	第17・18図 第54号古墳	34・35
第5図 I次調査全体図	14	第19・20図 第55号古墳	36・37
第6図 II次調査全体図	15	第21・22図 III次調査土坑	38・39
第7図 III次調査全体図	16	第23図 炭焼窯	40
第8図 IV次調査全体図	17	第24図 鍬形原砦址	41
第9図 第16号古墳	26	第25～28図 土器	52～55
第10・11図 第38号古墳	27・28	第29～31図 金属製品	56～58
第12図 第49号古墳	29	第32図 石器	59
第13図 第50号古墳	30	第33図 玉類	60

表目次

第1表 発掘成果一覧表	10
第2表 古墳一覧表	25
第3表 炭焼窯一覧表	25
第4表 土器一覧表	47・48
第5表 金属製品一覧表	49～51
第6表 石器・玉類表	60

I 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

松本市大字中山地区の西側を画す中山丘陵の南斜面に位置する鍬形原には、多数の古墳があることは以前からよく知られており、その数は明治初期には80余基を数えたという。しかし、その後の開墾等により著しく数を減じ、昭和42年度に松本市が中山霊園を造成する（第1期工事）際には、予定地内の2基の古墳（中山17・39号古墳）が発掘調査されたのみであった。

昭和50年を過ぎるころになると、さらなる墓地分譲の要請が高まってきた。このため、第1期工事区域の南側一帯に、第2期工事区域が計画され、平成2年度から工事着手する予定となった。

しかし、当該範囲には周知の古墳3基（中山15号、16号、38号古墳）が含まれていた。また、前記のような過去の状況から見て、墳丘等を失った未発見の湮滅古墳など多数の埋蔵文化財の存在が予想された。そこで、開発担当課の環境課（途中から市民生活課に改変）と文化財保護担当課の教育委員会社会教育課（現在の文化課）は当該文化財の保護について協議を重ねた結果、周知の古墳3基は現地保存とし、整備を進める。一方、過去に墳丘等を破壊された未発見の古墳、およびそれ以外の埋蔵文化財については当該年度の工事に入る前に工事予定地を発掘調査して記録保存を図ること、の2点を確認した。（ただし、平成2年の調査中に調査地西端で新たに確認された49号古墳は遺存状況がきわめて良好だったため、これを現地保存し、代わりに墳丘の破壊が進行していた38号古墳を記録保存にするという協議内容の変更がおこなわれた。）

2 調査の経過

平成2年度から開始された発掘調査は、毎年度ごと、工事箇所を先行して実施された。発掘調査が終了した地区は、引き続いて造成工事が行なわれた。この発掘調査と工事との基本的な関係は造成が終了する平成13年度まで続いた。ただし、平成6年度のみは造成工事の予定がなく、発掘調査も行われなかった。調査次数はI次からXIII次までに及んだが、これは平成9年度にVII次とVIII次の2地点を、また平成11年度にXI次とXII次の2地点を発掘調査したためである。

また、平成2年度の発掘調査で49号古墳が発見され、非常に遺存状態が良いことが判明したため、関係者で協議した結果、全体的な工事計画を見直し、49号古墳を現地保存する代わりに、38号古墳を記録保存とする方針変更が行われた。さらに、平成4年度の発掘調査時に、調査区域からははずれるが、鍬形沢沿いに須恵器の窯跡が発見され、鍬形沢古窯址群と命名された。平成7年度の発掘調査ではきわめて遺存状態が良い、製炭用の窯跡が発掘されたため、造成計画を部分的に見直して埋め戻し、現地保存とした。平成8年度の発掘調査では、対象地一帯に湮滅古墳の他に縄紋・弥生時代の集落址が展開していることがわかり、鍬形原遺跡を新設した。

3 調査体制（Ⅰ～Ⅳ次調査：平成2～5年）

【平成2年度】第Ⅰ次調査

調査団長：松村好雄（松本市教育長）

調査担当者：直井雅尚（主事）、高桑俊雄（囑託）

協力者：青木雅志、赤羽章、赤羽包子、浅輪敬二、石合英子、石合利加子、今村嘉子、大塚袈裟六、大谷成嘉、奥原富蔵、大沼健一郎、北村洋、糸井益子、小池直人、小岩井美代子、小島茂富、児玉春紀、小松正子、下里忠靖、下里千代子、下里みつへ、須沢久、瀬川長広、関五十鈴、袖山勝美、田多井亘、鶴川登、中村恵子、西川正雄、藤本利子、丸山久司、三沢元太郎、見村芳子、村山正人、百瀬一子、百瀬清子、百瀬智、百瀬縫代、百瀬二三子、百瀬正美、百瀬義友、山口順子、横山真理、吉江和美、吉田勝、米山禎興、内沢紀代子、内田和子、開嶋八重子、上條尚美、川窪命子、神沢ひとみ、久根下三枝子、滝沢直美、滝沢龍一、松尾明恵、松尾さだ子、丸山恵子、村山牧枝、吉澤克彦

事務局：荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐・文化係長）、熊谷康治（課係長）、荒井由美（囑託）

【平成3年度】第Ⅱ次調査

調査団長：松村好雄（松本市教育長）

調査担当者：高桑俊雄（囑託）

調査員：中島経夫、宮嶋洋一

協力者：赤羽章、浅輪敬二、大下恵二、小島茂富、下里末子、瀬川長広、高橋登喜雄、滝沢隆男、田多井亘、中島新嗣、林和子、真々部まさ子、丸山恵子、三沢元太郎、村山正人、百瀬清子、百瀬二三子、百瀬正美、百瀬義友、矢島利保、米山禎興、内沢紀代子、内田和子、塚田つた江、塚田文子、堤加代子、原沢一二三、洞沢文江、松尾明恵、村山牧枝、横山小夜子、横山保子

事務局：荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐・文化係長）、熊谷康治（課係長）、窪田雅之（主事）、荒井由美（囑託）

【平成4年度】第Ⅲ次調査

調査団長：守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者：高桑俊雄（囑託）

調査員：太田守夫、西沢寿晃

協力者：青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、白井秀明、小穴仁美、大谷成嘉、大月八十喜、神田栄次、北沢達二、黒木清、小島茂富、坂口ふみ代、下里末子、下里千代子、高橋登喜雄、竹原久子、田多井亘、中村安雄、藤本利子、松田秀子、丸山久司、丸山恵子、丸山隆香、道浦久美子、甕 国成、百瀬智、百瀬二三子、百瀬義友、横山真理、吉田昌彦、米山禎興、大角けさ子、竹平悦子、直井由加理、平出貴史、ミン・オン・トゥイー

事務局：市教委：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐・文化係長）、窪田雅之（主事）
教育文化振興財団：神澤昌二郎（考古博物館長）、久保田剛（主事）、荒井由美（囑託）

【平成5年度】第Ⅳ次調査

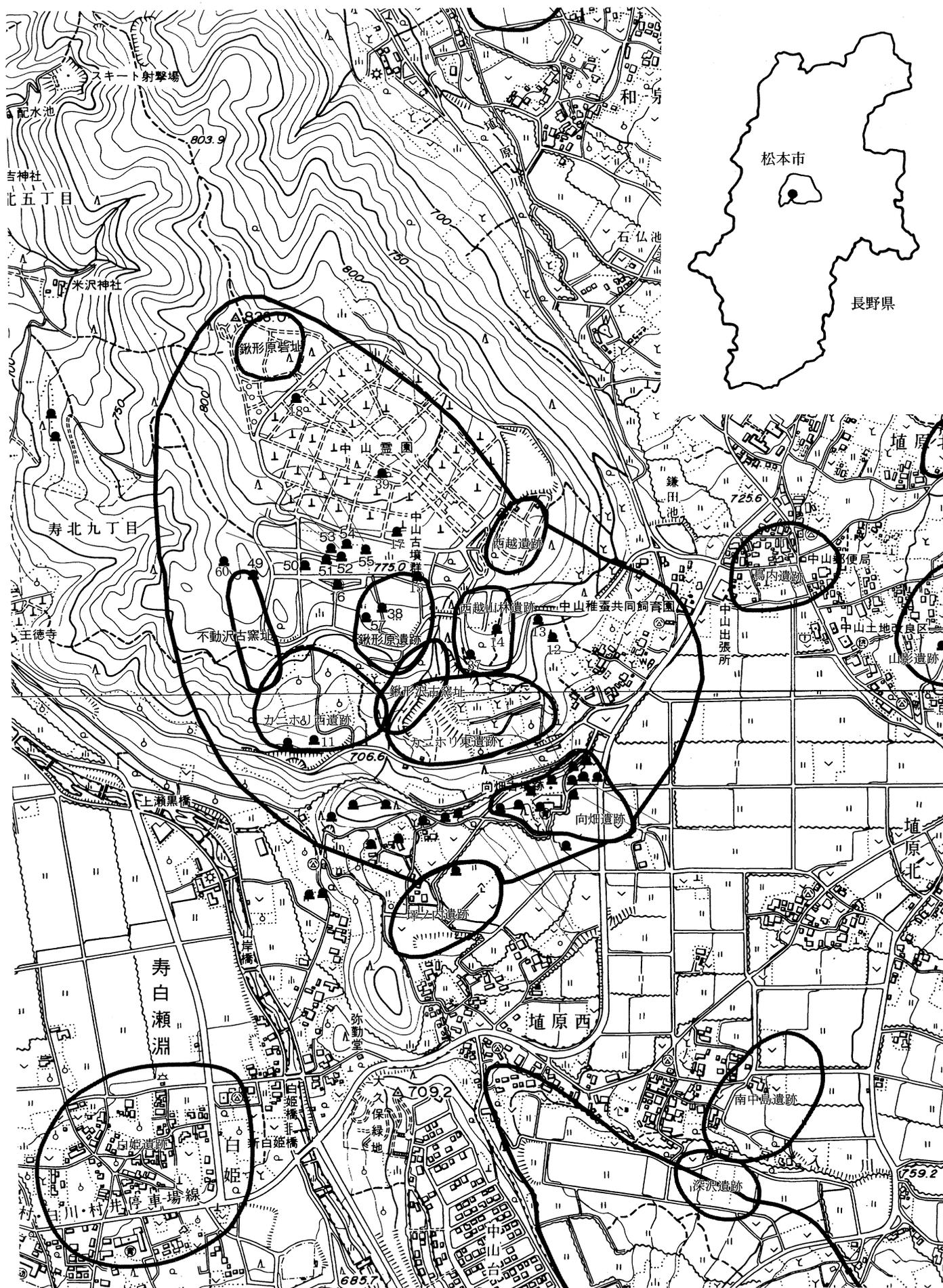
調査団長：守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者：高桑俊雄（囑託）

協力者：青木雅志、浅井信興、石井脩二、白井秀明、小穴仁美、大谷成嘉、大谷房夫、大月八十喜、神田栄次、小島茂富、児玉春紀、小松正子、坂口ふみ代、下里千代子、田多井亘、中村安雄、藤本利子、松田秀子、丸山久司、道浦久美子、甕 国成、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、米山禎興

事務局：市教委：島村昌代（社会教育課長）、木下雅文（課長補佐・文化係長）、窪田雅之（主任）

教育文化振興財団：熊谷康治（考古博物館長）、松澤憲一（主査）、遠藤守（主事）、藤原美智子（囑託）



第1図 遺跡位置・周辺遺跡 (1/10000)

II 調査地と遺跡の環境

1 調査地の位置と状況

松本市大字中山4763番地他に位置する。昭和40年代に造成された中山霊園の1期工事の領域に南隣し、東と西は山林、南は畑地と果樹園に囲まれている。これらの間には各所に等高線に沿って背の高い石垣が築かれ、旧地形よりは傾斜の緩い段々畑が発達していた。従来、これらの畑は桑園として利用されていたが、養蚕の凋落により、桑園の半数は放置され、発掘調査前は桑の密生林や原野と化していた。以上のような状況の中に、周知の古墳3基の他に、古墳の残骸らしき石積み、盛土、石垣の不自然な脹らみ、石室の天井や奥壁に用いられたような巨石が散見された。

2 中山丘陵と遺跡の地形地質

(1) 地形

松本盆地の東南方に連なる中山丘陵は、盆地の東方を南北に走る筑摩山地の南部にある鉢伏山（標高1,928m）の西麓に、主脈とほぼ平行の形で、盆地にある最も大きな独立した丘陵山地である。南北はおよそ3km、幅の一番広い南寄りの所で東西約1.5kmの甘藷状の形態をしている。この丘陵は南に高く北に低くなっており、南部の一番高い所は863mで、西側の盆地面が標高630mであるので、丘陵の比高は200m強である。北方は標高を減じ突端は652mである。山頂の北半は崩壊して崖となっており、頂上は付近の西側と東側は崖錐が発達している。山頂から南は緩く傾斜し、上部の平坦地は中山霊園となっており、平均斜度は5°程である。

この丘陵は松本盆地の東南端に独立しており、鉢伏山塊の西の山麓が南北方向の断層（松本盆地東縁線の一部）によって生じたケルンバットではないかと推定される。また、丘陵の西側は断層崖とみられ、南北方向の推定断層があり、更に最近判明した古墳時代からの活断層である並柳断層が、丘陵の西側を南北方向に走っている。

河川については、この丘陵の南側で鉢伏山に源を発する牛伏川が、前鉢伏山から流出する中沢、北沢、そのすぐ北の宮入山から流出する宮入川などと合して、丘陵の西側に沿って北へ流れ、丘陵の北端近くから北西に流路を変え、500m程で田川と合流している。丘陵の東側は、高遠山（標高1,316m）に源を発する複数の沢により、中山地区に3つの小扇状地を形成しつつ合して複合扇状地を形成し、中山地区の集落や農地となっている。これらの沢は丘陵の東麓で合して和泉川となり、東麓に沿って北流し、丘陵の北北西500mで田川と合流している。このように丘陵の東と西を囲むように河川が流れており、これは新旧の断層と関係があると推定される。丘陵の上から眺めると、松本盆地南部の河川は皆、松本の旧市街方向に流れており、上述した牛伏川が足下を洗い、その先約1kmを田川が、更に田川の前1.5kmを奈良井川が、というように北流している。これは盆地の基盤が旧市街地から両島—南松本付近にかけて、沈降を続けているためと推定される。

(2) 地質

丘陵の北側の基盤は新生代新第三紀層であり、内村累層の砂岩・頁岩の互層であるが、玢岩や石英閃緑岩の貫入を受けて走向や傾斜は乱れており、一部北側の路頭でN45°E、NWへ42°と測定できたが、単に参考値でしかない。

丘陵の南半分にはロームが載っており、ロームの下部は、石英閃緑岩の角礫や風化小礫の破片と少量の頁岩の風化した破片がロームと混成している。その下には石英閃緑岩の1m以上の角礫が横たわり、調査孔の一部では破碎され、風化の進んだ基盤の一部ではないかと閃緑岩体があり、断層により破碎されたと推定さ

れる。したがって、従来、閃緑岩の巨礫は東部山地から運ばれたと考えられてきたが、基盤から崩落したのも混在していると思われる。

これら石英閃緑岩体は、東部山地の高遠山一帯の内村層に貫入した深成岩体であり、その西端が断層で切られ、その破碎帯部が削られて、ケルンバットになったとみられる。同じようなものが西部山地の旧梓川村～三郷村にかけて、松本盆地西縁線沿いに、南から帆立山、七日山、室山などが盆地面に独立した小山として顔を出しており、平成5年の帆立山付近の土木工事により、西部山地との間には大規模の破碎帯がみつきり、西縁断層線によることがはっきりした。このように盆地の東縁と西縁には盆地面の上に独立した小山が存在している。

(3) 発掘地点の地形・地質

今回の平成2年～13年の調査のうち、平成13年以外は霊園の南～南西面の丘陵斜面が対象で、標高はおよそ750m～800mの間にあり、傾斜は5°～10°である。平成13年の発掘のみ霊園のすぐ北側の標高810m～820mの小緩斜面である。

発掘地点は年次は異なっても大同小異であり、地形上に谷や凹凸があるため遺構の深さも一定していない。概念的には柱状図のごとく、

ア 表土は腐植の混入による黒褐色のローム質土である。

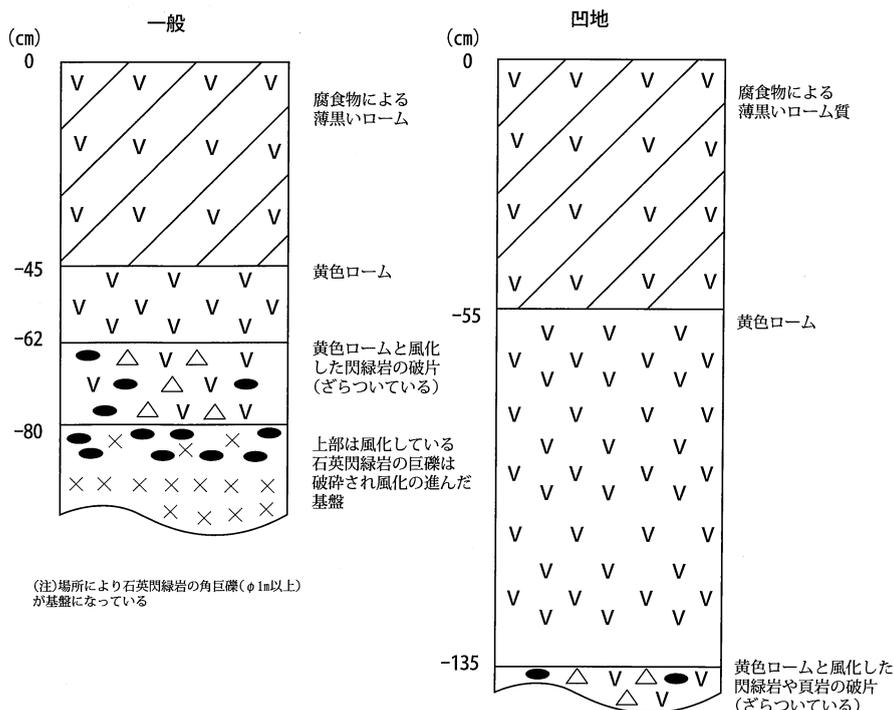
イ 黄褐色のローム質であるが、斜面であるので下への移動がある。

ウ 石英閃緑岩の角礫やその風化小礫、頁岩の小破片とローム質の混在層となっており、非常にざらついている。

エ 石英閃緑岩の巨角礫（1m以上）が横たわり、非常に風化の進んだものや表面が新鮮なものなどが混在している。

オ 基盤と思われる破碎され風化の進んだ閃緑岩体

となっており、地形の凸部ではウが地表付近にある。凹部ではアとイが非常に厚くなっている（柱状図参照）。遺構はイとウに集中している。以上の調査地点は居住地としては傾斜がやや急過ぎ、定住していたかどうか疑わしく、季節的なものではなかったかと思う。



平成8年度調査地(VI次調査)の柱状図

3遺跡の歴史的環境

(1) 縄紋時代

今回の一連の調査のうち第Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ次調査で縄紋時代中期の集落址が検出され、第Ⅵ次調査の際、鍬形原遺跡と命名された。住居址のほとんどは削平を受け、柱穴と炉址のみの検出だったが、15軒の存在を確認した。また、今回の調査地外では、中山丘陵を南東に下った台地上の向畑遺跡で中期初頭の竪穴住居址9軒と500基を超える土坑を調査している。さらに、南の蟹堀沢川を渡った南の坪の内遺跡では中期～後期の住居址23、中期の土器集中区が検出されている。

(2) 弥生時代

今回の一連の調査のうち第Ⅵ・Ⅸ次調査で鍬形原遺跡から弥生地代後期の集落址が検出されている。高地の斜面に存在する集落として注目される。今回の調査地以外で弥生時代の発見は、中山丘陵を北に下った生妻遺跡でわずかに遺構、遺物があるにすぎない。

(3) 古墳時代

今回報告の第Ⅰ・Ⅲ次調査で中山49号～55号の古墳址が発見された。さらに第Ⅸ次調査では中山57号古墳が発見されている。15・16・38号古墳は以前から存在が知られていたものである。今回調査地から外れて丘陵斜面を東側に廻ると、中山12号・13号などの古墳が確認されている。今回調査地の上方斜面にあたる第1次霊園造成地内には中山17号、39号古墳が、また斜面を下ったカニホリでは中山11号古墳と蟹堀古墳があり、かつて調査がされている。丘陵を南東に下った向畑遺跡では、古墳前期の集落と古墳中期の古墳群が調査されている。丘陵を南に下り蟹堀沢川を南に渡った坪山でも中山41号、42号古墳などの古墳が確認されており、一帯は古墳の稠密地帯だったことがわかる。

(4) 奈良時代

今回調査地内の不動沢と、調査地からははずれるが鍬形沢に沿って、須恵器の窯跡が確認されている。いずれも沢の名を冠して不動沢古窯址、鍬形沢古窯址と命名された。鍬形沢古窯址は確認のみだったが、不動沢古窯址では窯体1基が調査され、灰原からは多量の須恵器や窯滓が出土した。

(5) 平安時代

炭焼窯が調査区域内で点々と発見されている。第Ⅰ次調査の当初は近世に属すると考えていたが、第Ⅳ次調査で奈良・平安期の遺物出土し、また、第Ⅴ次調査では従来の伏せ焼き型の炭焼窯と並んで、より規模が大きく、須恵器窯に似る窰窯型の炭焼窯が発見され、一連の炭焼窯がこの時代まで遡る可能性が指摘された。これらの製炭遺構に伴う集落址は発見されていない。

(6) 中世

調査区域から大きく外れるが、丘陵の山頂付近で大規模な空堀が確認され、山頂付近に山城ないしはそれに準ずる砦跡があった可能性が高まった。このため郭とみられる一帯は鍬形原砦址と命名された。丘陵を南東に下った向畑遺跡では、760基を超えるこの時期の土坑墓が見つまっている。調査区の1.5km東には戦国期の築城と推定される県史跡の埴原城がある。

Ⅲ 調査の経過と概要

調査全体の概要は第1表に譲るが、第Ⅰ次から第Ⅳ次までの調査経過と概要は次のとおりである。

1 第Ⅰ次調査（平成2年度）

平成2年4月24日に現地に発掘調査用機材を搬入し、4月27日からパワーシャベルによる鍬の抜根と表土の除去を開始した。5月7日からは発掘作業員を導入し、遺構検出作業に並行して石垣や土手、未確認の古墳らしき数ヶ所の石積等の藪刈りとそれらの洗い出しを行う。調査地区は畑のまとまりごとに23か所の小調査区に分け、各小調査区には「あ」～「ぬ」の記号を冠した。また、各小調査区間の石垣はそれぞれに「A」～「W」の記号を付し、写真撮影等での混乱を避けた。確認できた古墳の周溝状遺構と、その石室基底部らしき遺構3基は順次掘り下げ、古墳であることを確認した。また、藪刈りの結果、調査区西端部で墳丘や横穴石室がほぼ完全に残っている古墳の存在が確認され（49号古墳）、現況等高線測量を行うとともに現地保存に向けて範囲確認のため墳裾確認トレンチを入れる。8月7日には最も古墳らしい石積3基を上空から写真測量を実施し、礫の取り外しにかかった。この結果、うち1基には横穴石室が良好に残存しており（54号古墳）、引き続き石室内の掘り下げと石室の測量を行う。一方、現地保存される古墳のうち本年度の工事範囲にかかる16号古墳について、規模を探るために周囲を清掃し、等高線測量を実施した後、北東から北西にかけて墳裾と周溝確認のトレンチを開けた。また、露出していた横穴石室開口部を保護するためにビニールシートを掛けてその上を土嚢で覆った。これらの作業がすべて終了したのが8月31日である。

結果として、第Ⅰ次調査は調査期間は平成2年4月27日から8月31日まで行った。対象面積は約10,000㎡で、うち調査面積は6,300㎡を測る。検出された遺構は、古墳が7基（16・49～54号古墳）だが、正確には16号古墳は測量後、北側の墳裾の調査のみ。49号古墳は測量後に北・南・東側の墳裾に数本のトレンチを入れたのみ。他の古墳は全面調査を行った。他に土坑8基、炭焼窯が1基、集石が2基、石積が1基、列石が1基のほか、近世以降の石垣を23ヶ所確認した。遺物は古墳からのものが中心で、土師器・須恵器の土器類のほか鉄器の武具（剣1、刀2、鏃10以上）、装身具（耳環5、白玉2、小玉2）、検出面からの石器がある。

2 第Ⅱ次調査（平成3年度）

第Ⅰ次調査区の南隣一帯である。平成3年4月22日から調査地区内の立木伐採を行う。23日からは重機を搬入し、伐採作業と並行し表土除去、抜根作業を開始する。原野となっていた畑地はすべて抜根し、表土を除去して地下に埋蔵されている古墳やその他の遺構の存在を探った。石積み、盛土は上部に繁茂していた雑木、蔦、葛などを完全に取り払い、必要な場合は現況測量を行った後、断ち割って古墳であるかどうかの確認を行った。石垣も同様に雑木、蔦、葛などを片付け、側面から写真撮影をした後、断ち割りを行った。露出した巨石は表土除去後、さらにトレンチを設定して掘り下げた。各地区は、「は」から「ゆ」までの記号を冠して扱った。各地区には、石垣と石積の塊が各所に見られ、また「る」地区には巨石、「り」地区には小礫のまとまりがあって、これらにも何本ものトレンチを入れ、遺構でないことを確認していった。今回の調査では、外周道路建設予定地も含まれた。外周道路予定地で土師器片を得たため「よ」地区と「ら」地区を設定した。その結果「よ」地区から溝と土坑を確認した。5月末より測量作業に入り、6月1日をもって終了した。外周道路部は都合で全面的な調査ができなかったことが惜まれる。

結果として、今次の調査は面的調査部分と併行して外周道路になる地点を扱った。調査期間は平成3年4月23日から6月1日までである。対象面積は、約10,000㎡のうち実質の調査面積が8,400㎡を測る。投入し

た労力に対して検出された遺構は少なく、暗渠状の流路跡の他は土坑1基、溝1本にすぎない。遺物は僅かな須恵器と土師器、石器が得られているのみである。

3 第Ⅲ次調査（平成4年度）

第Ⅰ次調査区の東側一帯である。平成4年5月20日から7月30日にかけて、霊園造成予定地と、既に霊園駐車場及び緑地となっていた丘陵頂上部のマレットゴルフ場予定地に対して発掘調査を実施した。

霊園造成予定地は対象面積4,600㎡のうち、土盛り部分を除いた3,117㎡を調査した（「あ」～「え」地区）。また、飛び地になる38号古墳部分540㎡も調査に加えた（「お」地区）。重機を導入して、抜根と表土剥ぎを行い、その後、人力で作業を進めた。

マレットゴルフ場予定地では、設計された9ホールのうち、特徴的な地形上にレイアウトされた第1ホールから第5ホールまでを調査することとし、これらに計7本、のべ103.5mのトレンチをいれた。この作業はすべて人力で行った。

結果として、調査された遺構は古墳2基、土坑16基、集石2基、炭焼窯4基のほかに暗渠がある。また、マレットゴルフ場予定地では小規模な山城に付随すると思われる空堀を確認した。遺物は古墳からの出土を中心に、土師器・須恵器の土器類、馬具・武具の鉄器類、耳環、玉類（管玉、勾玉、丸玉、双孔円盤）、検出面からの石器がある。なお、今回調査の際に、霊園造成予定地東部を南下流する鍬形沢沿いに、奈良時代の須恵器の窯跡が2基発見され、鍬形沢古窯址群と命名された。（須恵器窯は位置の確認のみにとどまった。）

4 第Ⅳ次調査（平成5年度）

第Ⅱ次調査区の東側、第Ⅲ次調査区の下部南側にあたる。平成5年4月20日から5月21日にかけて実施した。重機を導入して立木の抜根と表土の除去を行い、その後、人力で作業を進めた。対象地4,300㎡のうち約7割にあたる3,033㎡を調査した。

結果として、炭焼窯2基、土坑25基、ピット、溝などを確認、調査した。ただし、炭焼窯を除く遺構の大部分は自然の営力の結果である可能性が高い。その中で、1号炭焼窯からは土師器甕、須恵器杯・同蓋・同甕を、また、2号炭焼窯からは土師器杯を得、過去の一連の調査で検出した炭焼窯群が平安時代前期を下らない遺構である可能性を示したのは画期的なことであった。なお、38号古墳一帯は昨年度に調査を終了しているが、今回、再度西側周溝周辺を探った結果、若干の遺物を得た。

第1表 中山霊園拡張に伴う中山古墳群・鍬形原遺跡・不動沢古窯址発掘調査成果一覧

年次	期間	面積	発見された遺構	出土した遺物	所見・備考	
2	I	4/27～8/31	6,300	古墳7(16・49～54墳)、土坑8、溝1、炭焼窯1、集石2、石垣23、石積1、列石1	土師器・須恵器・陶磁器、武器(剣1、刀2、鉄鍬10以上)、装身具(耳環5、白玉2、小玉2)	50～54号は湮滅古墳で周溝と石室底部のみ検出。石垣は近世以降
3	II	4/23～6/1	8,400	土坑1、溝1	土師器・須恵器	外周道路部も調査
4	III	5/20～7/30	3,760	古墳2(38・55号)、土坑36、炭焼窯4、暗渠、須恵器窯2(確認のみ)	土師器・須恵器・陶磁器、馬具、武具、耳環、玉類(管玉、勾玉、丸玉、双孔円盤)	須恵器窯は鍬形沢古窯址群と命名。鍬形原砦址トレンチ調査
5	IV	4/20～5/21	3,033	炭焼窯2、土坑25、ピット、溝1	須恵器、土師器、炭	
7	V	5/8～8/4	2,400	炭焼窯8、土坑14、配石遺構1、縄紋時代遺物包含層	土師器、須恵器、炭化物・炭	鍬形原砦址トレンチ調査。炭焼窯1基現状保存
8	VI	6/6～8/23	2,200	住居址7(縄紋2、弥生4、不明1)、炭焼窯5、土坑105、集石土坑3、溝4、竪穴状遺構3、ピット多数	縄紋土器(中期・後期)、弥生土器、石器(石斧・鍬・凹石)、土製品、炭化物、炭化米	縄紋・弥生集落址は鍬形原遺跡と命名
9	VII	5/16～11/19	3,676	住居址5(縄紋中期)、土坑142、集石土坑1、ピット群2、溝3、炭焼窯1	縄紋土器、須恵器、石器(有舌ポイント・鍬・石斧・凹石)	縄紋集落
	VIII	8/25～10/7	2,682	土坑68、ロームマウンド3、ピット群3、溝1、炭焼窯3、配石1	縄紋土器、須恵器、石器(鍬・石斧・石皿)、炭	縄紋集落の土坑分布域
10	IX	4/20～7/31	2,030	住居址13(縄紋中期8、弥生5)、土坑76、ピット、古墳1(57号)、炭焼窯1	縄紋土器、弥生土器、須恵器、石器(鍬・石斧)	縄紋・弥生集落。57号古墳は湮滅古墳で周溝の一部と石室底部のみ検出。
11	X	4/27～1/21	6,851	環状杭列1、須恵器窯1(8C)、同灰原4	縄紋土器、土師器、須恵器、窯壁、窯滓	西側谷状部分の調査。須恵器窯は不動沢古窯址群と命名。西側独立丘陵にトレンチ。
12		6/1～7/17	329			
12	XI	9/27～12/7	955	土坑24、炭焼窯4	土師器、陶磁器、石器、炭化物	
	XII	7/28～8/28	190	建物址1、土坑16	土師器、石器、炭化物、窯壁	
13	XIII	7/31～10/30	254	土坑9、暗渠跡3	土師器、石器	
合計			43,060 (㎡)	<p>縄紋時代：住居址15、土坑495、集石土坑4</p> <p>弥生時代：住居址9</p> <p>古墳時代：古墳10(16・38・49～55・57号)、配石2</p> <p>奈良・平安時代：炭焼窯29、須恵器窯3、建物址1</p> <p>戦国時代：砦の空堀(トレンチで確認)</p> <p>時期不明：住居址1</p>	<p>縄紋土器(中期・後期)、弥生土器(後期)、土師器、須恵器、石器(有舌ポイント・鍬・石斧・石皿・凹石)、武具(剣・刀・鉄鍬)、馬具(轡・鞍)、装身具(耳環・玉類)、炭化物・炭、骨、窯壁</p> <p>※総量は整理用コンテナー115箱</p>	<p>鍬形原遺跡：縄紋・弥生時代の集落跡を新発見・命名。</p> <p>奈良時代の炭焼窯を発見。</p> <p>鍬形沢古窯址群・不動沢古窯址群：奈良時代の須恵器窯を新発見・命名。</p> <p>中山古墳群：古墳10基のうち8基を新発見・命名。</p> <p>鍬形原砦址：空堀の存在を確認。</p>

※この数字は本書(第1分冊)編集時点のものであり、第2、3分冊の整理作業によって変更もありうる。



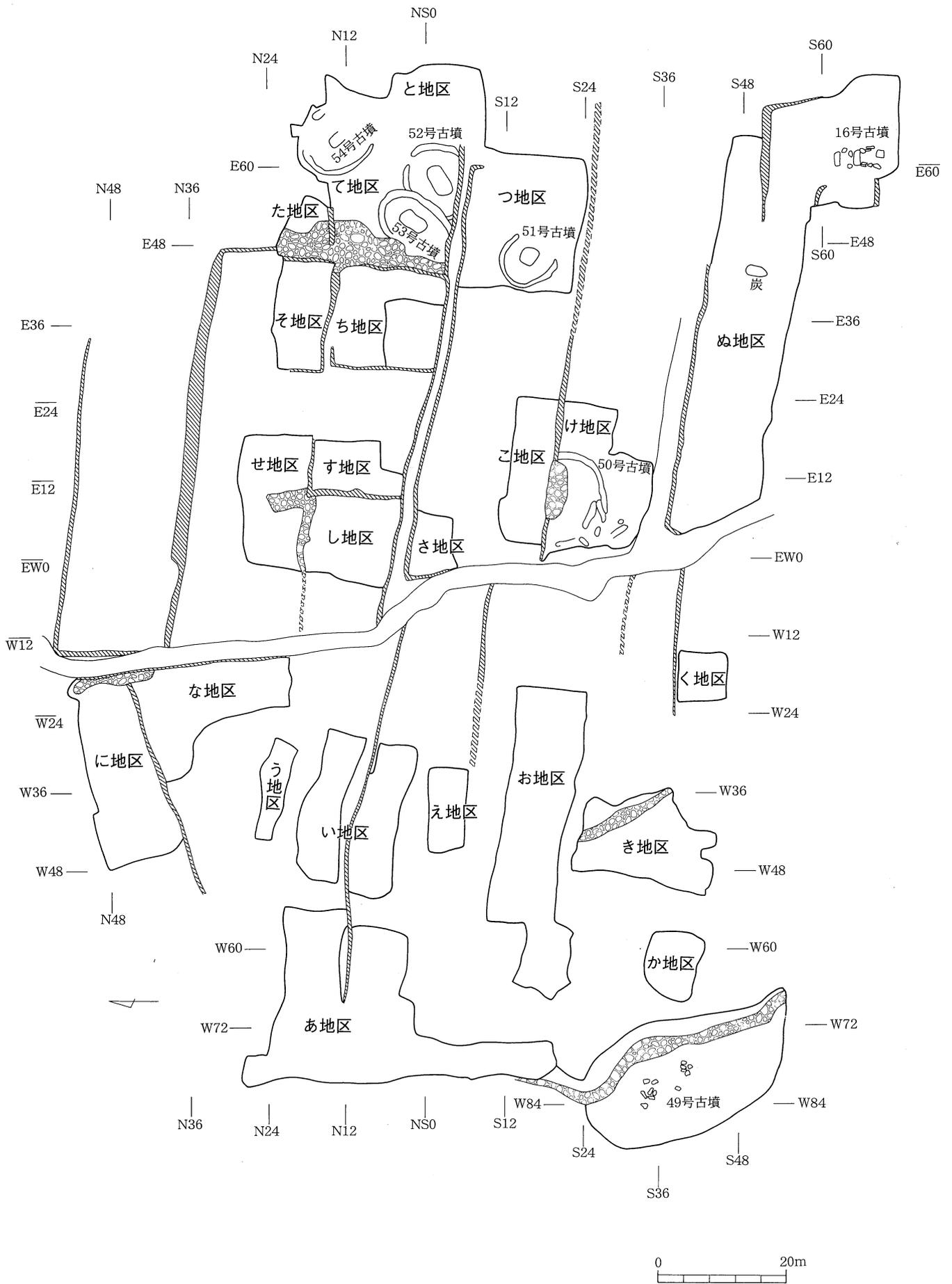
第2図 調査位置図 (I～IX次)



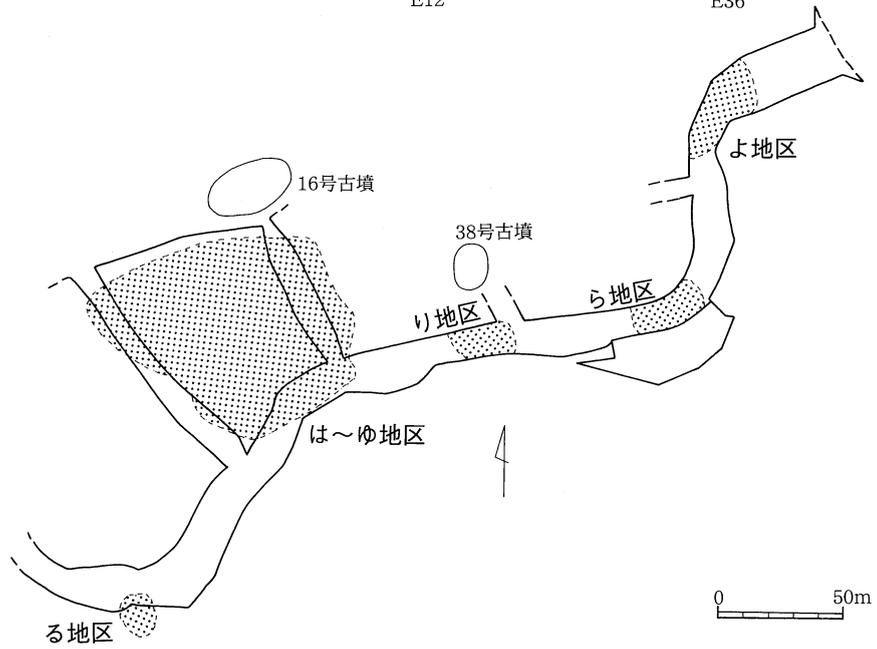
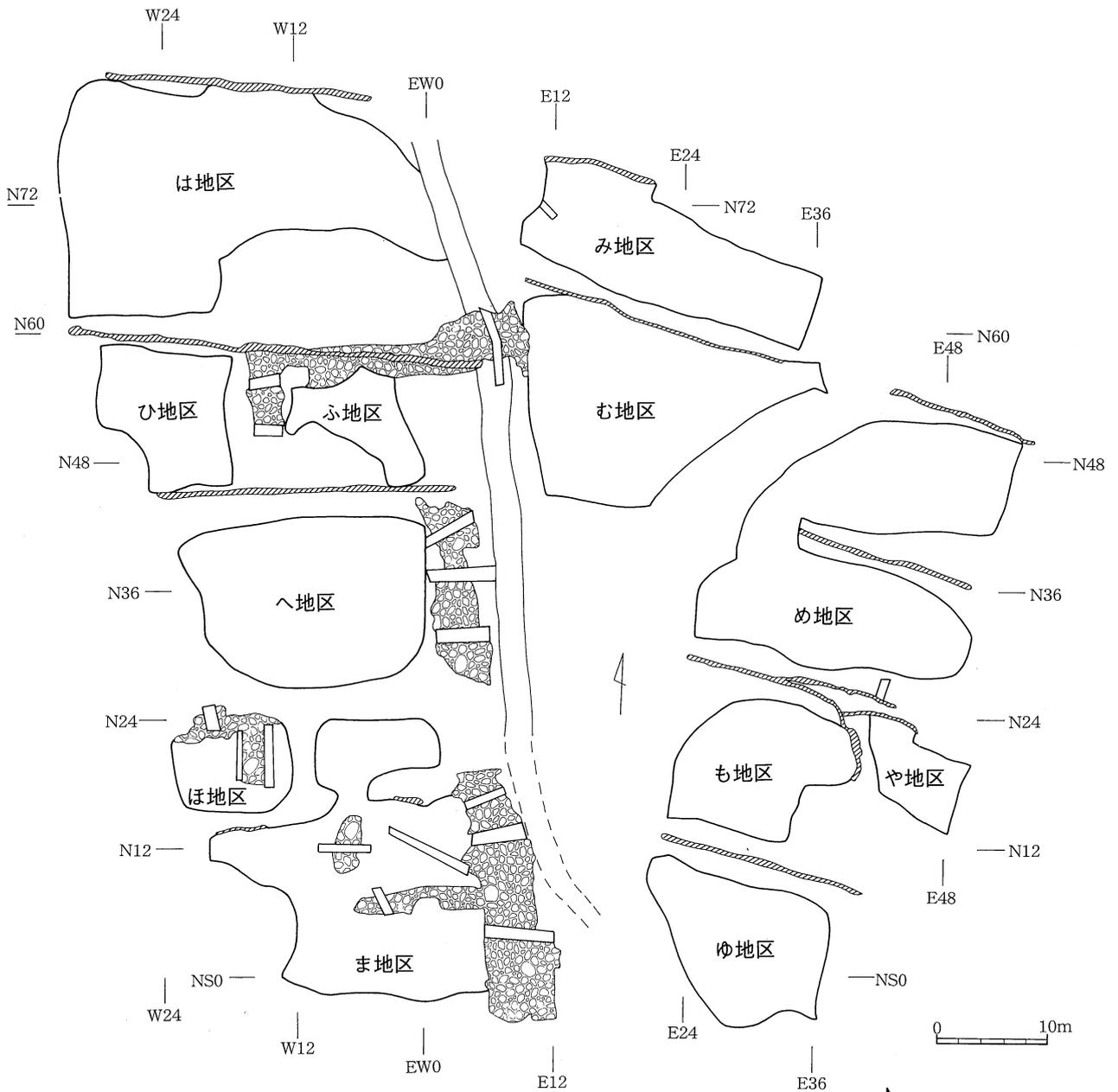
第3図 調査全体図 (I~IV次)



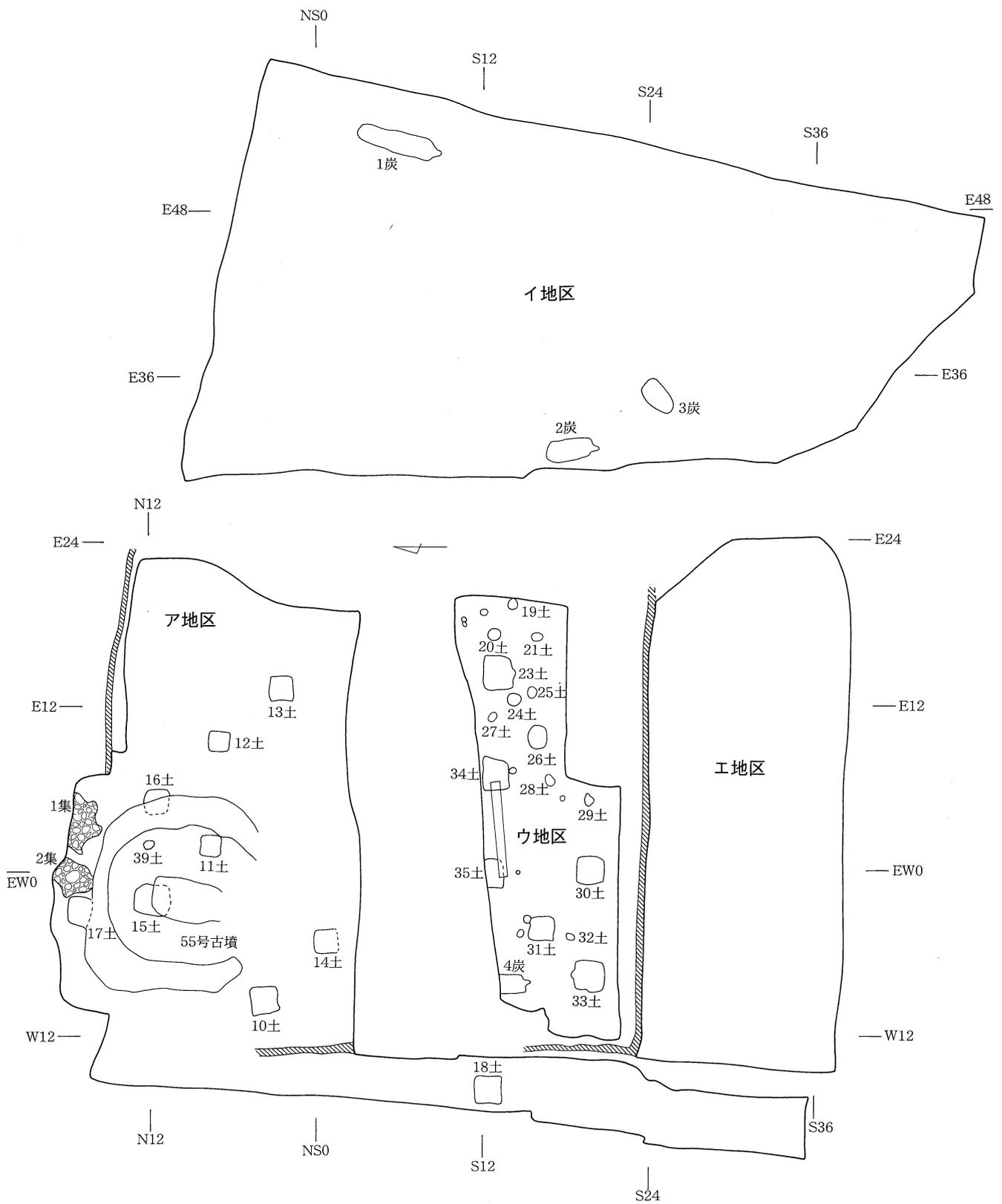
第4図 I～IV次調査全体図



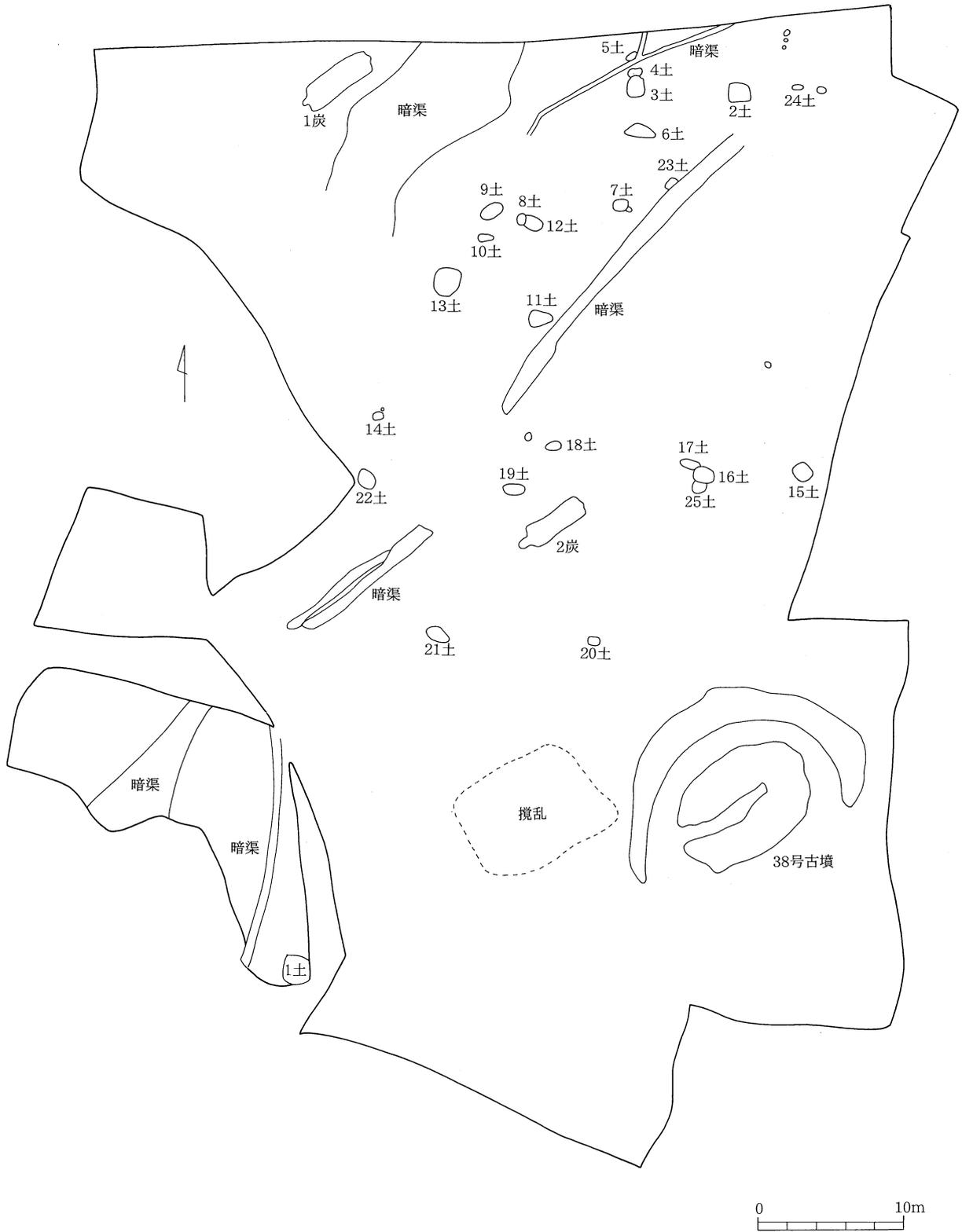
第5図 I次調査全体図



第6図 II次調査全体図



第7図 Ⅲ次調査全体図



第8図 IV次調査全体図

IV 発見された遺構

1 第I次調査で発見された遺構（平成2年度）

(1) 古墳・周溝

ア 第16号古墳（第9図）

第二次工事地区の中央部に位置し、以前から墳丘が残り、石室が露出していた古墳である。今回の調査では、現状保存をすることを前提に、現形の把握と後方部分の形状の探求にあたった。

まず、墳丘の現形であるが、平板測量により等高線図を作成することで把握した。これによれば墳形は西側で大きく削平されているが、直径15mくらいの円墳であったと推定できる。石室は南に向かって開口し、地形的に急な斜面の中央部に構築され、入口の開口部と前庭部は1m以上の比高差がある。すなわち、墳丘の前面部は急な斜面を利用して、その中腹に石室を築造しており、墳高は4.8mを測る。これに対し、古墳の後方部分は非常に緩斜面で、背後の山の斜面とは幅は太いが深さはわずかばかりの周溝（調査時名称：周溝F）で仕切られており、墳高は1.4mを測るのみである。この部分の周溝の幅は1.8～2.6m、深さは0.8mを測る。

イ 第49号古墳（第12図）

第二次工事地区の西端に位置し、今回の調査で新たに発見された古墳である（調査時名称：古墳A）。墳丘が残り、横穴式石室の側壁と一部の天井石が露出していた。今回の調査では現状保存をすることを前提に、現形の把握と範囲の確認に努めた。

墳丘の現形は、平板測量によって等高線図を作成することで把握した。これによれば、墳丘は南北に長い独立した尾根上に造られており、南端及び北端は墳丘の高まりの終わる地点と考えられ、約15mを測る。西側はそのまま尾根の谷に落ち込んでいっており、墳丘西端を捉えるのは困難である。東側はわずかに窪地状を呈し、そこに墳丘東端と周溝があると思われた。東西は約12mとみられ、やや楕円形を呈す円墳だったと考える。墳丘の高さは東側で約1mを測る。

この窪地状の地形にトレンチを入れ、遺物出土があった部分に土層観察用の畦を残して掘り下げ、墳丘東側周溝を部分的に確認した。その際、周溝内から須恵器の中形甕の一括品（第25図11）を含む多数の土器が出土した。周溝内に納置されたものであろう。

ウ 第50号古墳（第13図）

「け」地区と「こ」地区の間にまたがって存在した新発見の古墳。調査前の状況は、両地区の境界に延びる石垣Jの一部が肥厚して盛り上がり、上部に大小の石材が不規則に集まっていた。このため、古墳の存在を想定し（調査時名称：古墳B）、両地区で周溝の検出を試みたところ、下段の「け」地区側で約1/3周する浅い溝を確認し（調査時名称：周溝A）、内部からわずかな土器を得た。この結果、古墳であるとの確証を深め、盛り上がり部を写真測量にかけた後、半割した。しかし、盛り上がり部のほとんどが地山で、石材らしき大小の礫も石室の態をまったくなくしていなかった。ところが、礫の下部から鉄剣が1本出土した。また、周溝の存在もあることから、古墳の残骸と判断した。

わずかに尾根状に張り出した部分を選地して構築された直径13m（周溝内径）ほどの円墳で、墳丘と横穴式石室は既に破壊され、石室の石材と旧地形の盛り上がり部分が現在まで残されていたものとする。堅穴式石室であった可能性もある。鉄剣以外の遺物は周溝内から微量の土器が出土したのみである。

エ 第51号古墳（第14図）

「つ」地区西側で周溝と石室の基底部掘り方のみ検出された新発見の古墳（調査時名称：周溝E、周溝E主体部）。「つ」地区は調査前は南に傾斜する単なる桑園で、古墳の存在した形跡はまったく見られなかった。

周溝は幅60～90cm、深さは10～15cm。南東部1/4程を欠いて一周し、内部からは若干の土器片が出土した。石室基底部の掘り方は単なる窪みとなっており、わずかに石材が数点残っているだけで、石室の規模や主軸方向の推定も不可能な状態であった。周溝内径で測ると直径7～8mほどの円墳であったと考えられる。

オ 第52号古墳（第15図）

「て」地区南部に周溝と石室の基底部のみが検出された新発見の古墳（調査時名称：周溝C、周溝C主体部）。「て」地区は調査前は桑園となっており、「以前、この付近に古墳があった。」との伝承はあったが、現況は墳丘の存在をまったく感じさせなかった。

周溝は南側1/3周を石垣Eに切られ、幅0.6～1.0m、最深でも28cmを測り、北東部にわずかにブリッジを持つ。また、東側の周溝を第53号古墳の周溝に切られている。本古墳の周溝を切り、隣り合って第53号古墳が造られたことがわかる。墳形は円墳で、直径は周溝内径で主軸方向11m、直交軸9m位のやや楕円形を呈するものであったと推定する。

石室基底部は拳大の礫を敷き詰めた床が4.6m×1.6mの範囲で残存していた。側壁の構築石は残っていなかったが、おそらく西南西方向ないしはその逆方向に開口する横穴式石室であったと推測する。

遺物は石室奥部ないし入口部の床上に土師器の杯1個体、高杯4個体（第25図16～20）がまとまって置かれた様であり、他にも鉄製の鏃数点、直刀2本、金環2個が中央部からまとまって出土した。また周溝内からも若干の土器が出土した。

カ 第53号古墳（第16図）

「て」地区南部に周溝と石室の基底部のみが検出された新発見の古墳（調査時名称：周溝D、周溝D主体部）。調査結果からは、第52号古墳の北西部を破壊して構築された状況が窺えるが、墳丘の痕跡をまったく残していなかったなど調査前の状況等はほとんど同じであった。

周溝は西側の約半分を石垣Iに切られ、南東部は第52号古墳の周溝を切る。周溝の幅は0.9～1.6mで、深さは20～30cmを測り、墳丘は周溝内径で主軸方向10.5m、直交軸6.5mほどの規模の円墳であったと推定される。第52号古墳に比べて周溝内には礫が若干多めに落ち込んでいた。

石室基底部は拳大の礫を敷き詰めた床が3.0m×1.7mの範囲で残存し、両側壁の最下段の石材もいくつか残っていた。おそらく南西方向に開口する横穴式石室であったと推測する。

遺物は石室床上から鉄製の鏃らしき物2点、金環3点が出土し、また周溝内からもまとまった土器が出土した。

キ 第54号古墳（第17・18図）

「て」地区北東、「と」地区北西で確認された新発見の古墳（調査時名称：古墳C、周溝B）。調査前の状況は、石積みと盛土で小高くなった上に雑木や茨、蔦などが生い茂る荒れた藪であった。調査では先に周囲の検出を行ったところ、「て」地区と盛り上がりの北側で周溝の存在が確認できた。周溝の規模は幅60～80cm、深いところでも20cmほどの深さであった。周溝内径で古墳の規模を復元すると、直径9mほどの円墳と推定できた。

墳丘と石室が後世に破壊されて積み直されているかどうかを見究めつつ、石積みを清掃し、写真測量の後、動いてしまっているような石から順次取り外していくと、南東方向に開口する横穴式石室の下部2/3程が姿を現した。残存する石室の石積みは奥壁、側壁ともに2～4段、在地の不ぞろいの石材で積まれていた。長さは約3.0m、幅は1.7mであった。側壁の高さは最大で1mを測る。

遺物は、石室内から鉄鏃数点、ガラス小玉が出土し、石室入口部から若干のまとまった土器が出土した。

(2) 集石

「か」地区と「た」地区に1基ずつ発見された。

「か」地区のもの（調査時名称：集石A）は1.5m×2.0mほどの範囲10～30cm大の礫が集められていた。「た」地区のもの（調査時名称：集石B）は、一辺1.5mほどの方形の範囲に10～20cm大の角礫が集められていた。

いずれの遺構も、礫を多用する点で縄文時代の所産のものに似ていたが、一帯から当該期の遺物は皆無で、礫の詰まり具合も隙間があって緩く、近世以降の新しい時代のものと考えた。このため、図化提示はしていない。

(3) 土坑 (第13図)

「け」地区に4基 (C土、D土、E土、F土)、「す」地区に2基 (A土、B土)、「つ」地区に1基 (H土) の計7基が発見された。遺物の出土はなく、用途・時期ともに不明である。ただし、A・B土以外は古墳に接近してまとまってあり、古墳に関連する施設の可能性も考えられる。A・B土は図化提示していない。

(4) 炭焼窯 (第23図)

「ぬ」地区中央部の傾斜地に1基のみ発見された。南北方向に主軸をとる長方形で、長さ3.2m、幅1.4～1.6m、傾斜の上の方での深さは50cmを測る。底面は平坦で、南端部とそれに続く壁が焼土化していた。いわゆる伏せ焼きタイプのものである。

この種の炭焼窯 (製炭址、炭焼き土坑、焼土坑などの名称がある。) は、当初、遺物もなく、構造も粗雑なことから近世、近代のものとして推定していた。しかし、平成4年度の調査で古代の遺物出土するものがあり、平成7年度の調査では、須恵器窯と同様の窖窯タイプのものも見つかったことから、いずれの炭焼窯についても推定を改め、古代に遡るものと考えたい。

(5) 石積

「せ」地区の中央に、石垣C・D・Gに接して1基存在した。当初、古墳石室の残骸が積み直されたものの可能性があるとして「古墳E」と仮記号を付して作業を進めたが、断面観察の結果、新しい時期に積まれた単なる石積みとわかった。高さ1.4m、長さ6m、幅2.3mの規模をもつ。

(6) 列石

「い」地区の中央部にある。現在はまったく使われませんが、往時は寿方面に抜ける道が通っていたということで、それに関わる遺構であろう。幅約2m、長さ10mの範囲に長方形に礫が積んである (調査時名称:列石A)。

この他にも「き」地区に北西から南東へ列石が確認されたが、谷状地形に流れ込んだもので、自然の営力によって形成されたものと判断した。同様に「ぬ」地区に2本確認されたが、谷状地形に伴うものと判断した。

(7) 石垣

調査地の一帯では、急傾斜地を、より傾斜の緩い畑地にするために、近代以降、多数の石垣が造られていた。今年度の調査範囲の中では石垣A～石垣Wの23本の石垣が存在していたが、小規模なものや崩れてしまったものは数えていないので、実数はもっと多い。ほとんどが等高線に沿った東西方向のものだが、道路や地区境に積まれた南北方向のものもわずかにあった。高さは30cm位から2m近い立派なものまであったが、直接の調査の対象とはしなかったため、図化提示は行っていない。

(8) 溝 (第13図)

第50号古墳の南に1本が発見された (調査時名称:溝A)。遺物はないが古墳に伴うものの可能性がある。幅50cm、長さ3m、深さは10cm内外を測る。

(9) 配石

「あ」地区を中心として、古墳の天井石や鏡石、側壁の石材にふさわしい巨岩が、単独ないしは周囲に大形の礫を伴って点在した。当初、湮滅古墳や築造途上の古墳跡と考え、配石の名称をつけ、配石Aから配石Nまで14箇所を把握した。しかし、遺物をまったく伴わないことや、地元で耕作に携わる人から、「畑に露出した巨岩は穴を掘って一段沈ませて耕作の支障にならないようにする。」との聞き書きを得たことから、配石はかつては古墳の石材や構築用材として運ばれたものかもしれないが、近・現代に耕作者の営為を経ていると判断し、遺構として取り扱うのを控えた。現地で実測は行ったが、本書での図化提示はしていない。

(10) 第I次調査のまとめ

今回の調査範囲内には周知の古墳は第16号古墳の1基のみであったが、調査の結果はさらに6基の湮滅古墳の追加を認めるものであった。このことは今後の調査区域内にも同程度の密度で未発見の湮滅古墳がある可能性を示唆した。すなわち、中山丘陵の南向き斜面には、かなりの密度で古墳が築造されていたことがわかるのである。特に、今回発見の湮滅古墳はいずれも微妙な尾根上の地形に築造されており、今次以降の調査の際には同様な地形の箇所は注意を要することになった。

また、古墳の構築時期も古墳時代後期の中で幅があることがわかった。まず、第53号古墳が第52号古墳の周溝を破壊して構築されていることに驚きを持った。ということは、第53号古墳構築時には、既に第52号古墳は崩壊をはじめていた可能性があり、果たして一般的に半壊古墳の周溝を共有するように隣接して新古墳を築造することが行われていたのか、それとも両古墳の間には特別の関連があったのかが今後の検討課題となろう。出土遺物（主に土器）からみても、6世紀前半代から8世紀前半代まで時間差があり、中山古墳群として一括りにするには、既存の古墳を含めた時期の再検討が必要であることを痛感した。

2 第Ⅱ次調査で発見された遺構（平成3年度）

(1) 土坑

外周道路部にあたる「よ」地区に1基を検出した。地山である黄色土中に掘り込まれ、黒褐色土を覆土としている。規模は185×120cm、南北に長い不整楕円形を呈し、検出面及び土坑底部には拳大よりやや大きめの礫が多く存在する。遺物はなく時期は不明。

(2) 溝

上記と同様の外周道路部にあたる「よ」地区に1条がある。北西から南東に約20mを確認した。溝幅は上部（北西部）は広く、約130cm、狭い所では50cm程を測る。溝底部は起伏が激しく、深さは20～120cmと不安定である。検出面の急なこと、覆土中に砂礫が多く、断面V字状を呈した様子より見て、一次的な豪雨などにより水路化したものと考えられる。遺物はなく時期は不明。

(3) その他の遺構

面的調査部の「は」～「ゆ」地区では、石垣2基、石積み10基などが確認された。石垣は雑木、蔦、葛などを片付け側面から写真撮影をした後、断ち割りを行った。石積みも上部に繁茂していた雑木、蔦・葛などを取り払い、現況測量を行った後、断ち割って古墳であるかどうかの確認を行った。これらの結果、石積みには特に巨石を用いているものもあったが、いずれも古墳ではなかった。石垣、石積みともに近世以降の所産と考えられる。遺物はなかった。

(4) 第Ⅱ次調査のまとめ

時間を費やした割に成果の上がない調査であった。遺構の少なさに応じて遺物も希少であった。主調査地の「は」～「ゆ」地区は前年度調査している一連の古墳群の下部に当たり、しかも地形的に窪地状のところでもあるため、上部からの礫などが流下して、後に耕作の邪魔になり人為的に周囲にいくつもの礫の山、石積み、石垣を成したのであろう。営農の証である。外周道路部は都合で全面的な調査ができなかったことが惜しまれる。

3 第Ⅲ次調査で発見された遺構（平成4年度）

(1) 古墳

ア 第38号古墳（第10・11図）

現状保存される第16号古墳の約80m南東に存する。以前から墳丘、石室が露出しており、存在が知られていた古墳である。道路工事が先行して本古墳にかかるため、調査区としては飛び地になるが「オ」地区を設定して調査にあたった。

墳丘の残存規模は、主軸長14m、直交軸12mの円墳で、高さは1～1.5m程となる土石混合墳であった。

天井石は失われ、墳丘上部の石も後世にかなり動かされている様子であった。

横穴式石室は無袖式とみられ、幅1.5m、奥行7.1mで南西部に向って開口している。側壁は一辺50cmを超える比較的大きな石で積まれており、下部1～2段が残っていた。その上に乗せられている20cmくらいの石は、後世に動かされている可能性が高い。両側壁ともに最大で1.1m、奥壁も同様の高さを残す。石室床面は土のままであるが固く、奥壁まで4.5mの地点で5cm程の段をなす。その両脇に閉塞用の目安に用いたと思われる高さ約1mの立石が側壁に組み込まれている。この側壁部分には盗掘坑とみられる窪みがある。石室内からの遺物は特に金属製品が多く、耳環、刀子、鉄鏃、不明鉄製品がある。

周溝は南側から東側の一部を除き、巡っている。従来は外周径15.5m程で全周していたと推定するが、浅い部分から失われ、同様に墳丘も周囲から削平されたものと思われる。周溝は最も残りのよい部分で、幅2.5m、深さ50cmを測る。この周溝内部の南西部（石室開口部に近接）に土器類が多く残されていた。

イ 第55号古墳（第19・20図）

現状保存される第16号古墳の約90m北で検出された新発見の古墳である。平成2年度の第I次調査で第51号古墳から第54号古墳の4基を発見した場所のすぐ東の「ア」地区にあたる。

墳丘は完全に削平され、痕跡をとどめていなかった。周溝の状況からみて、主軸径11m、直交軸径10mの円墳であったと推定する。

石室は南向きに開口し、幅1.4～1.6m、長さは西壁が4m、東壁3mを残し、側壁最下段の長さ40～70cmの石が残る。無袖式の石室であったと推定する。奥壁の石は北に隣接する土坑内に倒れこんでいた。石室は地山を地形の傾斜に合わせて10～50cmばかり掘り込んで構築しており、裏込め石は使われていなかった。石室の遺存状態が良くないわりに遺物は多く、石室内から、馬具、武具、鉄鏃32本など鉄器類、装身具の金・銀環、石製の管玉、丸玉、双孔円板、土製の勾玉、それに須恵器の蓋杯、杯蓋、宝珠つまみの付く逆刺の蓋、壺などが出土した。

周溝は南側を除き巡っており、東西方向14m、南北方向12m程の外径のほぼ円形を呈す。幅は1～3mで深さは最深でも30cm程が残るのみである。多数の石が落ち込んでいた。

(2) 土坑（第21・22図）

35基の土坑があり、そのうち16基は一辺が1.5～2.5mの方形のものである。これらの多くは50～70cmとかなり深い。遺物はなく用途不明である。近世以降のものと推定する。

(3) 集石（第22図）

第55号古墳の北側に2基検出された。いずれも石の間に隙間があり、近世以降のものとする。遺物はない。

(4) 炭焼窯（第23図）

4基が発見された。長楕円形を呈し、下部側に焚き口を設けたのものと、そうでないものがみえる。いわゆる伏せ焼きタイプの炭焼窯である。出土遺物はなく時期の限定ができないが、4次調査以降の調査結果から奈良～平安時代前期に遡るものと推定できる。しかし、今次調査時点では遺物もなく古い時期のものとはわからず、近世から近代のものではないかと疑っていたため、土層図など必要な図面類が作成されなかったものがある。

ア 第1号炭焼窯

「イ」地区北東部にあり、南北に長く、主軸方向を北北東にとる。長さ6.2m、幅1.2～1.6m、深さ35～40cmを測る。ほぼ斜面の傾斜に沿って掘られており、底面の傾斜は10度を示す。下端部に約40cmの張り出しを有し、焚き口になると思われる。土層は上下2層に分かれ、下層は炭化物を含む黒褐色土で、焚き口近くには焼土粒が多く含まれている。出土遺物はなかった。

イ 第2号炭焼窯

「イ」地区西部中央にあり、近接して第3号炭焼窯がある。ほぼ南北に長軸をとり、長さ3.8m、幅1.2～1.5m、深さ5～47cmを測る。下端部に50cmほどの張り出しがあり、焚き口になると思われる。周囲の傾斜に合わ

せて掘られているが、底面の傾斜は若干緩くなるようになっている。覆土には炭化物が混入していた。土層図は作成されなかった。出土遺物はない。

ウ 第3号炭焼窯

「イ」地区西部にあり、近接して第2号炭焼窯がある。やや上部が直線的な長楕円形を呈し、長軸を北東にとる。長さ2.7m、幅1.1～1.6m、深さは最大で32cmを測る。周囲の傾斜にあわせて掘られているが、底面の傾斜のほうが緩くなっている。焚き口とみられる突出部は確認できなかった。覆土には炭化物が混入していた。土層図は作成されなかった。出土遺物はない。

エ 第4号炭焼窯

「ウ」地区北西隅にあり、北部は調査地区外にかかっている。南北に長軸をとると推定され、平面形は方形ないし長方形を呈すと考えている。検出できた範囲では南北2.35m、幅1.3mを測り、深さは1～5cmと浅い。南辺の中央に40cmの張り出しがあり、焚き口であろう。遺構としては非常に貧弱で、土層図は作成されなかった。出土遺物はない。

(5) ピット

計18基がある。近世以降のものであろう。

(6) 鍬形原砦址関連の遺構（第24図）

今回の霊園拡張地から大きく離れるが、中山丘陵頂部にマレットゴルフ場造成の計画があり、トレンチ調査を行った。基本的に等高線に直行するようにトレンチを7本入れ、このうちトレンチ5とトレンチ7から3本の溝跡を検出した。T5には、幅2.6m、深さ1.3mの1号溝、その東側15mに、幅1.1m、深さ1.0mの2号溝を検出した。また、T7に幅4.0m、深さ1.2mの3号溝を検出した。これらの溝は断面V字状に掘られ、掘り上げた土を溝脇に積み上げた形跡があり、転入した石と土以外に遺物はなく、水の流れた様子も見えなかった。おそらく、小規模な山城の空堀であったと推定する。1号溝と3号溝は連続するような位置にあり、同一のものとするとき等高線に沿って長さが27m以上の堀になる。この一帯は昭和40年代の第1期造成の際に、地形を大きく改変されたしまったと思われるが、一部の遺構が残存していたことは幸いであった。

(7) 第Ⅲ次調査のまとめ

今次調査の主な成果は、2基の古墳の調査と、4基の炭焼窯の発見、それに鍬形原砦関連の遺構が調査できたことである。2基の古墳のうち第38号古墳は、当初は現状保存をする予定のものであっただけに、残存状態は他の湮滅古墳と比べてかなり良い状況であった。しかし、石室内からの遺物は多くなく、主な遺物は周溝内から出土した。これに比べて、第55号古墳は石室の側壁最下部を残すのみであったが、石室内から多数の土器や鉄器の良好な遺物出土が目立った。

炭焼窯は、新しい時代のものであろうとの先入観の元で調査されたため、調査記録が一部、不十分なことは先にも触れたが、奈良～平安に遡る可能性のあるものが4基まとまって存在したのを発見したことは意義深い。今回の中山霊園拡張予定地全体にはどのくらい炭焼窯が展開しているのか、またどのような小群をなしているのか、興味の湧くところである。

鍬形原砦関連遺構として把握した溝状遺構は、おそらく空堀の埋没したもので、今回の調査地点以外にも、現況の地形を見ると、まだ遺構が残っているものと思われる。今のところ、開発計画などはないので現状で保存されており問題はないであろう。

4 第Ⅳ次調査で発見された遺構（平成5年度）

(1) 土坑

計25基を検出。22号を除き調査できた。以下では、特徴的な土坑をあげる。

1号は拳大の礫の詰まったもの、2・3号も方形であるが底に直径3～5cmの生木がしかれていた。覆土はロームブロックと暗褐色土とが互層となり人為的埋没であることを示している。15号もまた、方形でロームブロックを覆土となしていた。楕円形の19号は2号炭焼窯の西にあり、黒褐色と暗褐色の覆土は、ここでは他に炭焼窯にあるのみなので、2号炭焼窯の付属施設であろう。13号は今回唯一のロームマウンドである。なお、これらの土坑からの土器類の出土はなく、19号を除き時期は不明である。

(2) 炭焼窯 (第23図)

2基が発見された。いずれも隅丸長方形の平面形を呈し、焚き口の突出部を有す。

1号は、調査区北部中央にあり、規模485×175cm、深さは25～55cmである。2号は急傾斜地にあり、1号よりやや小形で430×165cm、深さ33～55cmを測る。両者とも等高線に対し、やや斜めに造られ、長軸の下方部に1号は70cm、2号は80cmの焚き口の突出を有す。逆の上部側には1号が15cm、2号が10cmの煙出しの突出を設けている。

窯床は、焚き口周辺の緩やかな凹部を除き、煙出しまで斜めになるが、平坦で一部は焼土化して堅い。覆土中には多量の炭化材片と焼土ブロックが、主に焚き口周辺、あるいは煙り出し部に遺存する。また、特記すべきものとして、1号内部及びその周辺から須恵器甕を中心として、須恵器杯B、同蓋、土師器甕などを得た。10点あまりの小片ではあるが、平安時代前半を下らない資料であり、炭焼窯の操業時期を知るうえで非常に貴重である。

(3) ピット

直径20～50cm程のものをここに含め、計9基を調査した。ほとんどが周囲の土坑と同色土を覆土としている。遺物を伴うものはなく、遺構に特徴的なものもみられない。

(4) 暗渠

計5本を検出した。それぞれに相違がみられる。

1号は幅80cm、長さ10mを調査した。荒い掘り方で、中に詰めた礫に大小があり、詰め方にも粗密が目立つ。2号は途中で1本を合流させ、直線的に造られている。断面両側には丁寧に石を立て並べており、約10mが追えた。3号は幅1m前後で等高線と直交し、傾斜の強い部分の16mを検出した。この3号の下部に4号がある。幅は50cmで、それよりやや太いもう1本と平行するように交差し、新旧関係をなしている。位置的にみて、この3・4号は同一のものとなろう。5号は幅3～4m、谷状の自然地形を大小の石で埋め、上部には周囲と同色の土がかけられ、容易には暗渠とわからない程であった。石の間には少量の水も流れていた。この5号の周囲には1号製炭址もあり、土器片も若干みられた。

(5) 溝

調査区南部に1本を検出した。谷の最も低い部分にあたり、下部で末広がりとなり、検出面に礫は見当たらない。断面観察はできなかったが自然流路であろう。

(6) 第38号古墳

昨年度に完掘し、その後の工事で主体部は破壊されたが、念のため今回調査範囲に含まれる西側周溝一帯の再検出を行った。その結果、若干の遺物の出土をみた。

(7) 第IV次調査のまとめ

今回の調査地は南北の比高差14m、斜度13～18度の場所である。同程度の傾斜を持ち、大小の礫がゴロゴロしていた一昨年場所の東隣であり、予想どおり南部下方では遺構も少なかった。しかし、高所の北部から中央部にかけて2基の炭焼窯を調査することができ、この炭焼窯が平安時代以前に遡るものであることが判明した。

さらに北の上部では昨年も今回と同様の4基の炭焼窯を調査している。また、昨年、鍬形沢で発見した奈良時代と推定される須恵器の窖窯らしきものも考え合わせると、当地が古墳時代のみならず、奈良・平安時代には、墓域のほかに生産域として機能していた、重要な場所であったことがわかる。

第2表 中山古墳群 I～XIII次調査発見の古墳一覧表

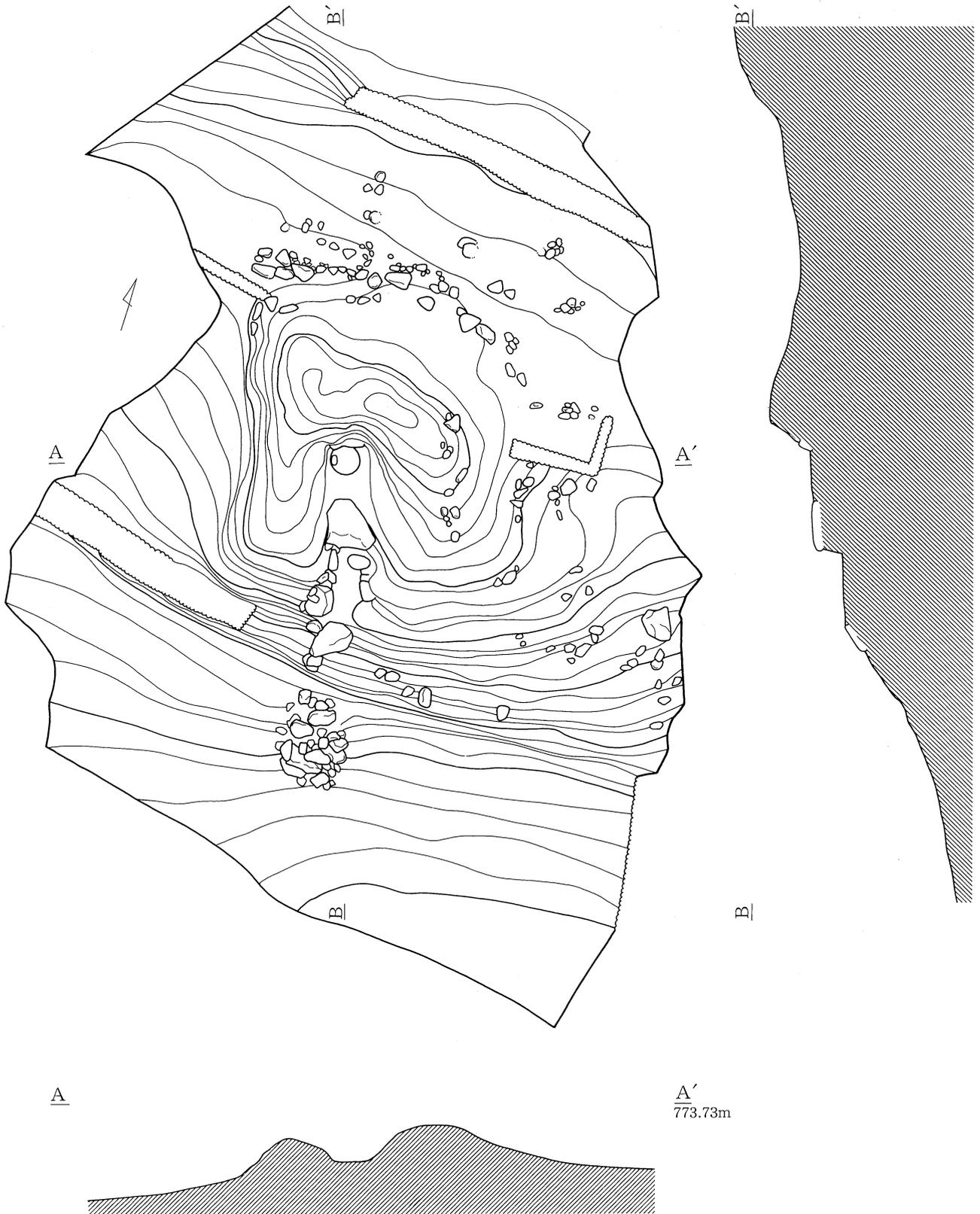
古墳 番号	次 数	地 区	石 室 (m)			墳 丘 (m)			周 溝 (m)		出土遺物	備 考
			形態	幅	奥行き	形態	高さ	直径	幅	深さ		
16	I	あ	横穴式	未計測	未計測	円墳	1.4～4.8	約15	1.8～2.6	最深0.8	須恵器杯A・杯B・長頸壺、土師器小形甕・甕	墳丘後ろ側の み調査、現状 保存
38	III	オ	横穴式	1.5	7.1	円墳	残1.0～1.5	14×12	2.5	最深0.5	須恵器蓋杯・杯蓋・鉢・高杯・ 提瓶・甕・長頸壺、土師器杯・ 高杯、金属製品（武器・馬具・ 刀子・耳環）	調査前、石室 が地表に露出
49	I	ぬ	横穴式	未計測	未計測	円墳	残1.0	15×12	未計測	未計測	須恵器杯、蓋、高杯、壺	周溝の一部の みトレンチ調 査、現状保存
50	I	け こ	不明	不明	不明	円墳	不明	約13	0.7～1.1	最深0.21	金属製品（鉄剣・刀子）	
51	I	つ	横穴式	不明	不明	円墳	不明	7～8	0.6～0.9	最深0.15	土師器杯・高杯	湮滅
52	I	て	横穴式	1.6	残4.6	円墳	不明	11×9	0.6～1	最深0.28	土師器杯・高杯、金属製品 （直刀2・鏃・刀子・耳環・ 不明鉄製品）	湮滅。53号古 墳に切られる
53	I	て	横穴式	1.7	残3.7	円墳	不明	10.5×6.5	0.9～1.6	最深0.3	須恵器蓋杯・杯蓋、土師器 杯・小形鉢・台付甕、金属 製品（鏃・刀子・耳環）	湮滅。52号古 墳を切る
54	I	て と	横穴式	1.7	3	円墳	残1.0	9.0	0.6～0.8	最深0.2	須恵器蓋杯・杯？・蓋、土 師器高杯？、金属製品（鏃、 刀子？）	石室高さ残1m
55	III	ア	横穴式	1.4～1.6	残4.0	円墳	不明	11×10	1～3	最深0.3	須恵器蓋杯・杯蓋・蓋・平 瓶・提瓶・フラスコ瓶・長 頸壺・甕、土師器杯、玉類（勾 玉・管玉・白玉・双孔円板）、 金属製品（鏃35点・刀子・釘・ 耳環）	湮滅
57	IX	-	横穴式	1.2～1.5	残5.2	円墳	不明	11×8	3～4	最深0.5	須恵器杯、蓋、高杯、壺	湮滅。小ぶり な墳丘に大き な周溝

※墳丘直径の数字は前が主軸長、後が直交軸長を示す

第3表 鋳形原遺跡 I～IV次調査発見の炭焼窯一覧表

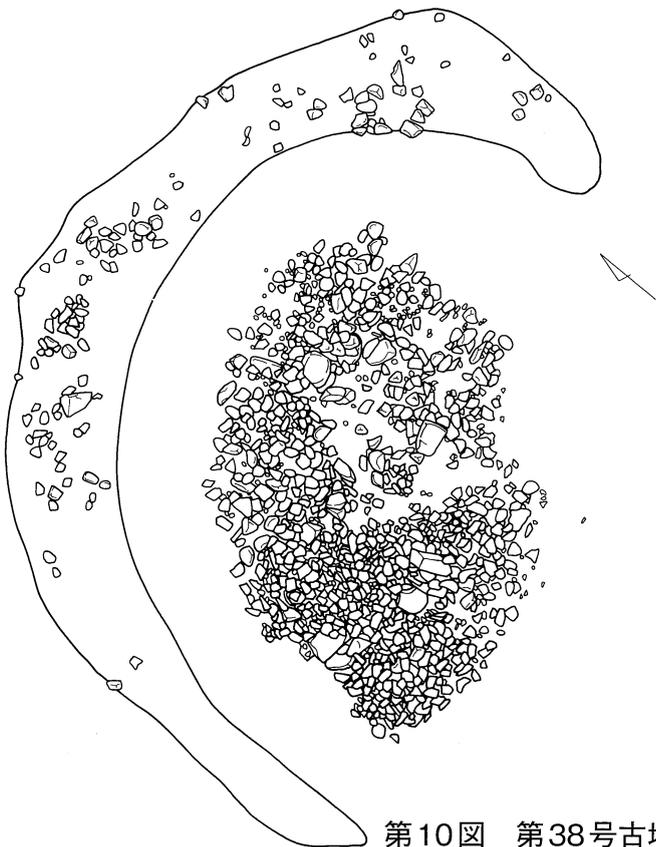
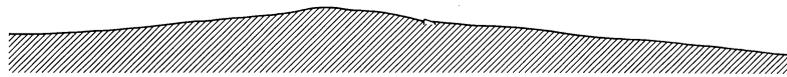
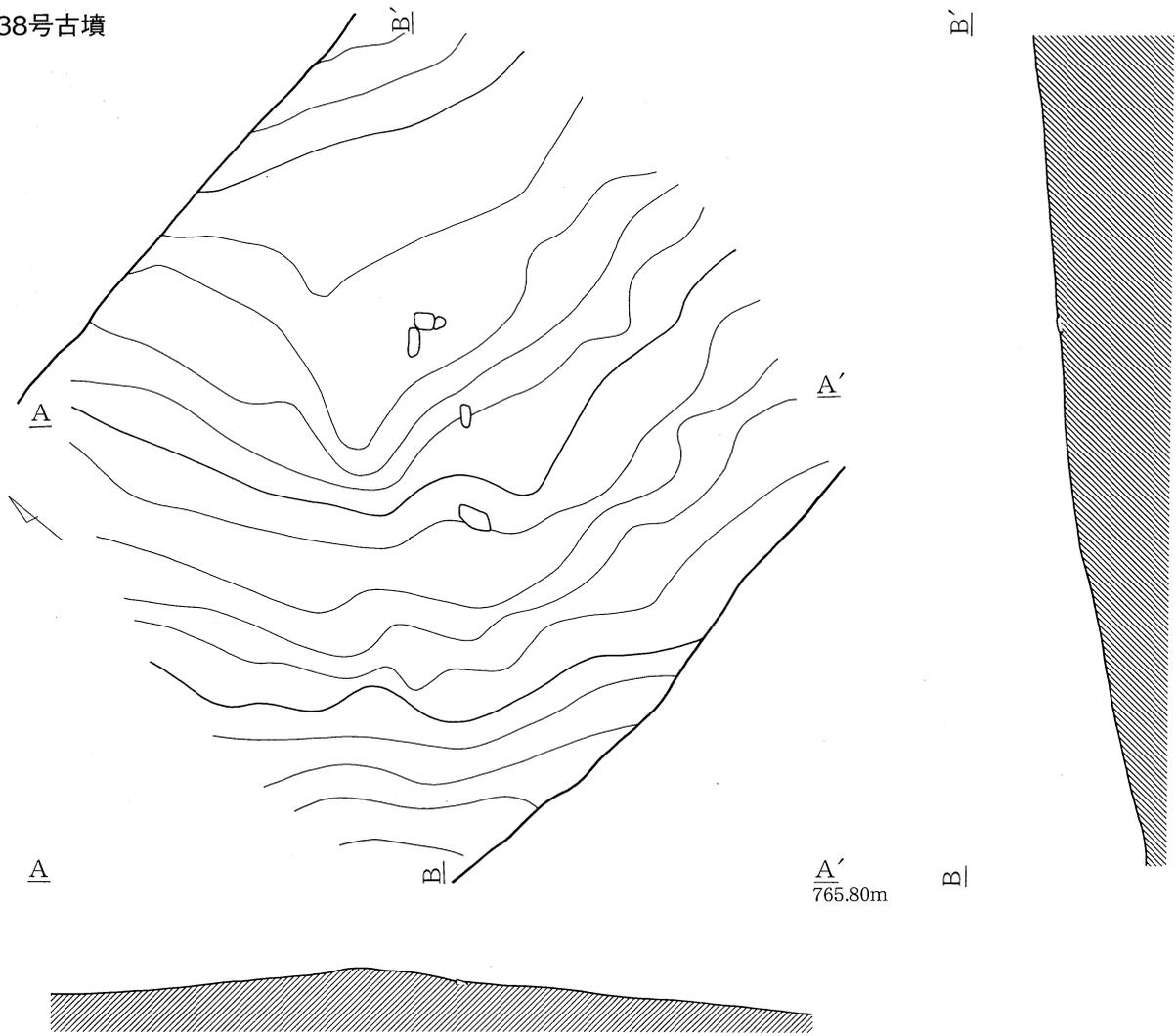
次 数	番 号	地 区	形 態 (m)				出土遺物	備 考
			形状	長さ	幅	深さ		
I	1	ぬ	長方形	3.2	1.4～1.6	最深0.5		
III	1	イ	長楕円形	6.2	1.2～1.6	0.35～0.4		40cmの張出し
III	2	イ	長楕円形	3.8	1.2～1.5	0.05～0.47		50cmの張出し
III	3	イ	長楕円形	2.7	1.1～1.6	最深0.32		
III	4	ウ	長方形	2.35	1.3	0.01～0.05		40cmの張出し
IV	1		隅丸長方形	4.85	1.75	0.25～0.55	須恵器杯B、土師器甕	70cmの張出し
IV	2		隅丸長方形	4.3	1.65	0.33～0.55	土師器杯	80cmの張出し

第16号古墳

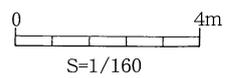


第9図 第16号古墳

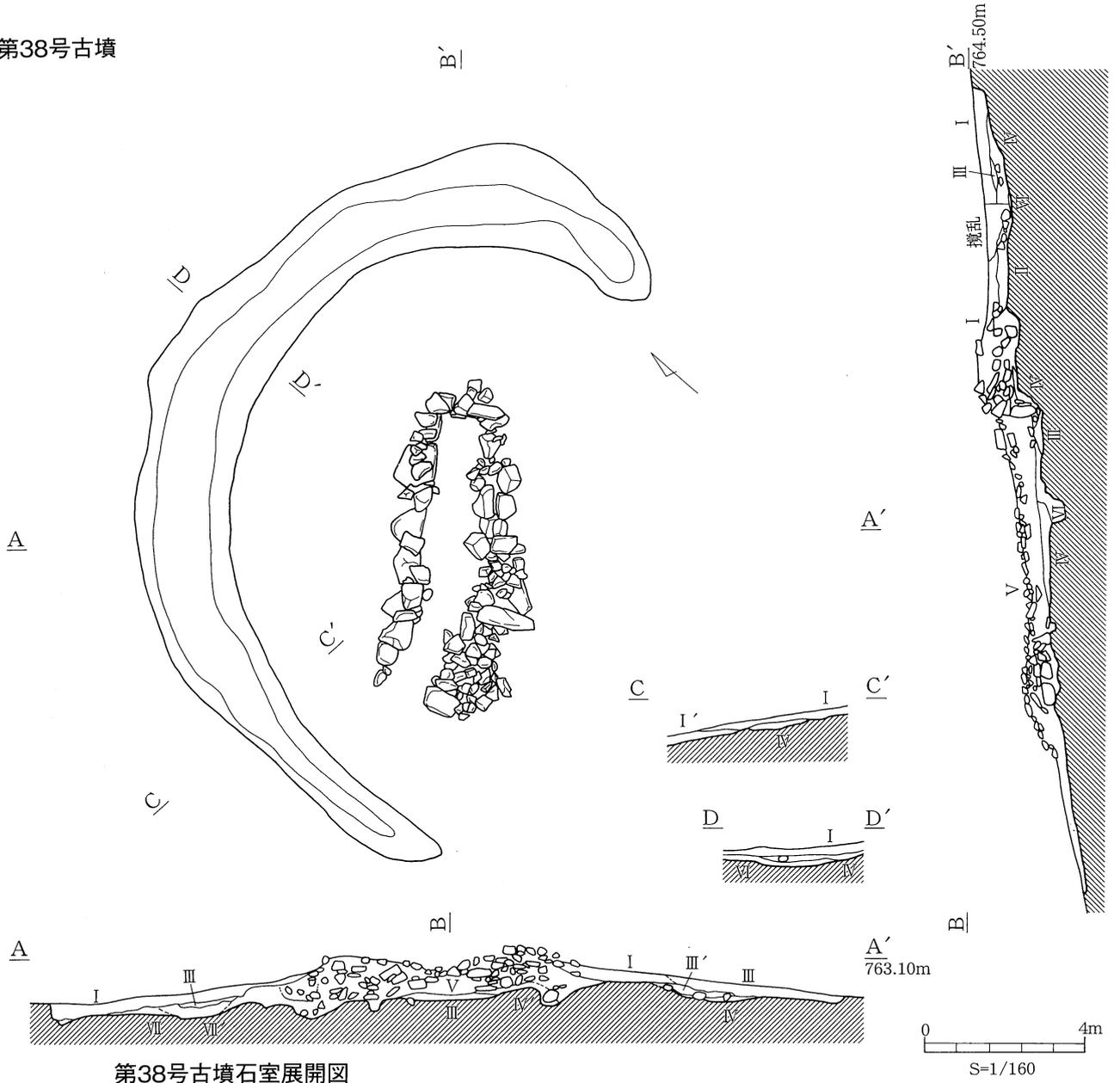
第38号古墳



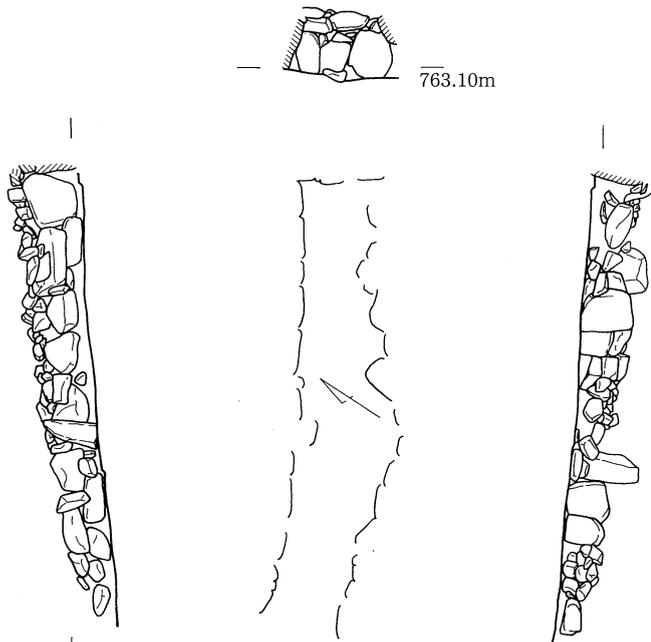
第10図 第38号古墳 (1)



第38号古墳



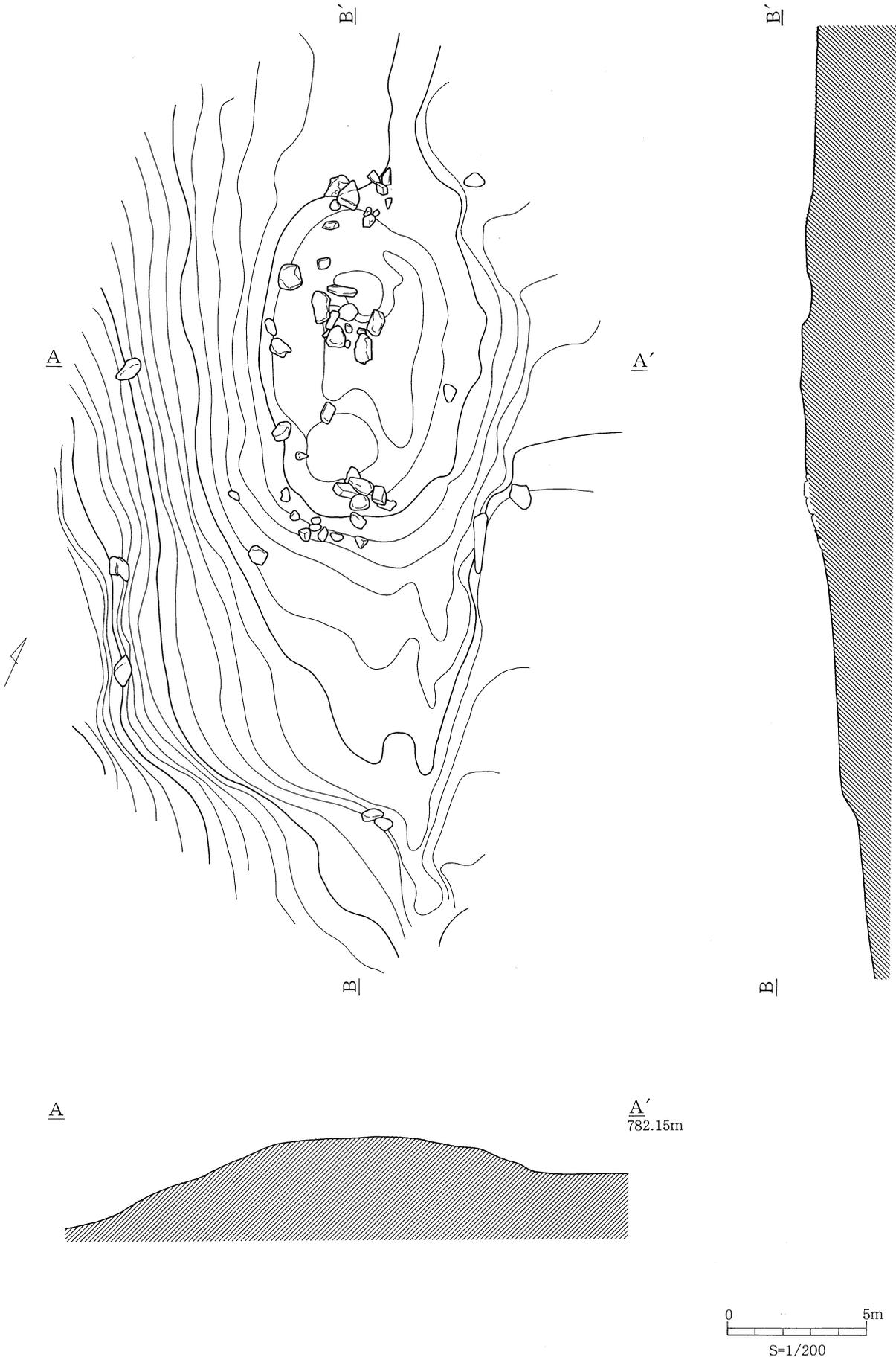
第38号古墳石室展開図



第11図 第38号古墳 (2)

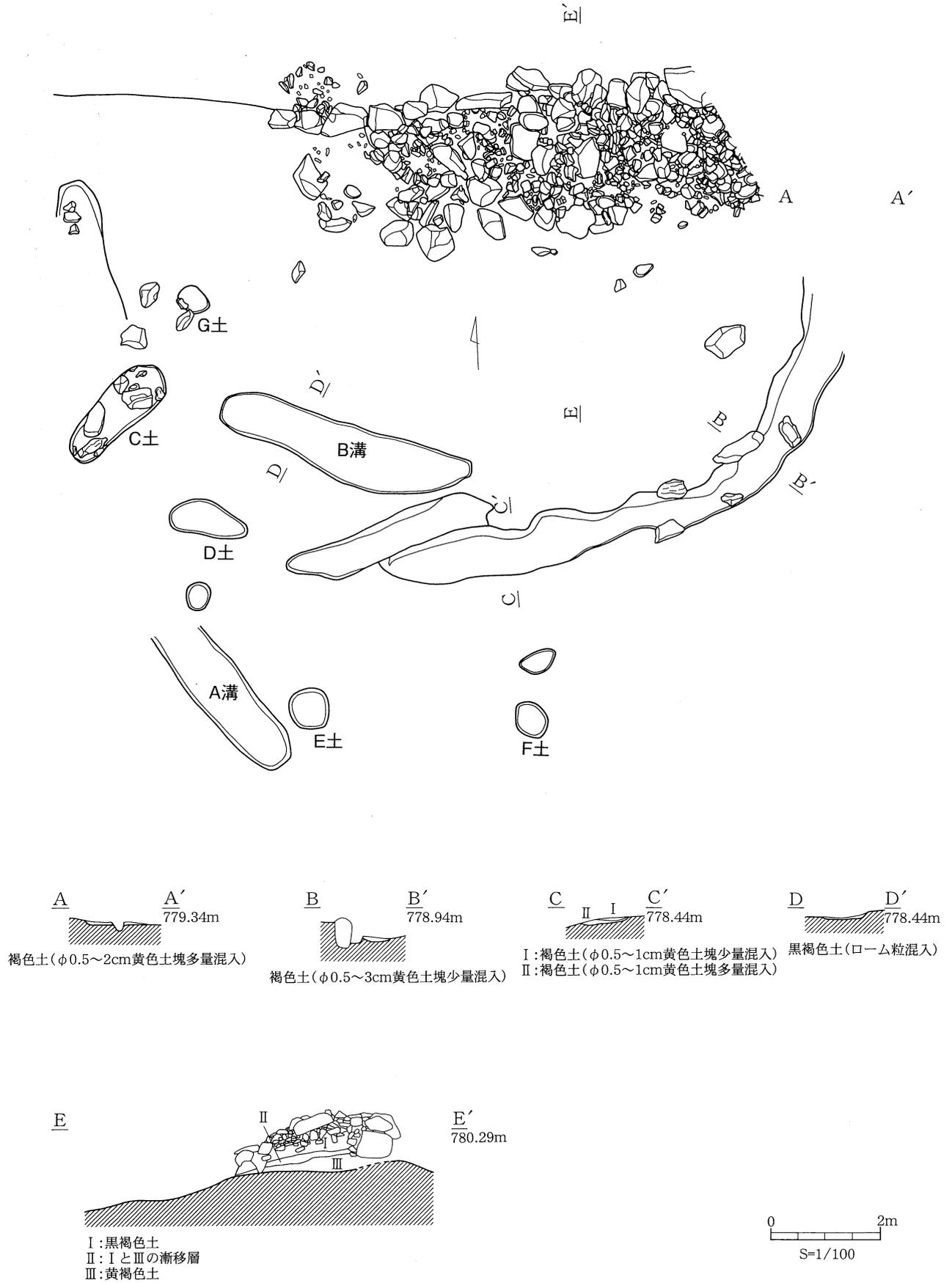
- I : 褐色土(耕土)
- I' : 褐色土(ローム塊混入)
- II : 褐色土塊
- III : 暗褐色土
- III' : 暗褐色土(ローム塊混入)
- IV : 黒褐色土
- IV' : 黒褐色土(ローム塊混入)
- V : 暗褐色土(ローム粒、ローム塊)
- VI : 暗黄褐色土(ローム塊混入)
- VII : 黄褐色土
- VII' : 黄褐色土(やや黒い)

第49号古墳



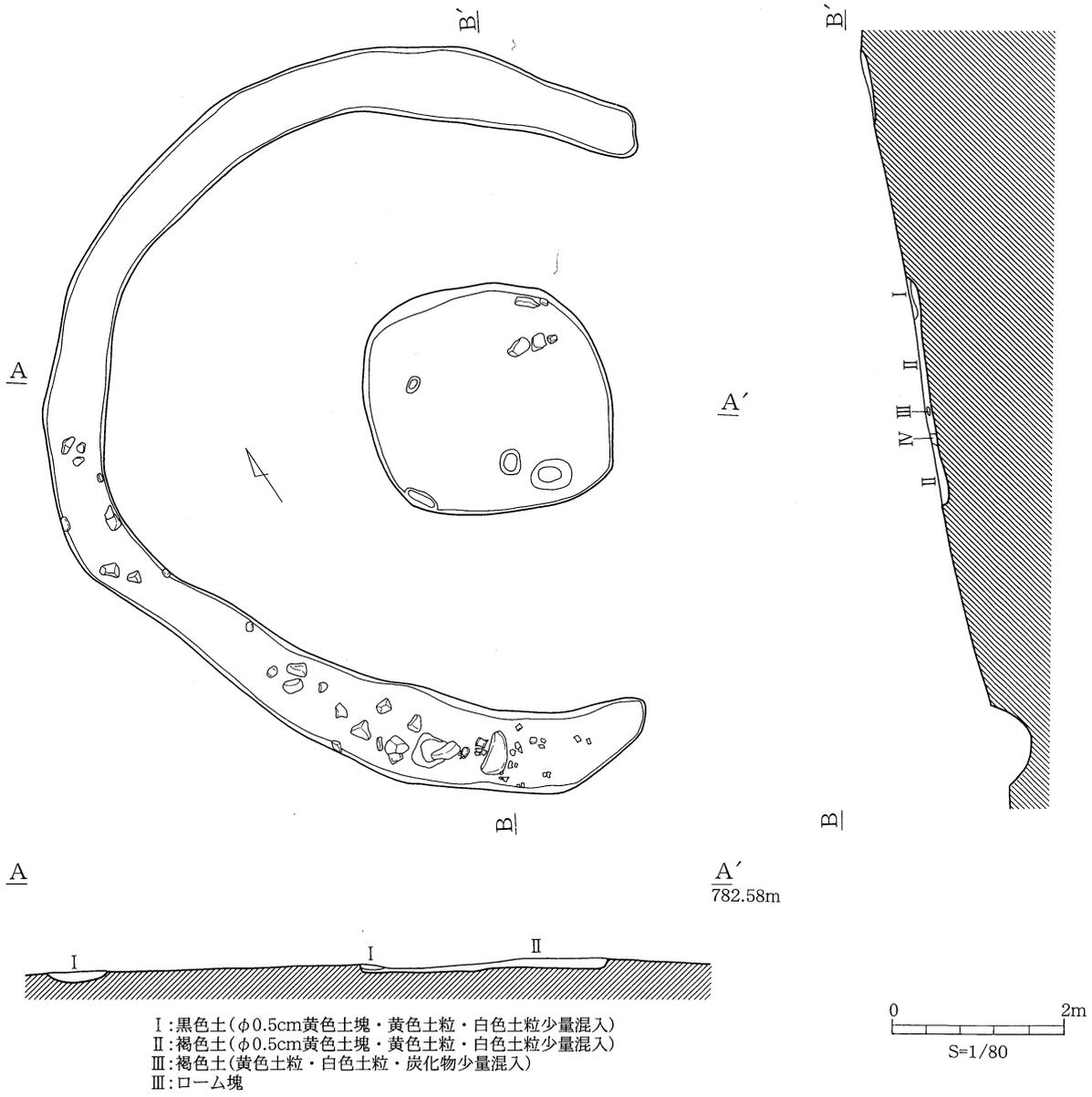
第12図 第49号古墳

第50号古墳



第13図 第50号古墳

第51号古墳

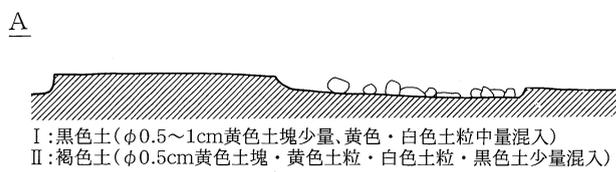


第14図 第51号古墳

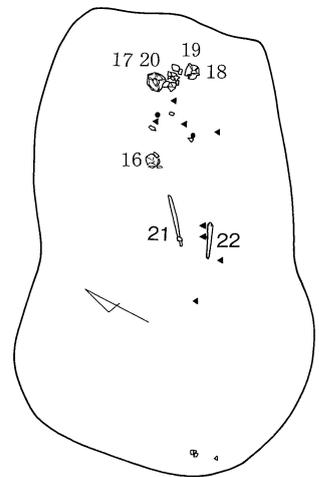
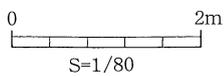
第52号古墳



第52号古墳遺物出土状況



A' 785.24m



- 耳環
- 鉄器
- 太字は鉄器・細字は土器

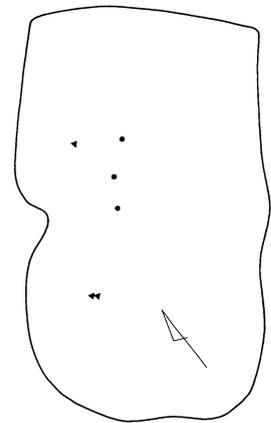
第15図 第52号古墳

第53号古墳

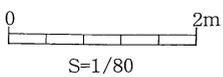


I: 黑色土(φ0.5~1cm黄色土塊少量、黄色・白色土粒中量混入)
 II: 褐色土(φ0.5cm黄色土塊・黄色土粒・白色土粒・黑色土少量混入)

第53号古墳遺物出土状況

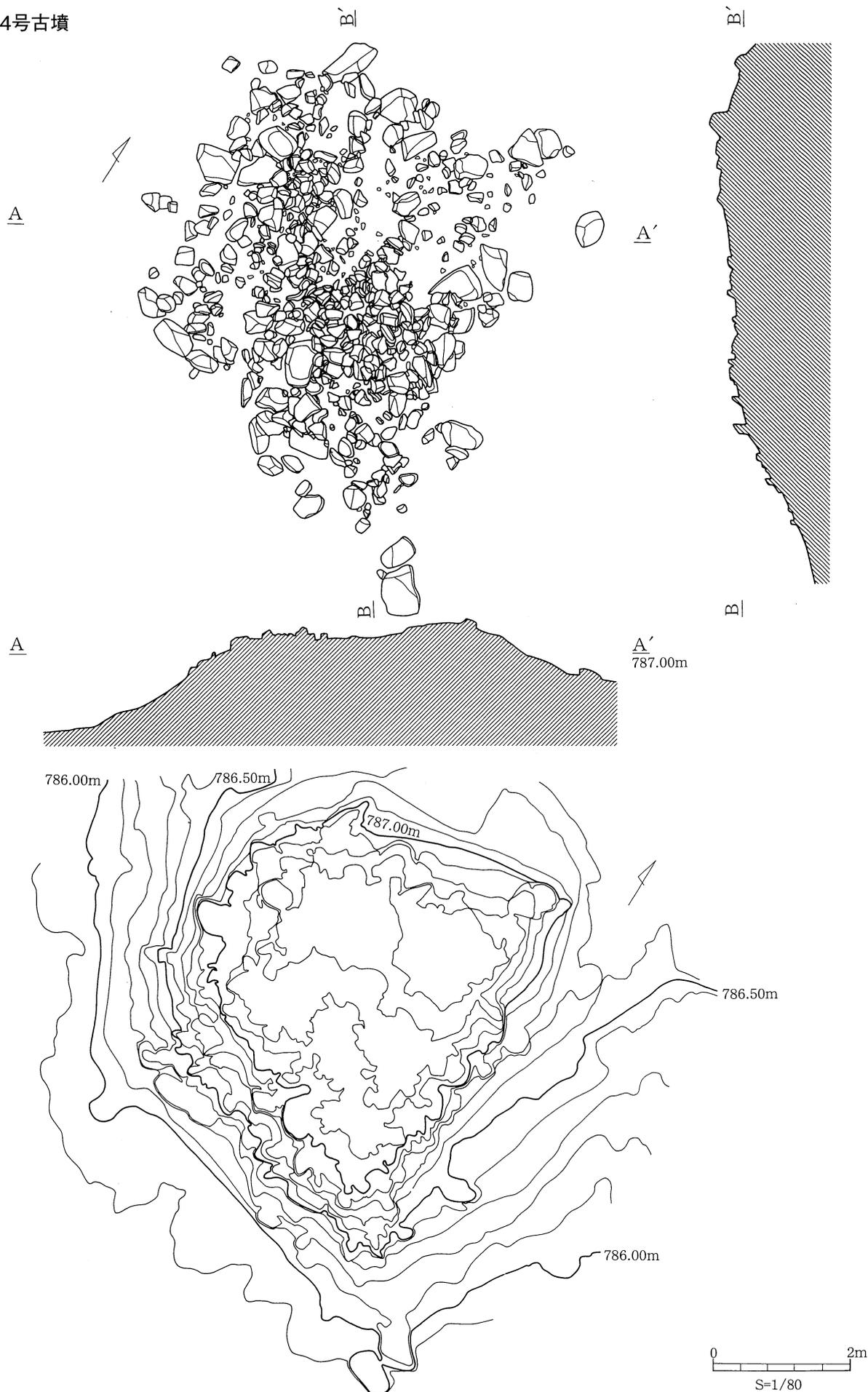


• 耳環
 ▲ 鉄器



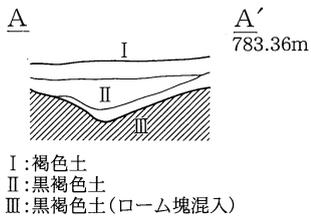
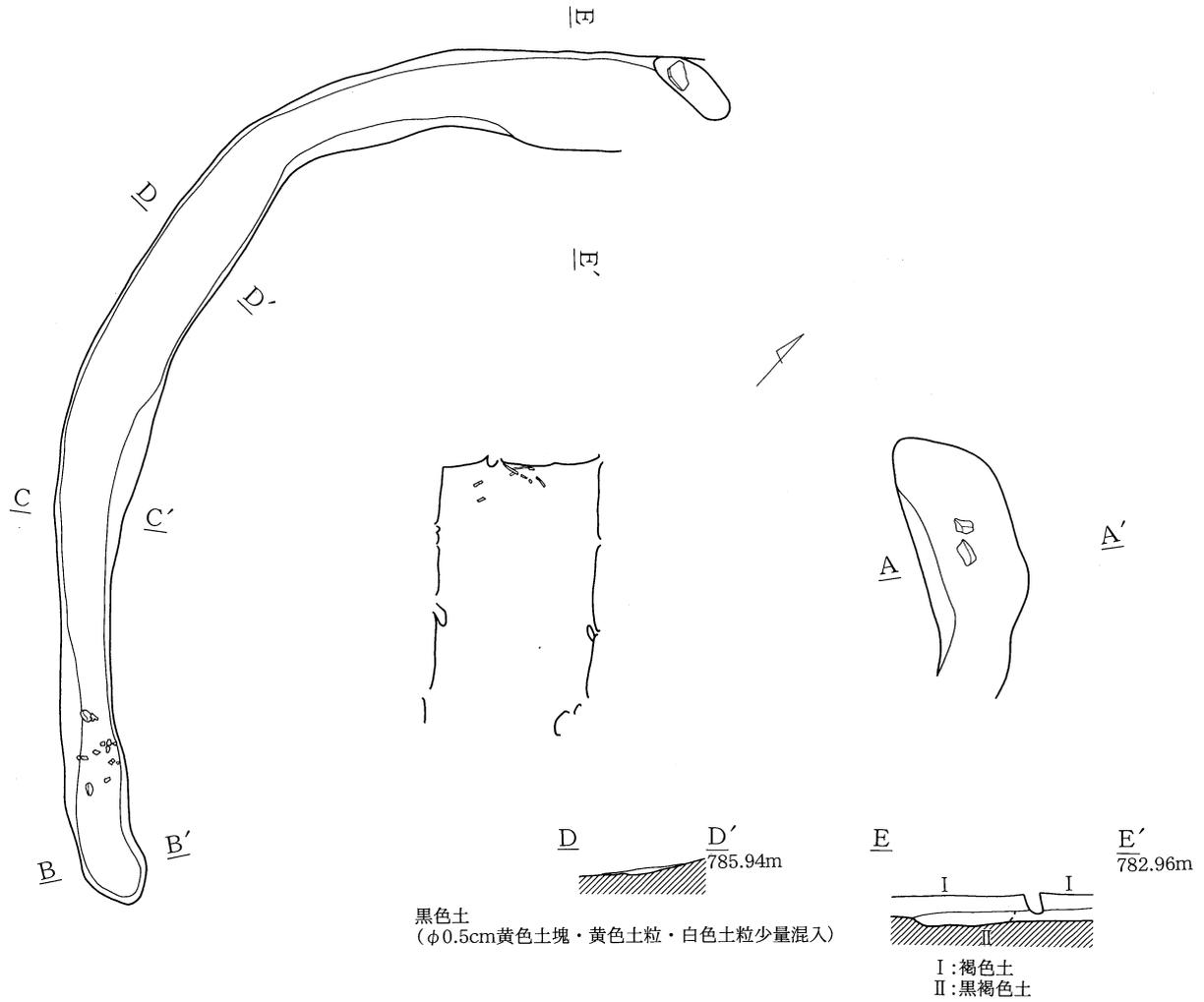
第16図 第53号古墳

第54号古墳



第17图 第54号古墳 (1)

第54号古墳



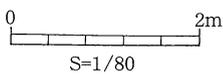
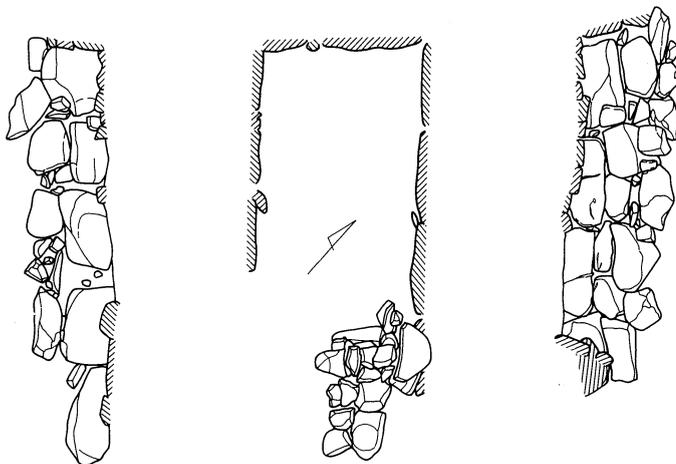
第54号古墳石室展開図



- I:黑色土
(ϕ 0.5cm黄色土塊少量、黄色・白色土粒中量混入)
- II:褐色土
(ϕ 0.5cm黄色土塊・黄色土粒・黄色土粒・黑色土少量混入)

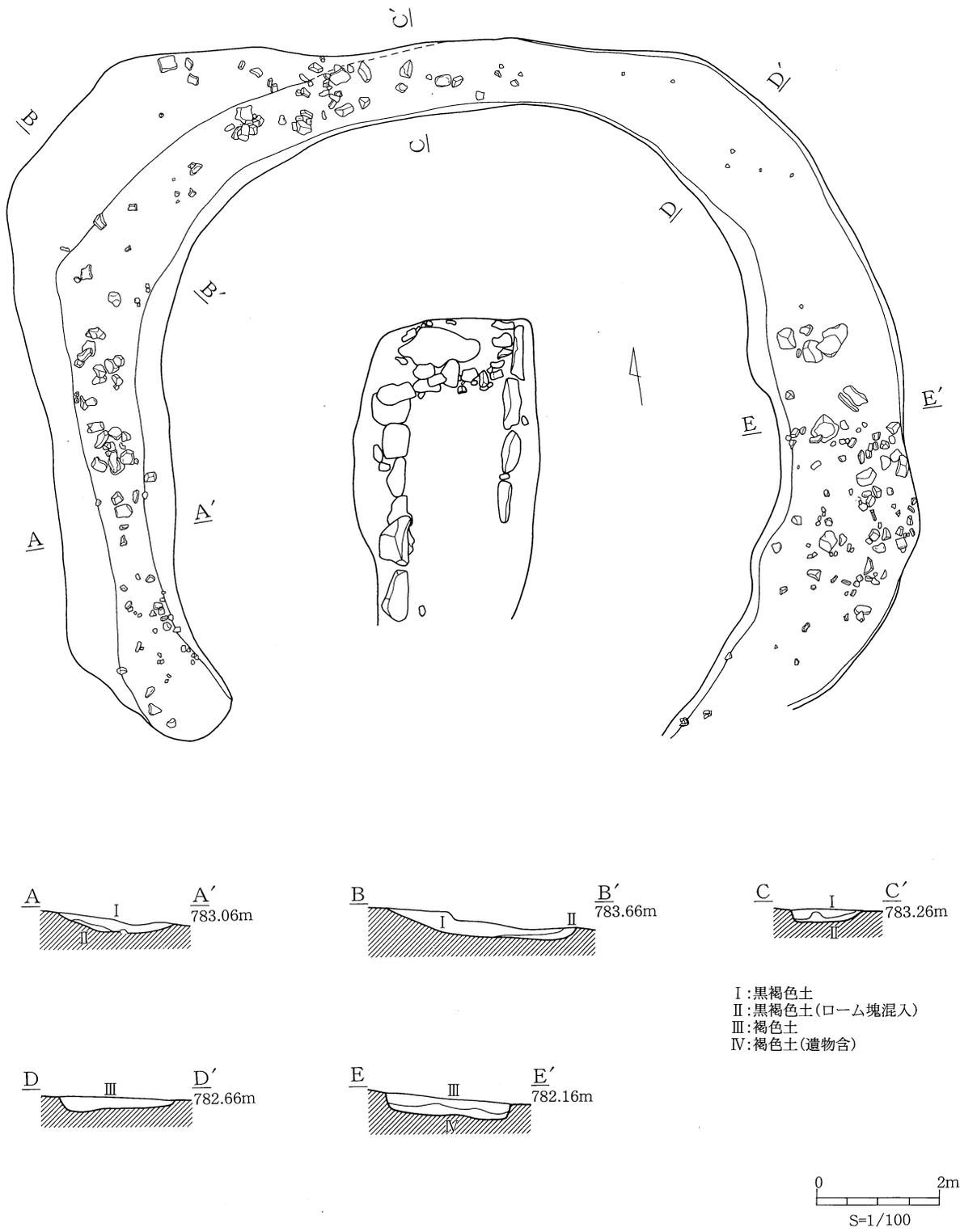


- I:黑色土(ϕ 0.5cm黄色土塊・黄色土粒・白色土粒少量混入)
- II:褐色土(ϕ 0.5cm黄色土塊・黑色土少量混入)



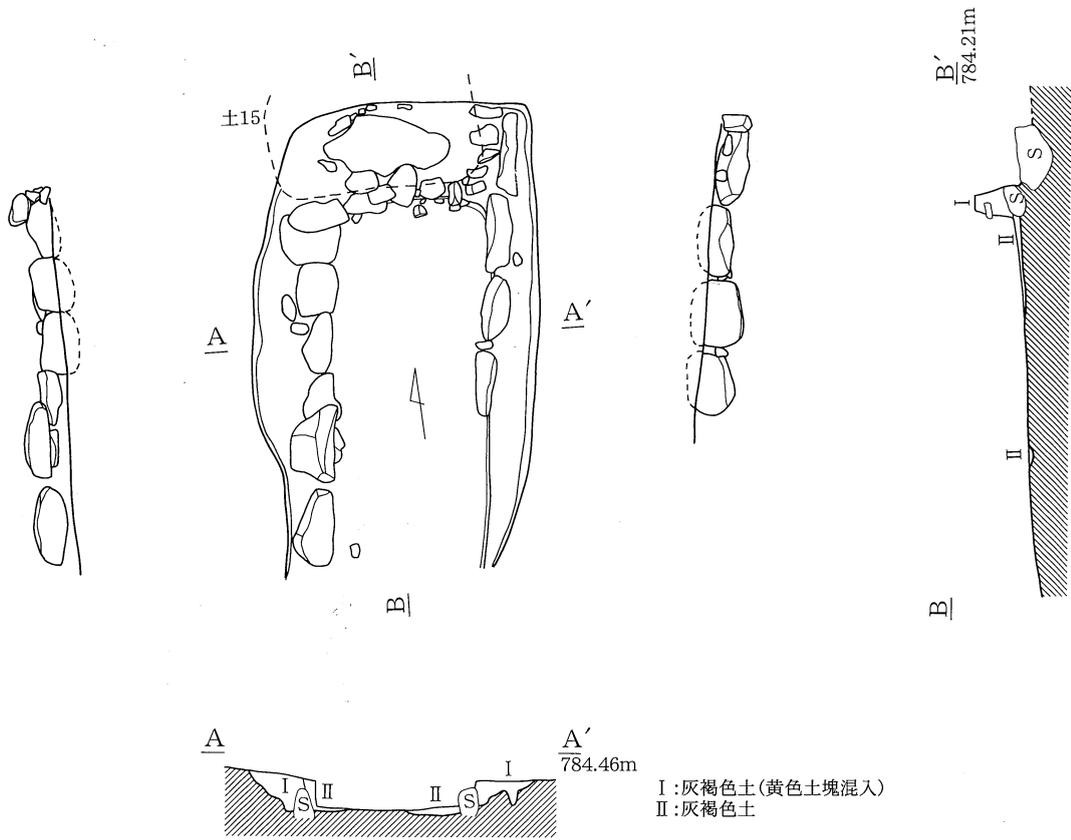
第18图 第54号古墳 (2)

第55号古墳

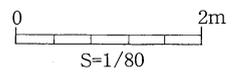
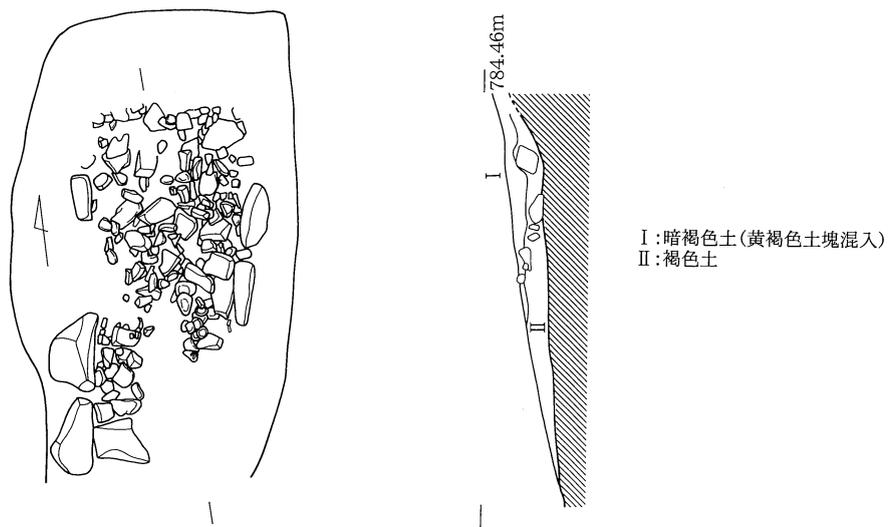


第19図 第55号古墳 (1)

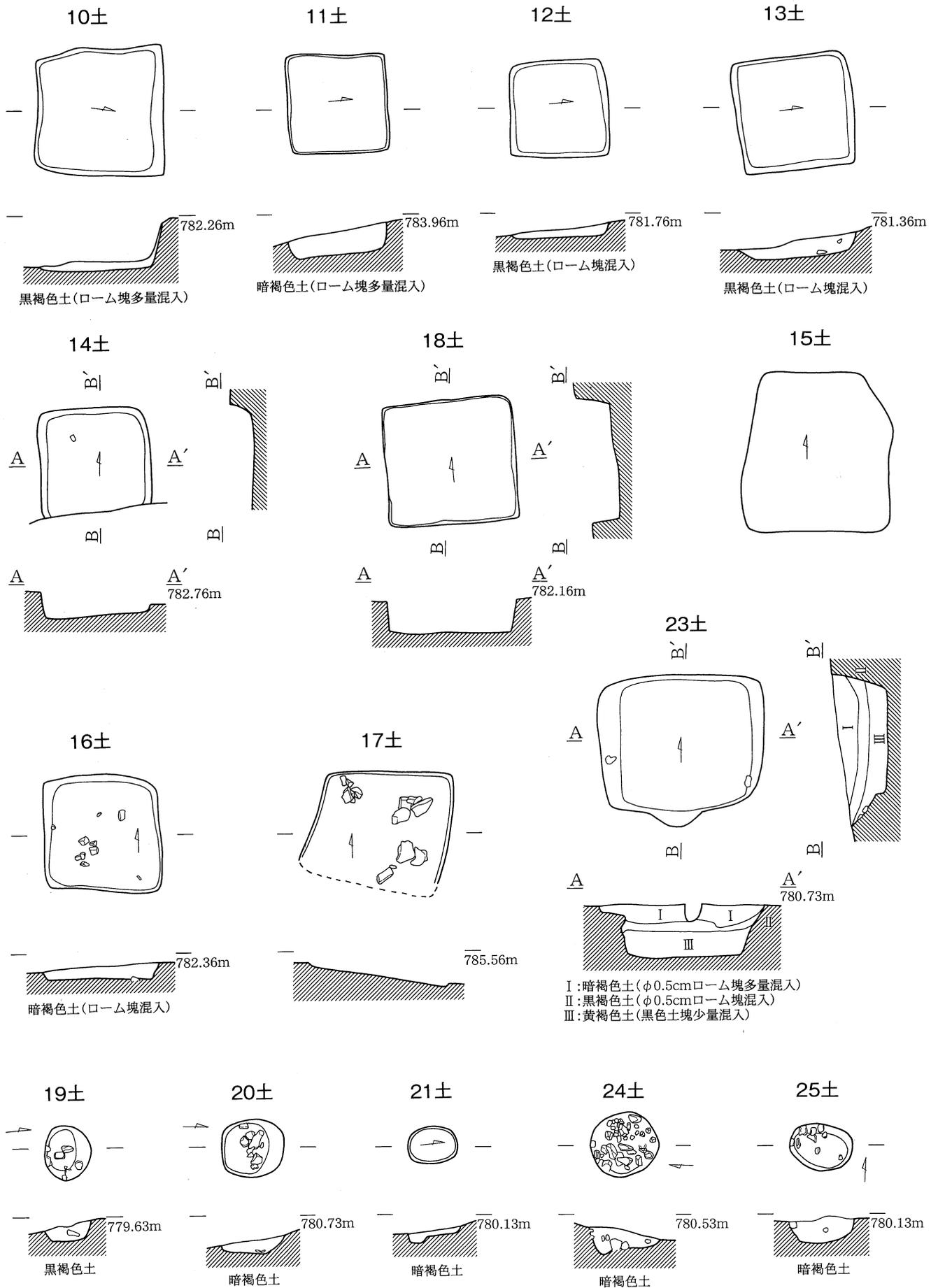
第55号古墳石室展開図



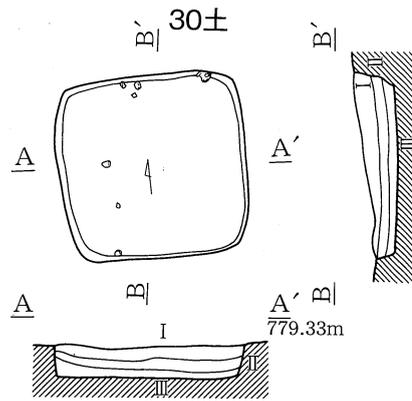
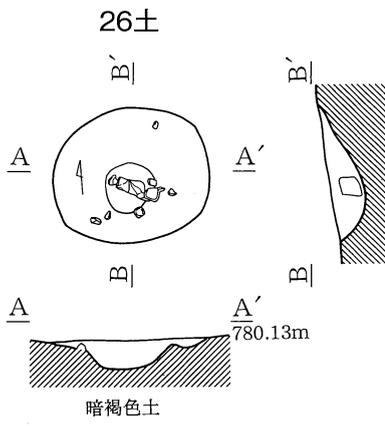
第55号古墳石室内礫出土状況



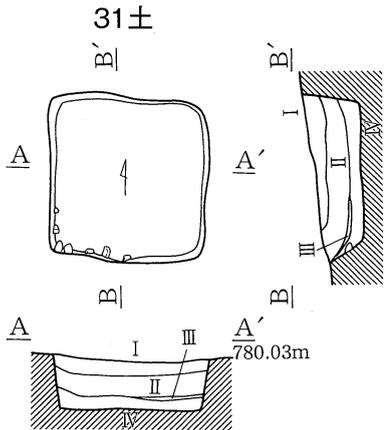
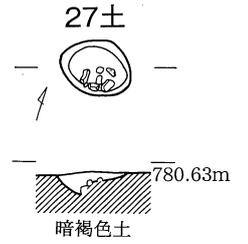
第20図 第55号古墳 (2)



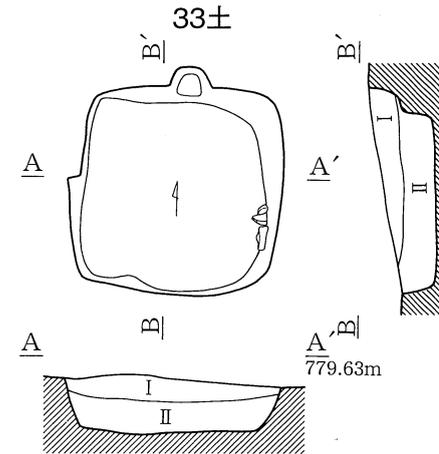
第21図 Ⅲ次調査土坑(1)



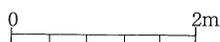
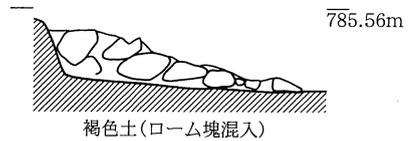
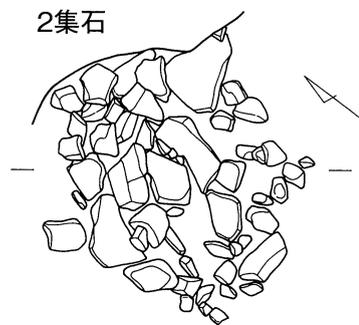
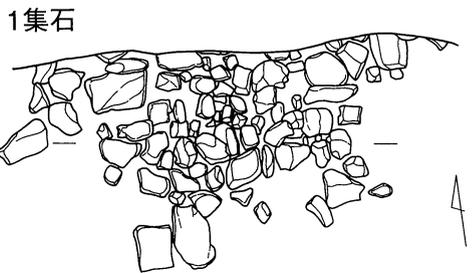
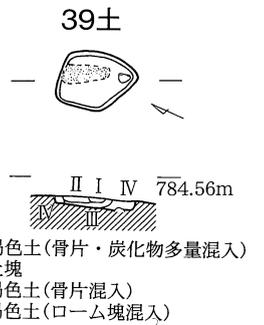
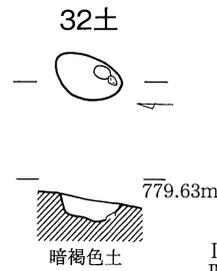
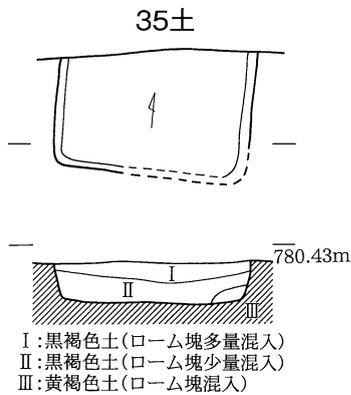
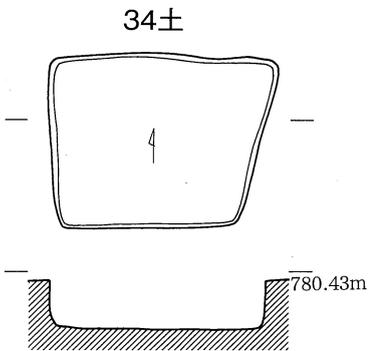
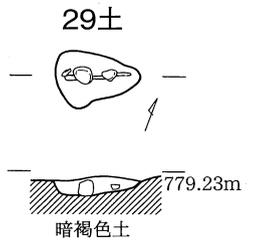
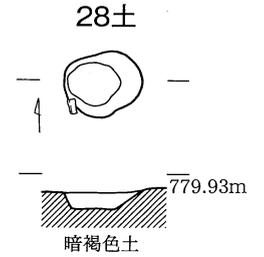
I: 暗褐色土
II: 暗褐色土 (φ5cmローム塊多量混入)
III: 暗褐色土 (遺物含)



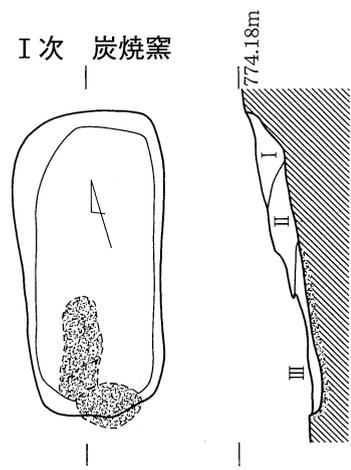
I: 暗褐色土
II: 暗褐色土 (ローム塊多量混入)
III: 暗褐色土 (Iより黒い)
IV: 黄褐色土 (暗褐色土塊少量混入)



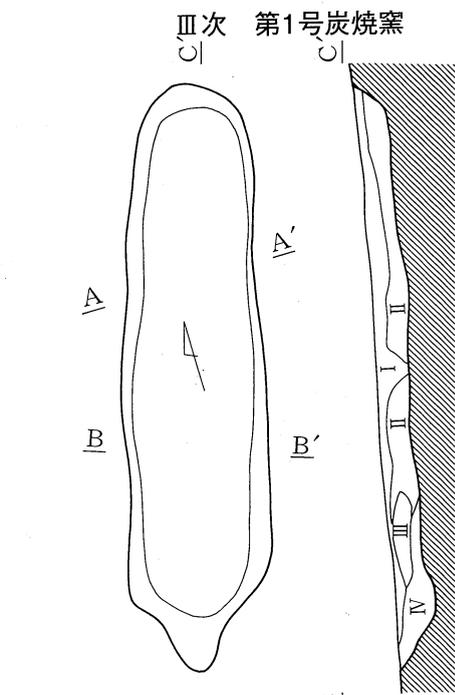
I: 暗褐色土 (ローム塊少量混入)
II: 暗褐色土 (ローム塊多量混入)



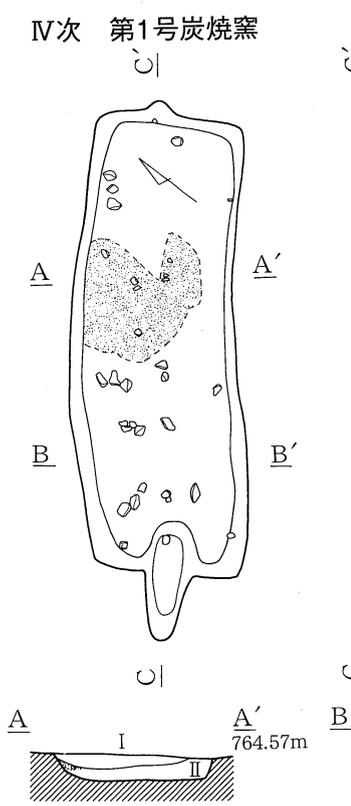
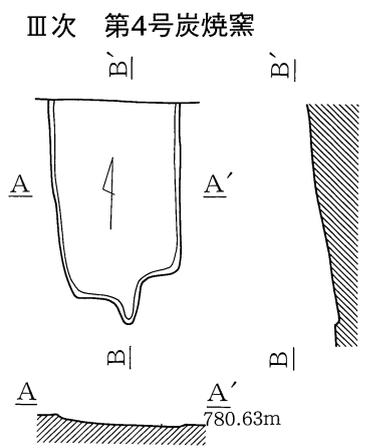
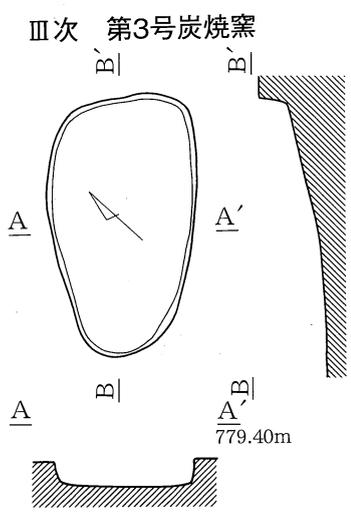
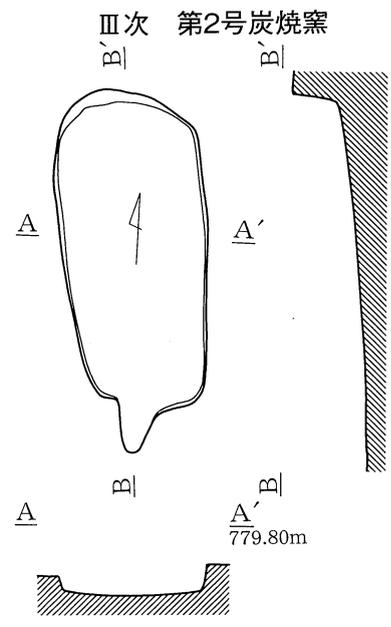
第22図 Ⅲ次調査土坑 (2)・集石



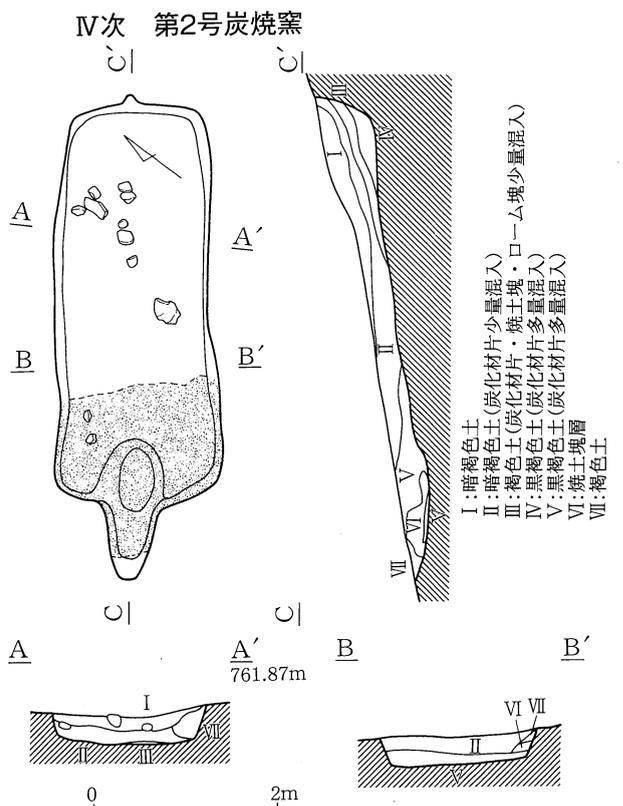
I: 褐色土
 II: 暗褐色土(炭少量混入)
 III: 黑褐色土(炭多量混入)



I: 褐色土
 II: 黑褐色土(炭化物・ローム塊混入)
 III: ロームブロック層
 IV: 黑褐色土(焼土塊多量混入)

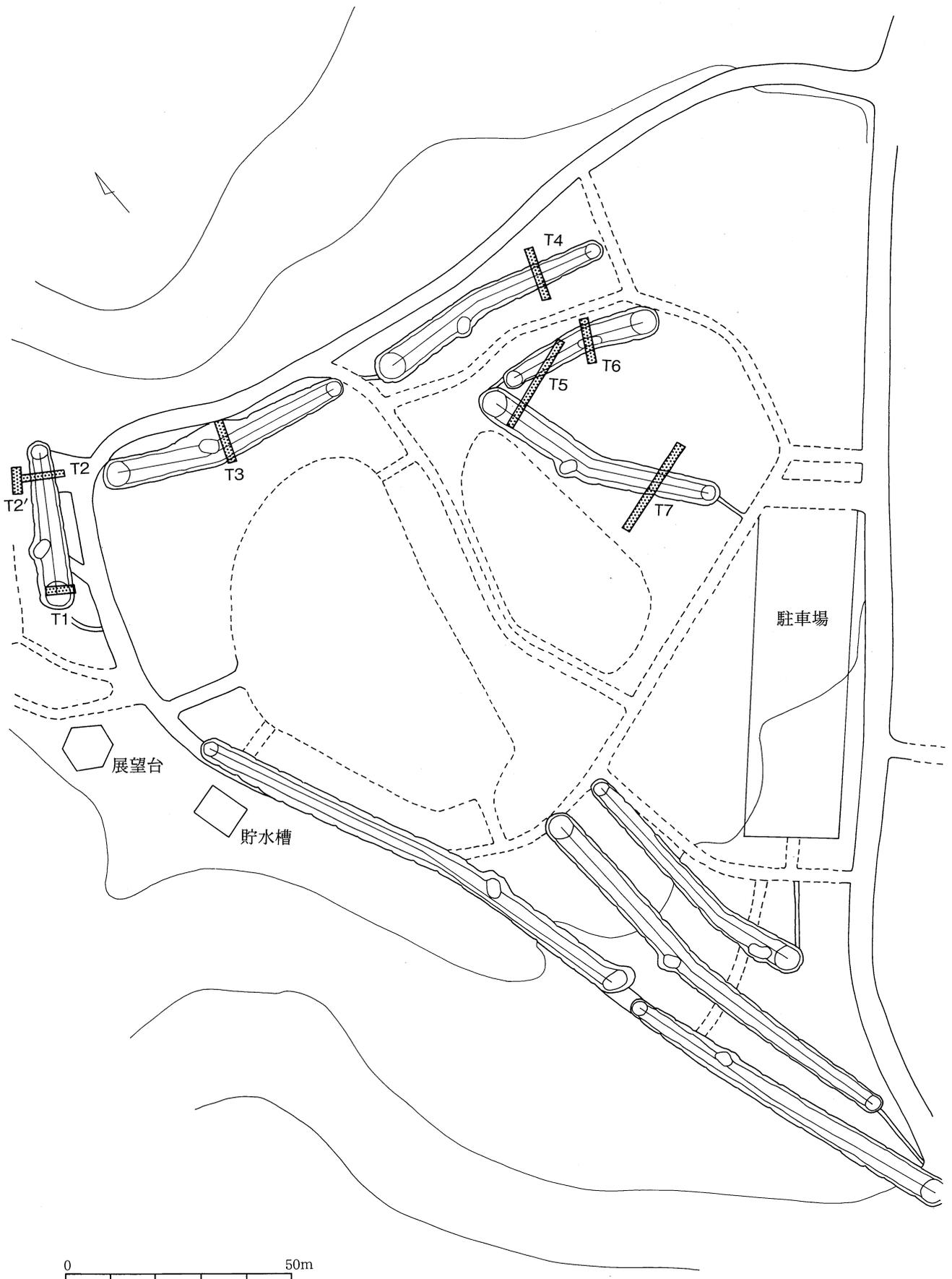


I: 黑褐色土
 II: 黑褐色土(炭化物多量混入)
 III: 褐色土(炭化材片・烧土塊・ローム塊混入)



I: 暗褐色土
 II: 暗褐色土(炭化材片少量混入)
 III: 暗褐色土(炭化材片・烧土塊・ローム塊少量混入)
 IV: 黑褐色土(炭化材片多量混入)
 V: 黑褐色土(炭化材片多量混入)
 VI: 烧土塊層
 VII: 褐色土

第23图 炭烧窑



第24図 鍬形原砦址

V 出土遺物

1 土器・陶磁器（第25～28図、第4表）

土師器、須恵器と近代の陶磁器が出土している。土師器・須恵器は古墳の主体部や周溝からの出土がほとんどである。土師器・須恵器の器種は、土師器に杯・高杯・台付甕・小形甕・甕、須恵器に蓋杯・杯・杯蓋・蓋・長頸壺・提瓶・平瓶・フラスコ瓶・横瓶・甗・甕がある。

(1) 各遺構出土品

ア 第16号古墳（第25図1～5、第4表1～5）

北側周溝内より、土師器と須恵器が出土している。須恵器に杯・壺・長頸壺が、土師器に小形甕・甕がある。

イ 第49号古墳（第25図6～12、第4表6～12）

東側窪地の周溝推定地に設定したトレンチ内より、土師器と須恵器が出土している。土師器の高杯1点と須恵器の杯・蓋・短頸壺・甕が図化提示できた。

ウ 第50号古墳

周溝内より須恵器の小片が出土したのみで、図化、提示できるものはなかった。

エ 第51号古墳（第25図13～15、第4表13～15）

周溝南端部から土師器がまとまって出土した。土師器の杯1点、高杯2点が図化提示できた。

オ 第52号古墳（第25図16～20、第4表16～20）

主体部内から土師器がまとまって立てた状況で出土した。土師器の杯1点、高杯4点が図化提示できた。出土状況、器形、調整等に斉一性の高い土器群である

カ 第53号古墳（第25図21～26、第4表21～26）

周溝南部から土師器と須恵器がまとまって出土した。土師器の杯・小形鉢・台付甕、須恵器の蓋杯と杯蓋が図化提示できた。

キ 第54号古墳（第26図27～33、第4表27～33）

横穴石室内の入口部を中心に、土師器と須恵器がまとまって出土した。土師器の杯ないしは高杯2個体、須恵器の蓋杯2点、杯2点、蓋1点が図化できた。入口部の出土であり、本古墳の追葬に伴うものの可能性も考えなければならない。

ク 第38号古墳（第26・27・28図34～85・116、第4表34～85・116）

横穴石室主体部から少量、周溝から多量の土師器・須恵器が出土した。土師器に杯・高杯・小形甕、須恵器に蓋杯・杯蓋・蓋・鉢・高杯・壺・甕・提瓶・甗等があり、53個体を図化できた。

ケ 第55号古墳（第28図86～105、第4表86～105）

横穴石室主体部及び周溝から多量の土師器、須恵器が出土している。土師器は杯、須恵器には蓋杯、杯蓋・蓋・平瓶・提瓶・フラスコ瓶・壺・甕等があり、20個体を図化できた。

コ 第IV次調査1号炭焼窯（第28図109～114、第4表109～114）

窯体内及び窯体周辺から土師器と須恵器が出土している。図化できた土器は、須恵器がすべて杯Bで、甕は底部破片である。

サ 第IV次調査2号炭焼窯（第28図115、第4表115）

窯体内より土師器の杯が出土している。丸底気味の底部から体部が直線的に立ち上がる形態を有し、内外面に黒漆と推定されるものが塗布されている。

シ その他検出面（第28図106～108・116、第4表106～108・116）

Ⅲ次調査のア地区及びウ地区の検出面から出土した須恵器が提示できた。口縁部が絞まる珍しい器形の鉢と横瓶である。また16号古墳の東部検出面から土師器の壺の底部破片が得られている。

(2) 土器・陶磁器の特徴

ア 土師器杯類

体部が大きく外開するA形態（第51号古墳13、第38号古墳66～69）、稜を作って口縁が直に近く立ち上がるB形態（第38号古墳70・71、第55号古墳101、IV次2号炭焼窯の115）、体部が丸みをもって外開、立ち上がるC形態（第55号古墳102～104）、口縁部が立ち上がり気味に開くD形態（第52号古墳16）の4小器形がみられる。D形態16がより古い器形であり、ついでB形態、A形態の順で、C形態が最も新しいと考える。

イ 土師器高杯

長脚大形のもの（第49号古墳12、第51号古墳15、第38号古墳80・81・83）と中形のもの（第52号古墳17～20）、短脚小形のもの（第38号古墳74～77・78・84）に分かれる。第38号古墳79は長脚大形の高杯の杯部とホゾの部分と考えたが、突起部にもミガキが施されている。第52号古墳17～20は杯の16とともに石室内にまとめて立てられていたもので、一括性が高い。

形態からみて、中形の一群が最も古く、次いで短脚小形のもの、長脚大形のもの順になると推定する。

ウ 土師器台付甕

台付甕は第53号古墳から出土したものであるが、非常に珍しい形態で、須恵器の短頸壺に長脚を付したような形状は、何らかの須恵器を写したものであろうか。

エ 須恵器の杯・蓋類

蓋杯は第53・54・38・55号古墳からの出土である。ロクロナデのち底面には回転ケズリが行われている。第38号古墳38はこれから逸脱して底面は手持ちケズリがなされている。

杯Bは第16号古墳（2）とIV次1号炭焼窯（109～113）、杯Aは第49号古墳（6・7）からのみ出土した。2は底面に回転糸切りを残し、109と111は回転ケズリがなされる。第49号古墳の6・7は底面に回転ケズリを残す。第16号古墳の1は杯Aだが、小形で特殊なものと思われる。

蓋は杯蓋が第53・38・55号古墳（21・22・51～56・88・89）から出土している。第54号古墳の29・30は杯Aのように図示したが、蓋杯27・28の杯蓋の可能性が高い。また、第55号古墳の88・89は同古墳出土の蓋90～93の杯身になる可能性もある。

宝珠つまみの付いた蓋は第54・55号古墳（31・90～93）から出土している。この内、31の端部形状は不明だが、90～93は端部内面にかえりを有する。また、第38号古墳の58は端部内面にかえりを持つが、宝珠つまみがなく、径が小さい。42・43などの小形で身の深い鉢と組み合わせると想定する。端部が下方に短く屈曲する蓋は、第49号古墳の8と第38号古墳57のみで、第49号古墳の8は宝珠つまみが付かない型かもしれない。

鉢は、杯と形状の異なるものを一括したが、第38号古墳の41・42・43、ア地区検出面出土品106が該当する。41は体部に2条の沈線が廻り、椀形をなすので、金属器の仏器写しの須恵器であろう。

オ 須恵器高杯

長脚で大形のもの（第38号古墳45・46）と、小形のもの（第38号古墳47～50）がある。おそらく、44も長脚が付されると思われる。45の脚は2段透かし3単位、46は1段透かし2単位である。小形のもののうち47～49は形態や調整の共通性からみてセットになるものと思われる。

カ 須恵器壺・瓶類

第16号古墳からの長頸壺の頸部（3）、第49号古墳からの短頸壺（9・10）がある。第38号古墳61の甕は

上半部を失っている小形のもの。59と60は長頸壺の上半と下半で、釉調と胎土からみて同一個体の可能性がある。頸部に2条の沈線が廻り、胴部の上部には粘土円板貼付による接合痕が明瞭に残る。64は大形の(長頸)壺の底部周辺である。62は提瓶であるが、口径の大きなものである。胴部のほとんどを失っていて詳細はわからない。第55号古墳の97は平瓶で全形がわかる貴重なものである。天井部を粘土円板で塞いだ痕跡が明瞭に残る。95は口縁頸部のみであるが、中心軸の傾きからみて平瓶のものと推定した。98はプラスチック瓶の胴部である。99は長頸壺のように図示したがプラスチック瓶になる可能性が高い。96は小破片で詳細不明だが提瓶になる可能性がある。107の図は口径、胴径が採れなかったが、横瓶である。94は平瓶、プラスチック瓶または甕の口縁と推定する。

キ 須恵器甕類

第49号古墳の11と第38号古墳の63・65、第55号古墳の100が該当する。63は外面全面にカキメがかかるものである。ほかに甕の破片は多いが、図示できたのはこの4点のみである。

(3) 土器の年代

土師器・須恵器の様相からみて、ほぼ6世紀前半から8世紀初頭の時期を示している。古墳を個別に見ると、第52号古墳出土品がひとときわ古く、6世紀前半から中葉、次いで第38号・53号・54号古墳出土品、第IV次調査2号炭焼窯出土品が7世紀前半から後半、第55号古墳出土品が7世紀末、第16号・49号古墳出土品が7世紀末から8世紀前半に比定されると考える。

2 金属製品 (第29～31図、第5表)

第I～IV次調査において、総計134点の金属製品が出土した。これらの出土地点・器種・寸法等については第5表を参照されたい。この内、古墳から出土した125点中91点と古墳以外からの出土品1点を図示した。遺物の記載にあたっては図番号を使用しているが、実測図の掲載ができなかったものについては一覧表の通番を用いて「No. 数字」で記載している。

(1) 第38号古墳 (1～18)

鏃・弓金具・轡・鉸具・刀子・耳環があり、その他用途不明の鉄製品が出土している。

鏃 (1～6) 鏃身部が確認できるものは6の長三角形鏃だけで、他は篋被～茎部の破片が5点出土している。1は関篋被の長頸鏃で篋被の断面は楕円形を呈する。2は一端が細くなっており茎部の可能性が高い。3は平面形から篋被～茎部の一部としたが、篋被の直下が2叉に分かれていることから鏃とは異なる可能性がある。4は頸部である。5は篋被～茎部で長軸に直交する木質部が観察される。

弓金具 (7) 弓弭の近くに装着される両頭の金具である。長軸に平行する木質部が観察される。弓を構成する部品の一つであり、副葬品に弓があったことが推定される。

轡 (8・9) 銜が2点出土している。ともに両端が欠損しているが、推定長8.5cm～9.0cmである。銜先が平行につく8と直交する9がある。

鉸具 (10) 長方形を呈する。前縁と基部には分かれず、横棒に直接刺金が装着されている。縁金部分に薄い鉄板が巻きつけられている。

刀子 (11～14) 11は身部である。12・13は茎部とわずかに身部が残る。12は13に比べ関の幅が狭いが、茎部が長い。13の茎部には木質部が付着している。14は断面では刃部が確認できず、大型の刀子の茎部の可能性がある。

耳環 (15) 鉄地銅貼りであるが、金属箔の痕跡は認められない。

その他 (16～18・No.19～31) 用途不明の鉄製品が16点出土しており、その内の3点(16～18)を図示した。16は片側が欠損しているが短冊状の鉄板で、端部寄りの中央に孔があり、吊下げ金具の可能性はある。

17は棒状の鉄製品で、端部がレンチ状に曲がっている。18は薄い鉄板の端部に別の鉄板を折り曲げてかぶせてあるもので、覆輪の一部である可能性がある。図示していないがNo.25は径8mmを計る円形の蓋状を呈し、相対する留め金が内側に曲がっている。これら以外のものは、何らかの鉄製品の破片が主である。

(2) 第50号古墳 (19・20)

剣・刀子が各1点出土している。

剣 (19) 全長が約79cmを計り、身部約63cm、茎部約16cmを計る。身部は鑄が両面に確認され、関は均等である。茎部は栗尻で2箇所目釘孔がある。

刀子 (20) 身部が完存しており、棟側は身部から茎にかけて直線的であるが、刃側には関がある。

(3) 第52号古墳 (21～34)

直刀・鏃・刀子・耳環があり、その他用途不明の鉄製品が出土している。

直刀 (21・22) 身部長約52cmの21、身部長約24cmの22がある。2点ともに身部は平造、関は撫角で、茎部は栗尻で目釘孔が1箇所ある。21は鉏が片面に残存する。22は柄と柄に巻いた樹皮の木質部が残る。

鏃 (23～28) 23は柳葉形の長頸鏃である。鏃身部と頸部が接合しないが同一個体と判断した。24・25は片刃である。26は茎部で矢柄の木質部が残存する。27は長三角形短頸鏃で矢柄の木質部が残存する。28は長三角形鏃で、鏃身部中央に矢柄を装着するための孔と木質部が観察される。

刀子 (29・30) 29は身部の先端部である。30は身部の幅が急減しており、研ぎ減りと推定される。

耳環 (31・32) 2点とも銅地に銀箔をかぶせた銀環である。31の端部は左が絞り、右は折り返しで箔を閉鎖している。32の端部は両方とも箔を絞りで閉鎖している。

その他 (33・34・No.48～51) 用途不明の鉄製品が6点あるが、その内の2点を図示した33・34は板状の鉄製品で、この内34の2片は接合しないが同じ部位と推定される。これら3片は僅かに湾曲していること、端部が折り返されていることに共通点がある。なお、34の1片には孔が認められる。形状から3片は同一個体の可能性がある。No.48は木質部の残る鉄板片で、刀あるいは剣の柄の部分から剥離した可能性が高い。

(4) 第53号古墳 (35～41)

鏃・刀子・耳環があり、その他用途不明の鉄製品が出土している。

鏃 (35・36) 35は柳葉形の長頸鏃の鏃身～頸部である。36は茎部の一部である。

刀子 (37・38) 37は身部の先端部と刃縁の大半を欠いているが、刃部幅が約1.8cmある。関の部分からなだらかに茎部に移行し、茎部には柄の木質部がわずかに残存している。38は身部の先端部である。

耳環 (39～41) 39と40は鉄地で銹膨れが激しい。41は銅地である。3点とも金属箔は観察されない。

その他 (No.59) 鉄板片が1点出土している。

(5) 第54号古墳 (42～52)

鏃と刀子が出土している。

鏃 (42～50) 11点確認されているが、その内の9点を図示した。鏃身部の形状が分かるものが多く、三角形または柳葉形の42～47、圭頭形の48がある。鏃身の断面は42・43・46～48が片丸、44は片切、45は片平鑄である。42・43・50は関篋被である。

刀子 (51・52) 51は茎部とわずかに身部が残り、茎には柄の木質が残る。52は銹膨れが激しいが、身～茎部の部分である。刃部幅が関から急減しており、研ぎ減りと考えられる。

(6) 第55号古墳 (53～91)

鏃・刀子・釘・耳環とその他用途不明の鉄製品が併せて総計53点出土している。

鏃 (53～84) 35点出土しており、32点を図示した。長頸鏃は鏃身部の形状により3つに分類できる。53～61・63・73・74は短身の柳葉形の長頸鏃、66～71・75は片刃長頸鏃であり、他に三角形鏃の62がある。

篋被は、棘篋被（68・79）、関篋被（53・54・66・76・82）がある。なお、83は頸部が折れ曲がっており、84は頸部が湾曲している。

刀子（85～87） 85は身部が先端部に向かって刃部幅が急減しており、研ぎ減りと推定される。鉄製の鞘口金具が約1/2程残る。86は身部の先端部である。87は身～茎部で、錆膨れが激しいが関が認められる。

釘（88） 錆膨れが激しいが、頭部を折り曲げて半円状の平坦面をつくっている。古墳に伴うものであれば棺材に使用された可能性がある。

耳環（89・90・91） 3点とも銅地に箔をかぶせた銀環である。89・91は箔の剥離が激しい。

その他（No.115～125） 用途不明の鉄製品が11点出土している。細い棒状で両端が欠損するNo.115～117・125、鏃の一部の可能性をもつNo.120・122・124、刀子の身部先端状のNo.118・121等がある。

（7）古墳出土以外の金属製品（92）

I次調査で4点、Ⅲ次調査で4点、Ⅳ次調査で1点出土している。92はⅢ次調査のア地区西南部トレンチから出土したもので、鞍または鉸具と推定される。この他にI次調査の列石からは鎌の刃部（No.129）が出土している。また、Ⅲ次調査の16土坑からは湾曲した細い棒状鉄製品（No.130）、Ⅳ次調査の暗渠からは湾曲した角棒状の鉄製品（No.134）が出土している。また、完形の蹄鉄（No.126）と丸釘（No.131）が出土している。これらは時代的に新しいものである。

3 石器（第32図、第6表）

検出面から各種の石器が出土し、石鏃、使用痕のある剥片、打製石斧、磨石、砥石を図化提示した。石鏃、剥片は黒曜石製、打製石斧は砂岩と泥質片岩製、磨石と砥石は砂岩製である。遺構に属するものはない。縄紋時代の所産と推定している。

4 玉類（第33図、第6表）

古墳石室内から多様な玉類が28点出土した。第38号古墳から勾玉1点、第52号古墳から白玉2点、第54号古墳からガラス小玉2点、また第55号古墳から管玉1点、丸玉20点、双孔円盤1点、土製勾玉1点が出土している。第38号古墳の勾玉は瑪瑙製、第52号古墳の白玉は滑石製、第55号古墳の管玉は直径1cmを超える優品で碧玉製、丸玉は直径1cm内外で凝灰岩製を主とし、双孔円盤は滑石製である。

5 その他

いくつかの炭焼窯から炭化材が出土している。量はわずかで、分析等を行っていない。

第4表 中山古墳群 I～IV次発掘調査出土土器一覧表

No.	次数	地点	種別	器種	寸法			度 残存	紋 様・調 整		実測 番号	注 記
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
1	I	16墳	須恵器	杯A	8.2	5.4	2.8	1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	16墳3	北側周溝下層
2	I	16墳	須恵器	杯B		6.4		1/3	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	16墳4	北側周溝下層
3	I	16墳	須恵器	長頸壺					ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	16墳5	北側周溝
4	I	16墳	土師器	小形甕	11.5			1/4	ヨコナデ、工具ナデ	工具ナデ、輪積み痕	16墳1	北側周溝西部
5	I	16墳	土師器	甕		7.4		1/3	工具ナデ、ナデ	工具ナデ	16墳2	北側周溝西部
6	I	49墳	須恵器	杯A		7		1/4	回転ケズリ	ロクロナデ	49墳2	東覆土
7	I	49墳	須恵器	杯A		6		1/4	回転ケズリ	ロクロナデ	49墳3	東覆土
8	I	49墳	須恵器	蓋	10.8	-		一部	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	49墳4	東覆土
9	I	49墳	須恵器	短頸壺	9.2			1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	49墳5	東覆土
10	I	49墳	須恵器	短頸壺		5.4		1/6	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	49墳6	東覆土、No.8東
11	I	49墳	須恵器	甕	17.6			口完	ロクロナデ、タタキ	タタキ当て具痕擦り消し	49墳7	No.2・3・4・9東 東覆土
12	I	49墳	土師器	高杯					摩滅不明、輪積み痕	ミガキ、黒色処理	49墳1	No.5・6
13	I	51墳	土師器	杯A	16.2	10.7	4.3	2/3	ナデのち横ミガキ	ナデのち横ミガキ	51墳1	No.4・8・9・10
14	I	51墳	土師器	高杯?	14.6			1/2	ナデのちミガキ、摩滅	ミガキ、黒色処理	51墳3	No.4・6・8・9
15	I	51墳	土師器	高杯		11.3		一部	ナデのちミガキ	ミガキ、黒色処理	51墳2	No.4
16	I	52墳	土師器	杯D	14.3	3.1	5.2	3/4	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	52墳1	No.28主体部
17	I	52墳	土師器	高杯	16.5	10.5	8.7	一部	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	52墳4	No.29主体部
18	I	52墳	土師器	高杯	16.6	10.2	8.3	1/6	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	52墳3	No.31主体部
19	I	52墳	土師器	高杯	14.9	10.6	9.4	3/4	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	52墳2	No.30主体部
20	I	52墳	土師器	高杯	16.2	10.6	8.5	3/8	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	52墳5	No.29主体部
21	I	53墳	須恵器	蓋杯	10.6	12	4.2	1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	53墳4	No.9・12・16、南部覆土
22	I	53墳	須恵器	杯蓋	10.8	-	3.9	1/4	ヘラ切り、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	53墳5	No.13・17・18・19・20
23	I	53墳	須恵器	蓋杯	11	13.4	4.1	1/8	ヘラ切り、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	53墳6	No.6・33
24	I	53墳	土師器	杯	14.4				ナデ、ヨコナデ	ミガキ摩滅、黒色処理	53墳3	No.3
25	I	53墳	土師器	小形鉢	8.4		7.2	1/3	ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	53墳2	No.5・7・291・南部覆土
26	I	53墳	土師器	台付甕	10.5	10.2	14.1	3/4	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	53墳1	No.8・10・11・15・23、 南覆土
27	I	54墳	須恵器	蓋杯	8.8	10.8	3.1	3/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	54墳1	覆土
28	I	54墳	須恵器	蓋杯					ヘラ切り、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	54墳2	石室入口・中層
29	I	54墳	須恵器	杯?	10.8			1/6	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	54墳5	石室入口
30	I	54墳	須恵器	杯?	11			1/8	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	54墳4	石室入口
31	I	54墳	須恵器	蓋		-			ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	54墳3	石室入口
32	I	54墳	土師器	高杯?	16.2				横ミガキ	横ミガキ、黒色処理	54墳7	石室入口
33	I	54墳	土師器	高杯?	17.6			1/8	横ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	54墳6	石室入口・中層
34	III	38墳	須恵器	蓋杯	12			1/8	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	38墳13	主No.135、周No.48
35	III	38墳	須恵器	蓋杯	10.2	12.2		一部	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、ナデ	38墳26	No.34・37・221・222、 周217
36	III	38墳	須恵器	蓋杯					ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳14	周No.83
37	III	38墳	須恵器	蓋杯					ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳2	主No.167
38	III	38墳	須恵器	蓋杯	14.4			1/6	ロクロナデ、手持ちケズリ	ロクロナデ	38墳1	主No.67
39	III	38墳	須恵器	蓋杯	13.2			1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳12	周No.42・46・59
40	III	38墳	須恵器	蓋杯	13	14.7	4.3	3/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳25	周No.42・215・219・ 226・228
41	III	38墳	須恵器	鉢	17.1			一部	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	38墳11	周99・100・263・265
42	III	38墳	須恵器	鉢	9.2			1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳9	周No.22
43	III	38墳	須恵器	鉢	8.4	9.4	6	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳24	周No.270
44	III	38墳	須恵器	高杯	11.4			1/4	ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	38墳3	主No.71・240、主左D
45	III	38墳	須恵器	高杯	19	12.8	15		ロクロナデ、回転ケズリ、脚部透かし2段3単位	ロクロナデ	38墳19	周No.41・45・56・86・ 87
46	III	38墳	須恵器	高杯		12.6		1/8	ロクロナデ、脚部透かし2単位	ロクロナデ	38墳16	周No.114、オ地区No.115
47	III	38墳	須恵器	高杯	11.3	8.6	7.6	2/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳21	周No.34・187・209・ 252・272
48	III	38墳	須恵器	高杯	11.2	9	7.8	1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳20	周No.20・21・201・ 205・210
49	III	38墳	須恵器	高杯	11.6	9.2	7.4	1/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳22	周No.22・24・176・ 193・213・221・222・ 251
50	III	38墳	須恵器	高杯		8.4		1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	38墳4	主No.166
51	III	38墳	須恵器	杯蓋	11.8	-	4.2	2/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳28	周No.180・186・209・ 217・224・266
52	III	38墳	須恵器	杯蓋	12.4	-		1/8	ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	38墳8	No.3
53	III	38墳	須恵器	杯蓋	11.4	-		3/4	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	38墳5	No.202・220・223・256
54	III	38墳	須恵器	杯蓋	13.5	-	4.8	1/2	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	38墳6	周No.27・172・175・ 177・182・186・251
55	III	38墳	須恵器	杯蓋	14	-	3.8	1/3	ロクロナデ、回転ケズリ、沈線	ロクロナデ	38墳7	周No.38・40・43・229・ 周溝6・排土
56	III	38墳	須恵器	杯蓋	14	-		1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳27	周No.48・56
57	III	38墳	須恵器	蓋	13.6	-		1/10	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳10	周No.263
58	III	38墳	須恵器	蓋	9.4	-	1.6	ほぼ完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	38墳23	No.281

No.	次数	地点	種別	器種	寸法			度 残存	紋様・調整		実測 番号	注記	
					口径	底径	器高		外面	内面			
59	III	38墳	須恵器	長頸壺	6.5			1/2	ロクロナデ、沈線	ロクロナデ、円板貼付成形	38墳17	周No.109・111・183・234・245・247・280	
60	III	38墳	須恵器	長頸壺			7.4	ほぼ完	ロクロナデ、回転ケズリ、回転糸切り	ロクロナデ	38墳18	周No.109・241・242・246・267	
61	III	38墳	須恵器	甗				底部完	ロクロナデ、回転ケズリ、穿孔	ロクロナデ、底面工具痕	38墳15	周225	
62	III	38墳	須恵器	提瓶	11.4			一部	ロクロナデ、沈線、カキ目、タタキ	ロクロナデ、ナデ	38墳32	周63・71・147・149	
63	III	38墳	須恵器	中形甗	15.6			1/2	ロクロナデ、タタキのちカキ目、	ロクロナデ、当て具痕	38墳30	No.1・2・58、周No.28、主No.164	
64	III	38墳	須恵器	壺			12.8	1/4	回転ケズリ	ロクロナデ	38墳31	周No.278	
65	III	38墳	須恵器	甗	22.4			1/2	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、当て具痕	38墳29	周No.105・201・272	
66	III	38墳	土師器	杯A	14.4		5.2	一部	ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	38墳38	周No.131・178・213	
67	III	38墳	土師器	杯A					ナデ、工具ナデ、ケズリ	横ミガキ、黒色処理	38墳50	周No.140	
68	III	38墳	土師器	杯A	14.4		7.4	1/8	ミガキ、摩滅	横ミガキ	38墳51	周No.235	
69	III	38墳	土師器	杯A	13.8			1/6	ミガキ、摩滅	横ミガキ、摩滅	38墳52	墳丘ES	
70	III	38墳	土師器	杯B	13.6		12.6	1/3	横ミガキ、ケズリ	横ミガキ	38墳37	周No.71・88・92・113・179・259、主体部No.168・275	
71	III	38墳	土師器	杯B	11				横ミガキ、ケズリ、黒色処理	横ミガキ、黒色処理	38墳44	周97・103・137・145・147・168	
72	III	38墳	土師器	高杯	15.6			一部	ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	38墳42	周No.188	
73	III	38墳	土師器	高杯	16.6			5/8	横ミガキ	横ミガキ、黒色処理	38墳36	周No.140・141	
74	III	38墳	土師器	高杯	12.2			一部	横ミガキ、ケズリ	横ミガキ、黒色処理	38墳46	周No.118	
75	III	38墳	土師器	高杯					ナデ	ミガキ、黒色処理	38墳47	周No.149	
76	III	38墳	土師器	高杯	12.2			1/6	横ミガキ、ケズリ	横ミガキ、黒色処理	38墳48	周No.270	
77	III	38墳	土師器	高杯					工具ナデ	ミガキ、黒色処理	38墳49	周No.162、玄室トレン	
78	III	38墳	土師器	高杯	11.8			5/12	ケズリのちミガキ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	38墳35	周No.156	
79	III	38墳	土師器	高杯 未成品					ミガキ	ミガキ、黒色処理	38墳45	周No.70・92・93・96・258	
80	III	38墳	土師器	高杯	17.8		13.5	一部	ミガキ、摩滅	横ミガキ、黒色処理	38墳34	周149・262・263・289	
81	III	38墳	土師器	高杯			14.4	一部	縦ミガキ、端部横ミガキ	ミガキ、黒色処理	38墳33	周No.153	
82	III	38墳	土師器	高杯			12	1/6	ナデ	ナデ	38墳41	周No.237	
83	III	38墳	土師器	高杯					ナデ	ミガキ、黒色処理	38墳40	周No.77・212・237	
84	III	38墳	土師器	高杯			8.7	1/2	工具ナデ	ミガキ、黒色処理	38墳39	周No.34・186・237	
85	III	38墳	土師器	小形甗	10.6			1/5	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	38墳43	周No.96	
86	III	55墳	須恵器	蓋杯	9.4		11.2	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳7	周溝No.57	
87	III	55墳	須恵器	蓋杯	11			3/8	ロクロナデ	ロクロナデ	55墳6	主体部No.87	
88	III	55墳	須恵器	杯蓋?	9.5		4	1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳8	主体部No.18	
89	III	55墳	須恵器	杯蓋?	9.8		3.5	完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳9	主体部No.15	
90	III	55墳	須恵器	蓋	10.6		2.7	11/12	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳2	主体部No.24	
91	III	55墳	須恵器	蓋	10.6		2.7	ほぼ完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳4	主体部No.16	
92	III	55墳	須恵器	蓋	10.7		3.1	ほぼ完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳3	主体部No.14	
93	III	55墳	須恵器	蓋	10		3	ほぼ完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳5	主体部No.17	
94	III	55墳	須恵器	壺	10.2			1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	55墳12	周溝No.22	
95	III	55墳	須恵器	平瓶	8.1			1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	55墳13	周溝No.13・14	
96	III	55墳	須恵器	提瓶?					ロクロナデ、カキ目	ロクロナデ	55墳15	北石垣西	
97	III	55墳	須恵器	平瓶	7.2		4.5	14.5	4/5	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、円板貼付成形	55墳1	主体部No.11・36
98	III	55墳	須恵器	フラスコ瓶					ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	55墳11	周溝No.48	
99	III	55墳	須恵器	長頸壺					ロクロナデ、沈線、刻み	ロクロナデ	55墳14	周溝No.1～6	
100	III	55墳	須恵器	甗	20.4				ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	55墳10	周溝No.37	
101	III	55墳	土師器	杯B	11.6		9.4	1/12	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	55墳17	周溝No.51	
102	III	55墳	土師器	杯C	12			1/10	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	55墳18	周溝No.52	
103	III	55墳	土師器	杯C	16			3/8	ヨコナデ、ナデ	ミガキ摩滅、黒色処理	55墳19	主体部No.10	
104	III	55墳	土師器	杯C	12.8			1/6	ヨコナデ、ナデ	ミガキ摩滅、黒色処理	55墳16	周溝No.34・60	
105	III	55墳	土師器	杯	7.4			1/6	ミガキ摩滅、黒色処理	ミガキ、黒色処理	55墳20	主体部No.37	
106	III	IIIア区	須恵器	鉢	7.2			1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	7区検1	ア地区検	
107	III	IIIウ区	須恵器	横瓶				一部	ロクロナデ、タタキのちカキ目	当て具痕擦り消し	ウ区1	ウ地区検	
108	III	16墳東	土師器	壺			12.6	一部	工具ナデ	工具ナデ	鍬形原古墳東方	鍬形原古墳の東方	
109	IV	IV1炭	須恵器	杯B	13.2		9	3.9	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	SMキ1-1	SMキヤキ周辺
110	IV	IV1炭	須恵器	杯B			8.8			ロクロナデ	ロクロナデ	SMキ1-2	SMキヤキNo.3
111	IV	IV1炭	須恵器	杯B			8.8	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	SMキ1-3	SMキヤキNo.2	
112	IV	IV1炭	須恵器	杯B	13.4			1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	SMキ1-5	SMキヤキNo.3	
113	IV	IV1炭	須恵器	杯B	11.6			1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	SMキ1-4	SMキヤキ周辺	
114	IV	IV1炭	土師器	甗			5	1/4	工具ナデ、摩滅	剥離	SMキ1-6	SMキヤキ周辺	
115	IV	IV2炭	土師器	杯B	11.4			1/6	横ミガキ、ケズリ、漆塗布	横ミガキ、漆塗布	SMキ2-1	SMキヤキ2	
116	IV	38墳	須恵器	蓋杯	13.2			1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	IV38墳1	38号墳周辺	

第5表 中山古墳群 I～IV次発掘調査出土金属製品一覧表

No.	図No	次数	器種	出土遺構	出土地点	取上げNo	寸法 (mm)			残存部位 (破損部位)	備考
							長さ	幅	厚さ		
1	1	III	鍔	38号古墳	墳丘内g部	252	(156.5)	(10.8)	8.6	筥被～基部	長頸鍔、関筥被、筥被の断面楕円形、茎が長い
2	2	III	鍔	38号古墳	—	281	(22.5)	(6.9)	(6.0)	基部?	
3	3	III	鍔?	38号古墳	主体部右B	—	(45.7)	(8.4)	(8.1)	筥被～基部?	筥被直下で2又状に分かれる
4	4	III	鍔	38号古墳	主体部左D	—	(43.9)	(7.3)	(3.7)	頸部	長頸鍔
5	5	III	鍔	38号古墳	主体部左D	—	(28.7)	(7.4)	(4.8)	筥被～基部	長軸に直交する木質部残る
6	6	III	鍔	38号古墳	墳丘端a部	251	(67.8)	(27.5)	6.5	鍔身～筥被部	長三角形、腸挟なし
7	7	III	弓金具	38号古墳	主体部床面A	—	33.6	8.0	7.4	ほぼ完形	木質部が長軸方向に残る
8	8	III	轡	38号古墳	トレンチ	—	(58.2)	(27.4)	8.8	銜	銜先は平行
9	9	III	轡	38号古墳	周溝部g部	—	(73.4)	(24.4)	10.1	銜	銜先は直交
10	10	III	鉸具	38号古墳	—	15	38.8	49.8	7.7	ほぼ完形	長方形を呈す、縁金部分に薄い鉄板が巻き付く
11	11	III	刀子	38号古墳	石室	290	(68.0)	(12.5)	(4.6)	身部	錆膨れが激しい
12	12	III	刀子	38号古墳	—	60	(63.3)	(8.9)	(3.6)	身～基部	錆膨れが激しい
13	13	III	刀子	38号古墳	主体部右A	—	(54.2)	(15.1)	5.7	身～基部	木質部残る
14	14	III	刀子	38号古墳	主体部左D	—	(52.0)	(14.2)	(8.3)	基部	錆膨れが激しい
15	15	III	耳環	38号古墳	主体部右C	—	19.0	23.0	5.1	ほぼ完形	鉄地、銅貼り、重量5.5g
16	16	III	不明	38号古墳	周溝検出	—	(42.7)	18.7	4.3	不明	短冊状、1孔
17	17	III	不明	38号古墳	—	171	(70.7)	4.8	5.2	不明	レンチ状に曲がる
18	18	III	不明	38号古墳	—	110	(37.0)	(11.1)	2.3	不明	覆輪状のものが被覆
19		III	不明	38号古墳	—	66	(10.3)	(9.3)	(2.3)	不明	板状鉄片
20		III	不明	38号古墳	主体部左B	—	(13.0)	2.8	2.5	不明	薄い鉄板を巻いて中空の細い棒となる
21		III	不明	38号古墳	主体部C	—	(85.8)	(38.1)	5.6	不明	湾曲した鉄板、鋳物?
22		III	不明	38号古墳	主体部左A	—	(39.9)	9.4	9.0	不明	鉄輪の一部
23		III	不明	38号古墳	主体部左B	—	(19.5)	(7.5)	(5.8)	不明	覆輪がとれたのもの?
24		III	不明	38号古墳	主体部右B	—	(24.5)	(8.5)	(4.3)	不明	鉄片
25		III	不明	38号古墳	主体部左C	—	8.8	8.7	2.1	完形	円形蓋状、相対する留め金がつく
26		III	不明	38号古墳	主体部右C	—	(24.1)	(9.3)	(4.8)	不明	鉄片
27		III	不明	38号古墳	主体部右C	—	(12.7)	(11.8)	(2.2)	不明	鉄片
28		III	不明	38号古墳	主体部床面A	—	(12.4)	(6.3)	(2.6)	不明	鉄片
29		III	不明	38号古墳	—	120	(15.3)	(12.1)	(2.1)	不明	鉄片
30		III	不明	38号古墳	主体部床面A	—	(12.4)	(6.3)	(2.6)	不明	鉄片
31		III	不明	38号古墳	トレンチ玄室内床面南下部	—	(12.4)	(8.4)	(2.4)	不明	鉄片
32	19	I	剣	50号古墳	—	1	791.0	(37.2)	11.0	ほぼ完形	身部両面錆、関は均等、茎は栗尻、目釘孔2箇所
33	20	I	刀子	50号古墳	—	2	(69.4)	13.6	6.8	身～基部	
34	21	I	直刀	52号古墳	石室床上	1	(580.8)	32.1	11.2	身～基部	身部平造、関は撫角、茎は栗尻、目釘孔1箇所、片面に鋸が残る
35	22	I	刀子	52号古墳	石室床上	1	321.5	22.1	9.6	ほぼ完形(刃縁の一部欠損)	身部平造、関は撫角、茎は栗尻、目釘孔1箇所
36	23	I	鍔	52号古墳	主体部	25	(28.4)	12.3	4.5	鍔身部	柳葉形長頸鍔、片切刃、接合しない
							(97.5)	(8.5)	6.6	筥被部	
37	24	I	鍔	52号古墳	主体部	3	(69.3)	(11.7)	5.0	鍔身～頸部	片刃鍔?
38	25	I	鍔	52号古墳	主体部	4	(33.0)	10.0	4.0	鍔身部	片刃鍔、平刃
39	26	I	鍔	52号古墳	主体部	—	(27.6)	(5.3)	(4.8)	基部	木質部残る
40	27	I	鍔	52号古墳	主体部	24	(89.5)	(30.3)	5.4	鍔身～基部	三角形短頸鍔、両丸、腸挟あり
41	28	I	鍔	52号古墳	主体部	27	(41.1)	(31.6)	4.1	鍔身部	三角形鍔、両丸、腸挟あり、矢柄装着孔、木質部残る
42	29	I	刀子	52号古墳	主体部	5	(43.0)	(12.0)	5.3	身部	先端部
43	30	I	刀子	52号古墳	主体部	6	(55.0)	(16.8)	6.7	身部	錆膨れが激しい
44	31	I	耳環	52号古墳	主体部	23	(28.0)	32.8	8.8	ほぼ完形	銀環、銅地、左端部は絞り、右は折返し、重量19.2g
45	32	I	耳環	52号古墳	主体部	22	29.4	32.3	7.7	ほぼ完形	銀環、銅地、左右端部は絞り閉鎖、重量24.0g
46	33	I	不明	52号古墳	周溝内グリッドS3E66	—	(40.3)	(27.9)	3.0	不明	端部折返し

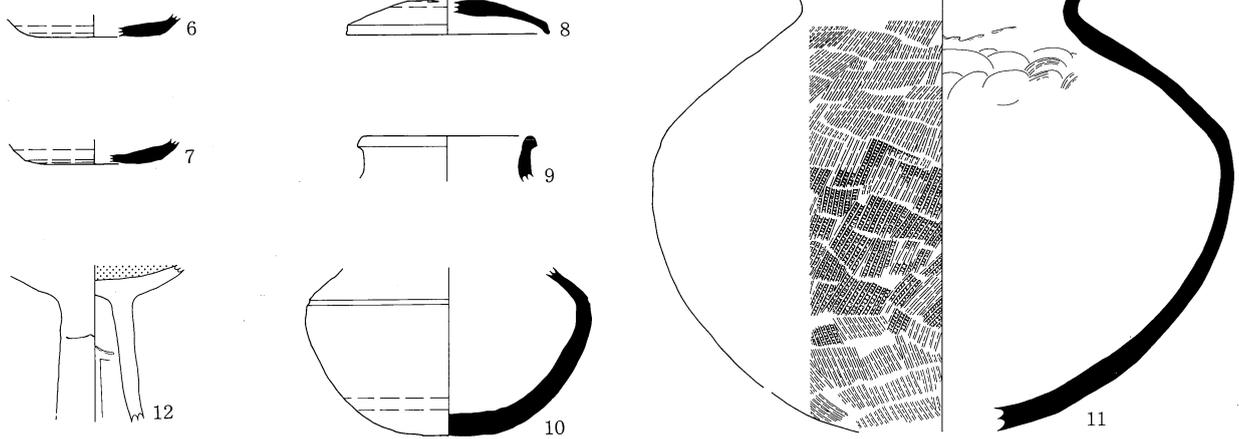
No.	図 No	次 数	器種	出土遺構	出土地点	取上げ No	寸法 (mm)			残存部位 (破損部位)	備 考
							長さ	幅	厚さ		
47	34	I	不明	52号古墳	周溝内グリッド S3E66	—	(24.4) (42.6)	(21.0) (25.3)	3.8 3.5	不明	端部折返し、孔1箇所
48		I	不明	52号古墳	主体部	1の上	(58.9)	19.6	5.3	柄の一部?	剣または刀の茎部部分が剥離?木質部残る
49		I	不明	52号古墳	—	1	(30.0)	(11.0)	(2.0)	不明	鉄片
50		I	不明	52号古墳	—	—	(46.7)	(11.1)	(10.7)	不明	鍔の茎部?
51		I	不明	52号古墳	主体部	2	(33.1)	(15.6)	(6.7)	不明	鉄片
52	35	I	鍔	53号古墳	主体部	3	(52.5)	11.8	5.3	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、腸扶なし
53	36	I	鍔	53号古墳	主体部	35	(54.2)	(7.5)	(6.2)	茎部	
54	37	I	刀子	53号古墳	主体部	2	(105.6)	(17.5)	5.3	身~茎部(先端部)	関は撫角、茎に木質部残る
55	38	I	刀子	53号古墳	主体部	2	(28.0)	(13.3)	(4.7)	身部	先端部
56	39	I	耳環	53号古墳	主体部	2	26.1	28.4	9.5	ほぼ完形	鉄地、錆膨れが激しい、重量6.2g
57	40	I	耳環	53号古墳	主体部	2	(31.3)	(35.2)	12.7	ほぼ完形	鉄地、錆膨れが激しい、重量21.0g
58	41	I	耳環	53号古墳	主体部	—	29.4	32.6	6.4	ほぼ完形	銅地、重量14.4g
59		I	不明	53号古墳	主体部底面	—	(58.9)	(19.6)	(5.3)	不明	鉄片
60	42	I	鍔	54号古墳	石室	3	(162.8)	12.2	5.4	鍔身~茎部	三角形長頸鍔、片丸、腸扶あり、関篋被
61	43	I	鍔	54号古墳	石室	8	(138.0)	11.9	8.2	鍔身~茎部	柳葉形または圭頭形長頸鍔、片丸、腸扶なし、関篋被
62	44	I	鍔	54号古墳	石室	10	(135.5)	(12.5)	6.8	鍔身~茎部	柳葉形長頸鍔、片切、腸扶なし
63	45	I	鍔	54号古墳	石室	9	(21.3) (80.2)	13.7 11.5	8.4 6.7	鍔身部~篋被部、茎部	柳葉形長頸鍔、片平鍔、腸扶なし、接合しない
64	46	I	鍔	54号古墳	石室	5	(68.5)	9.8	6.4	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、片丸、腸扶なし
65	47	I	鍔	54号古墳	石室	2	(61.1)	(13.1)	7.4	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、片丸、腸扶あり
66	48	I	鍔	54号古墳	石室	8	(43.9)	(13.9)	6.9	鍔身部	圭頭、片丸、腸扶あり
67	49	I	鍔	54号古墳	石室	8	(54.5)	(9.1)	(6.8)	篋被~茎部	
68	50	I	鍔	54号古墳	石室	6	(82.8)	(11.0)	(7.0)	篋被~茎部	長頸鍔、関篋被
69		I	鍔	54号古墳	石室	1	(45.2)	(13.1)	7.6	頸部	長頸鍔、錆膨れで割れが進行
70		I	鍔	54号古墳	石室	4	(54.3)	(8.0)	(6.2)	茎部	長頸鍔?
71	51	I	刀子	54号古墳	石室	—	(69.0)	(12.3)	7.3	身~茎部	茎に木質部残る
72	52	I	刀子?	54号古墳	石室	7	(46.6)	(15.8)	9.5	身~茎部	茎に木質部(長軸に直交)残る
73	53	III	鍔	55号古墳	主体部	5	(194.0)	8.6	5.9	鍔身~茎部	柳葉形長頸鍔、片切刃、腸扶なし、関篋被
74	54	III	鍔	55号古墳	主体部	2	(165.5)	8.9	6.5	鍔身~茎部(切先欠損)	柳葉形長頸鍔、腸扶なし、関篋被、68と錆着
75	55	III	鍔	55号古墳	主体部	21	(148.0)	7.6	7.4	鍔身~茎部	柳葉形長頸鍔、片平鍔、腸扶なし
76	56	III	鍔	55号古墳	主体部	4	(125.8)	7.9	7.8	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、片平鍔、腸扶なし
77	57	III	鍔	55号古墳	主体部	2	(121.3)	7.6	6.1	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、腸扶なし、頸部ねじれ
78	58	III	鍔	55号古墳	主体部	2	(48.6) (57.2)	6.9 6.5	5.4 5.8	鍔身部~篋被部、篋被部	柳葉形長頸鍔、片平鍔?、接合しない
79	59	III	鍔	55号古墳	主体部	4	(35.1) (51.9)	7.2 (4.7)	5.5 4.6	鍔身~篋被部 茎部	柳葉形長頸鍔?、腸扶なし、接合しない
80	60	III	鍔	55号古墳	主体部	3	(102.7)	8.1	5.2	鍔身~篋被部?	柳葉形長頸鍔?、刃は先端部のみ
81	61	III	鍔	55号古墳	主体部	6	(113.7) (36.8)	10.7 7.2	7.2 5.1	鍔身~篋被部 茎部	柳葉形長頸鍔、片平鍔、腸扶なし、接合しない
82	62	III	鍔	55号古墳	—	2	(35.1)	(32.2)	3.5	鍔身~篋被部	三角形鍔、平刃、腸扶なし
83	63	III	鍔	55号古墳	石室上部	54	(71.4)	6.7	6.1	鍔身~篋被部	柳葉形長頸鍔、片平鍔、腸扶なし
84	64	III	鍔	55号古墳	主体部	3	(64.0)	(8.4)	(5.8)	篋被~茎部	篋被部が錆膨れで不明瞭
85	65	III	鍔	55号古墳	石室上部	54	(54.7)	(6.9)	(5.7)	篋被~茎部	

No.	図 No	次 数	器種	出土遺構	出土地点	取上げ No	寸法 (mm)			残存部位 (破損部位)	備 考
							長さ	幅	厚さ		
86	66	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(169.0)	9.6	8.1	鏃身～茎部	片刃長頸鏃、鏃身部は銹膨れが激しい、関籠被?
87	67	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	8	(146.9)	7.7	5.7	鏃身～茎部	片刃長頸鏃、腸扶なし、関籠被、茎部に木質部残る
88	68	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	2	(153.5)	8.5	5.8	鏃身～茎部	片刃長頸鏃、棘籠被、54と銹着
89	69	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(134.2)	7.5	6.1	鏃身～茎部	片刃長頸鏃、腸扶なし
90	70	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	20	(118.3)	(8.0)	6.1	鏃身～籠被部	長頸鏃、鏃身部欠損
91	71	Ⅲ	鏃	55号古墳	—	39	(107.3)	9.0	5.9	鏃身～鏃部	片刃長頸鏃
92	72	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(105.2)	(8.2)	6.3	鏃身～籠被部	長頸鏃、片平鏃、先端部欠損
93	73	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部左1	—	(48.1)	10.4	7.1	鏃身～籠被部	柳葉形鏃、片平鏃、腸扶なし
94	74	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(28.3)	(7.8)	5.7	鏃身～籠被部	柳葉形鏃?、腸扶なし
95	75	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(40.8)	8.9	6.7	鏃身部	片刃鏃
96	76	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(58.0)	(7.9)	(4.8)	籠被～茎部	長頸鏃、関籠被
97	77	Ⅲ	鏃	55号古墳	石室上部	54	(62.0)	(8.5)	(6.1)	籠被～茎部	長頸鏃
98	78	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(100.1)	(6.4)	(6.1)	籠被～茎部	長頸鏃
99	79	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(109.8)	(8.8)	(7.2)	籠被～茎部	長頸鏃、棘籠被
100	80	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	2	(150.9)	(8.0)	(6.7)	籠被～茎部	長頸鏃
101	81	Ⅲ	鏃	55号古墳	周溝	50	(159.0)	(8.1)	(7.0)	鏃身～茎部	長頸鏃
102	82	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	5	(136.9) (38.5)	(9.5) (4.8)	(8.0) (4.4)	鏃身～茎部 茎部	片刃長頸鏃?、先端部欠損、関籠被
103	83	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	40	(68.0)	(7.5)	(6.6)	籠被部～茎部	長頸鏃、ほぼ直角に折れ曲がる
104	84	Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	35	(102.3)	(8.8)	(5.8)	籠被～茎部	長頸鏃、大きく湾曲
105		Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	3	(35.3)	(8.5)	4.8	不明	長頸鏃の籠被～茎部分?
106		Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部	34	(48.4)	(6.5)	5.4	不明	長頸鏃?、やや湾曲
107		Ⅲ	鏃	55号古墳	主体部左1	—	(27.0)	(4.2)	4.2	不明	長頸鏃の茎部分?
108	85	Ⅲ	刀子	55号古墳	主体部	2	(116.4)	16.3	10.1	身～茎部	鞘口金具残る
109	86	Ⅲ	刀子	55号古墳	主体部右1	—	(16.5)	(7.8)	(3.0)	身部	先端部
110	87	Ⅲ	刀子	55号古墳	主体部左1	—	(35.2)	8.6	5.0	身～茎部	
111	88	Ⅲ	釘	55号古墳	主体部右3	—	52.5	11.2	9.9	ほぼ完形	角釘、頭部平坦で半円状、銹膨れが激しい
112	89	Ⅲ	耳環	55号古墳	主体部右2	—	20.2	23.5	5.1	(両端・側縁欠損)	銀環、銅地、重量4.5g
113	90	Ⅲ	耳環	55号古墳	主体部石室左2	7	20.8	23.6	5.5	(下側縁欠損)	銀環、銅地、重量5.8g
114	91	Ⅲ	耳環	55号古墳	主体部左1	1	26.3	29.8	6.8	ほぼ完形	銀環、銅地、重量14.7g
115		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部左1	—	(12.1)	(3.0)	(3.0)	不明	角棒状
116		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部右1	—	(15.9)	(4.2)	(3.0)	不明	角棒状
117		Ⅲ	不明	55号古墳	石室	38	(40.8)	(4.9)	(3.9)	不明	丸棒状
118		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部左1	—	(14.9) (19.4)	(7.6) (6.1)	(2.3) (4.5)	不明	刀子身部先端?
119		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部	19	(12.8)	(6.5)	(2.1)	不明	板状鉄片
120		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部	6	(26.5)	(4.2)	(4.5)	不明	長頸鏃の茎の一部?
121		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部	19	(12.8)	(6.5)	2.8	不明	刀子身部先端?
122		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部	61	(26.9)	(12.5)	5.6	不明	銹膨れが激しい、長頸鏃の鏃身部?
123		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部	19	(14.9)	(6.0)	2.0	不明	鉄片
124		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部右1	—	(15.9)	4.2	3.0	不明	鏃の茎の一部?
125		Ⅲ	不明	55号古墳	主体部右2	—	7.1	3.1	2.8	不明	極小の棒状品
126		I	蹄鉄	—	—	—	120.0	118.3	17.1	完形	近現代?
127		I	不明	—	—	—	10.7	7.5	3.5	不明	鉄片、長頸鏃の鏃身部?
128		I	不明	—	—	—	16.8	11.1	1.1	不明	鉄片
129		I	鎌	列石	—	—	104.4	81.9	5.0	刃部	ほぼ直角に曲がる
130		Ⅲ	不明	土坑16	—	3	(44.3)	4.6	3.9	不明	曲がった細い棒状品破片
131		Ⅲ	釘	55号古墳南下	攪乱層	—	39.0	4.6	1.6	完形	丸釘、トタンに刺さった状態
132	92	Ⅲ	鞍 or 鉸具	A地区	西南部トレンチ	61	85.3	(54.4)	11.0	鉸具・鉸金具 or 刺金?	鉸具形式?
133		Ⅲ	不明	I地区	—	3	42.2	38.5	29.0	不明	鉄塊
134		Ⅳ	不明	暗渠	—	—	(47.6)	8.6	7.1	不明	湾曲した角棒、長頸鏃の頸部?、銹膨れが激しい

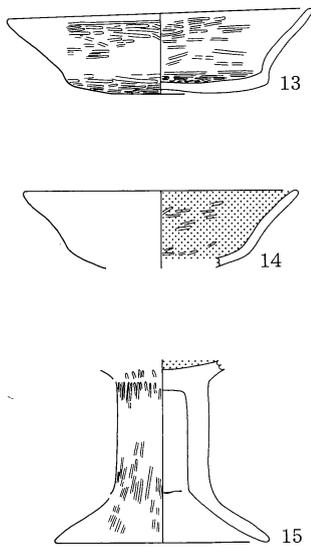
中山古墳群 I 16号古墳(1~5)



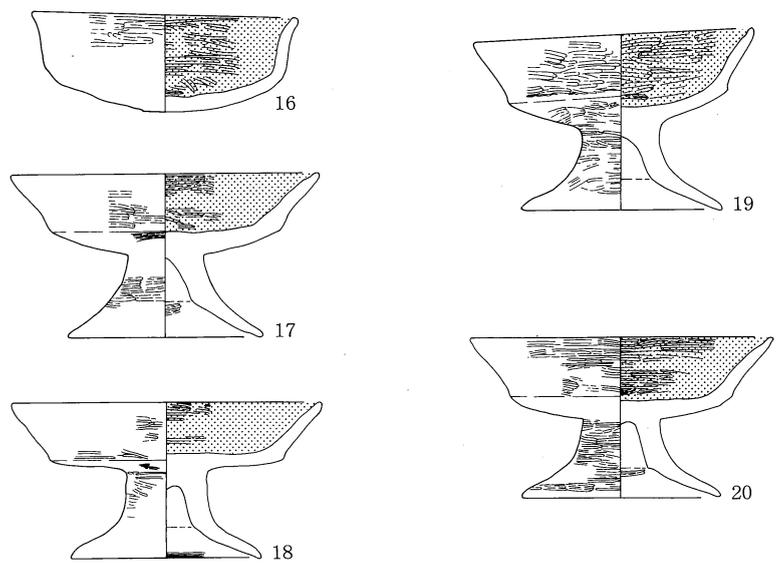
49号古墳(6~12)



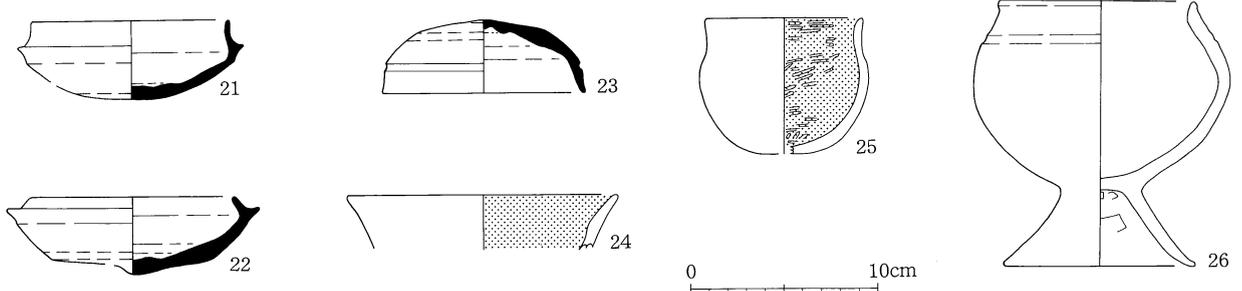
51号古墳(13~15)



52号古墳(16~20)

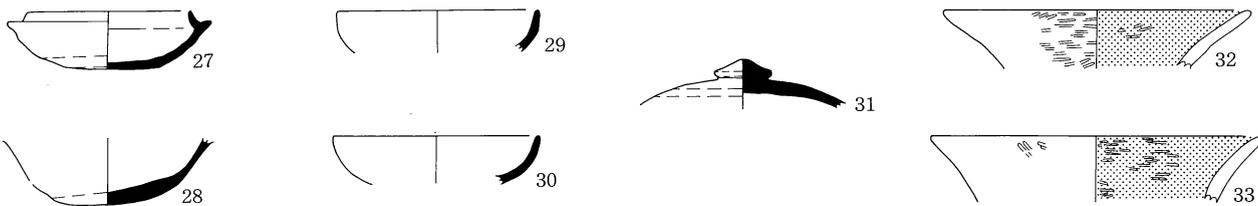


53号古墳(21~26)



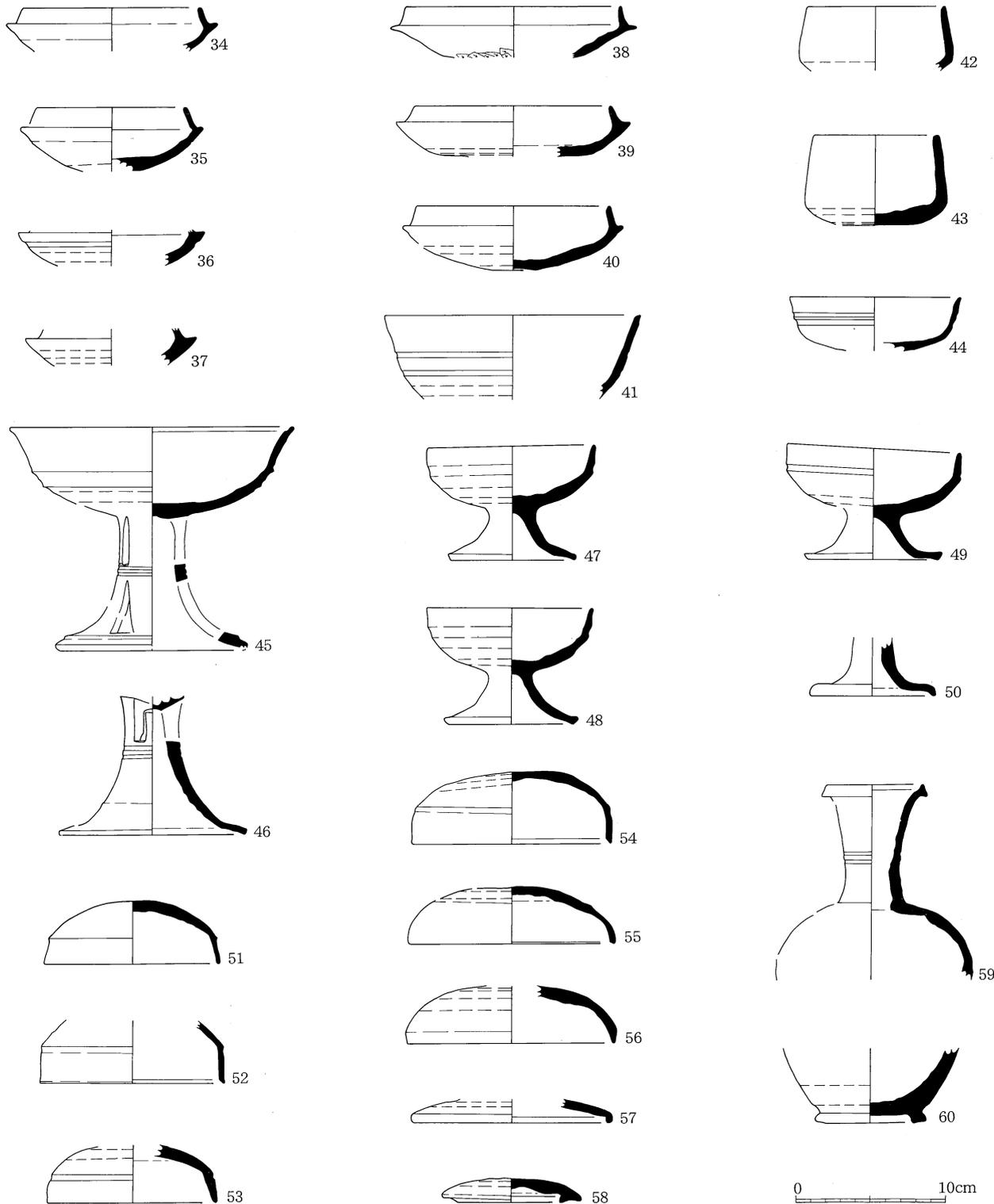
第25図 土器(1)

54号古墳(27~33)

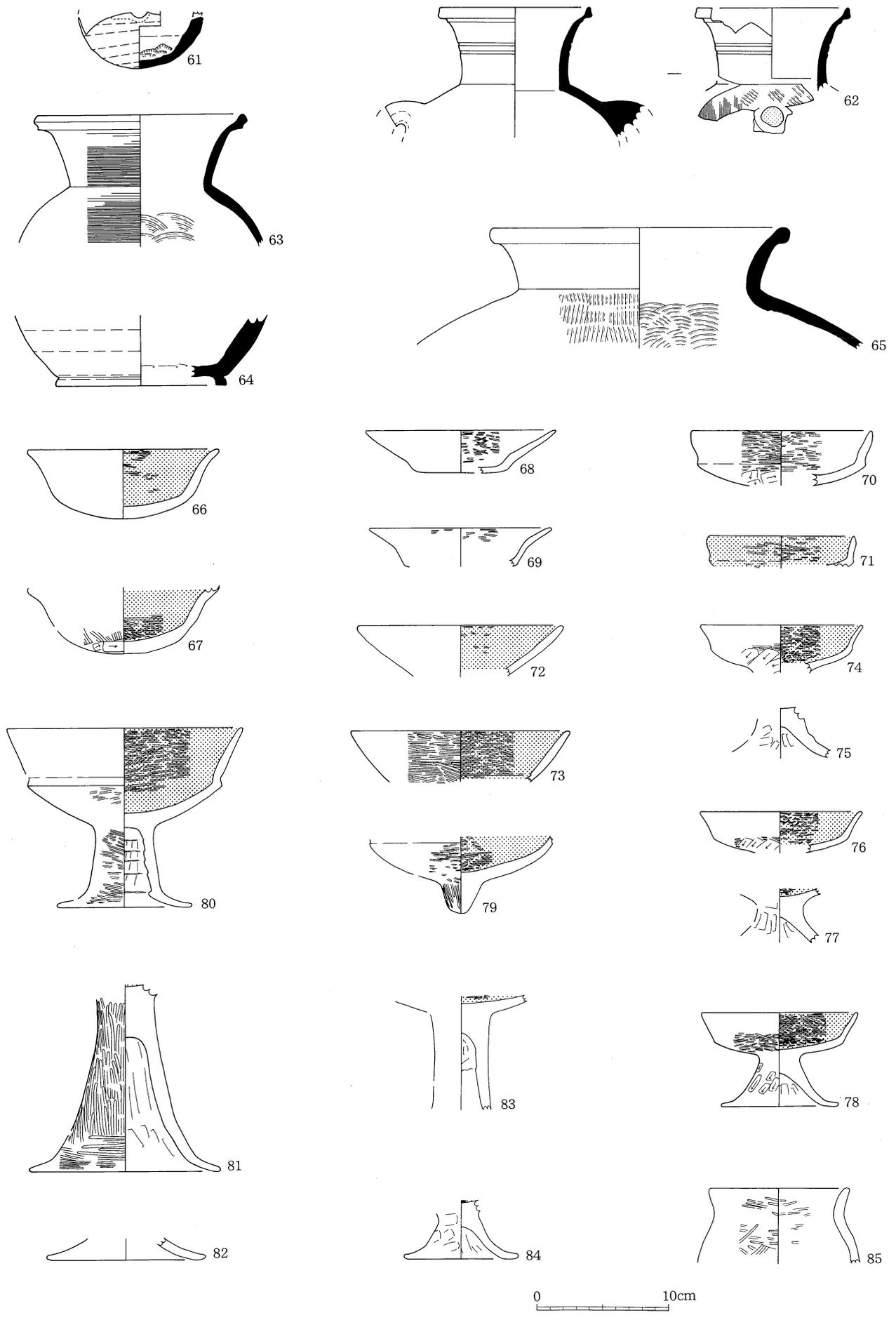


中山古墳群Ⅲ

38号古墳(34~85)

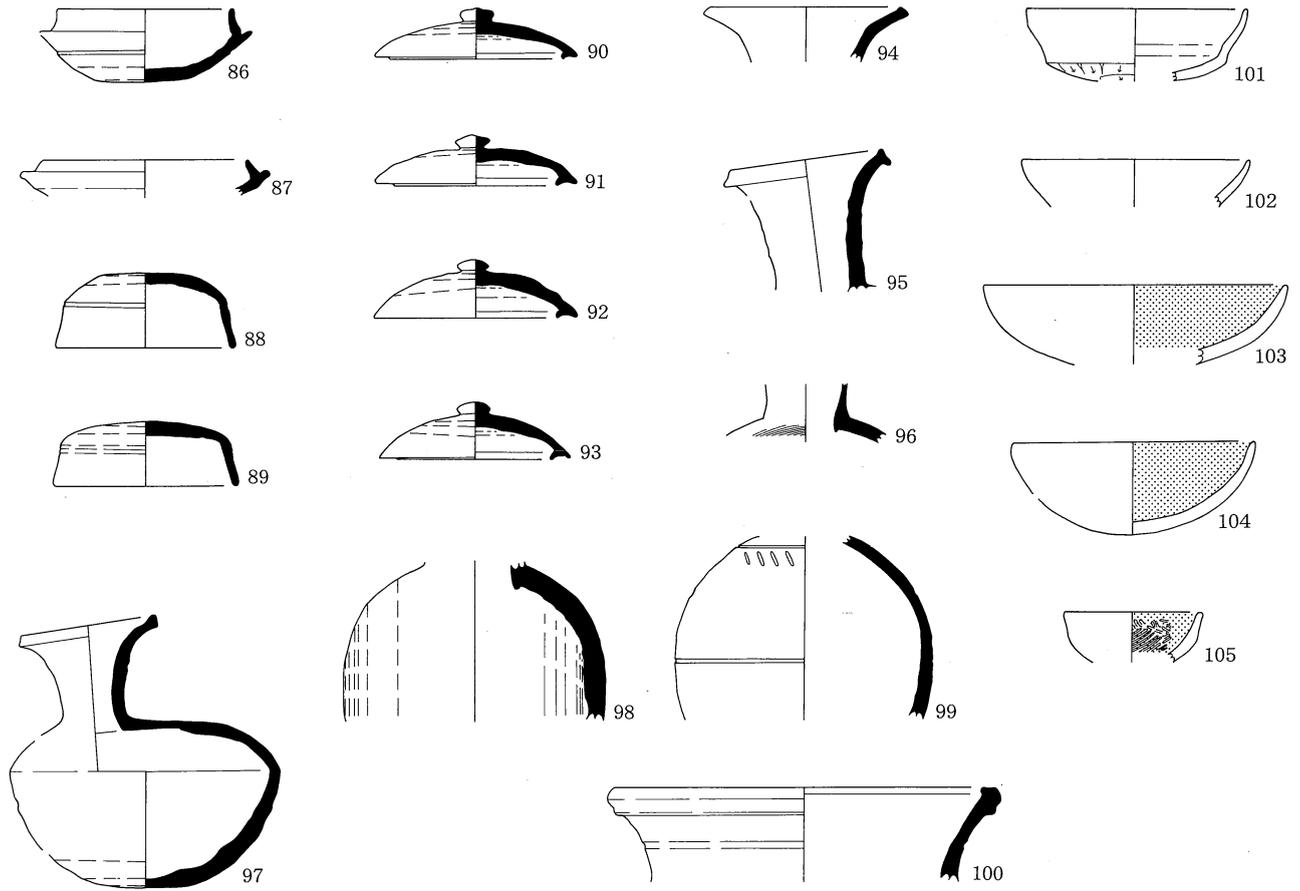


第26図 土器(2)

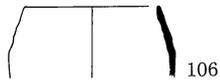


第27图 土器 (3)

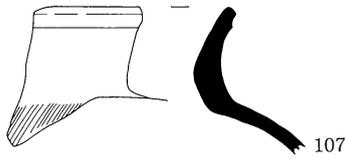
55号古墳(86~105)



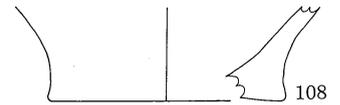
ア地区検出面(106)



ウ地区検出面(107)

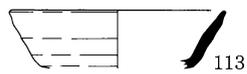
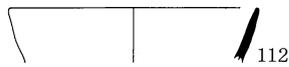


16号古墳東方(108)



中山古墳群Ⅳ

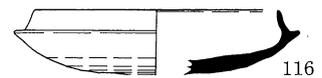
炭焼窯1(109~114)



炭焼窯2(115)

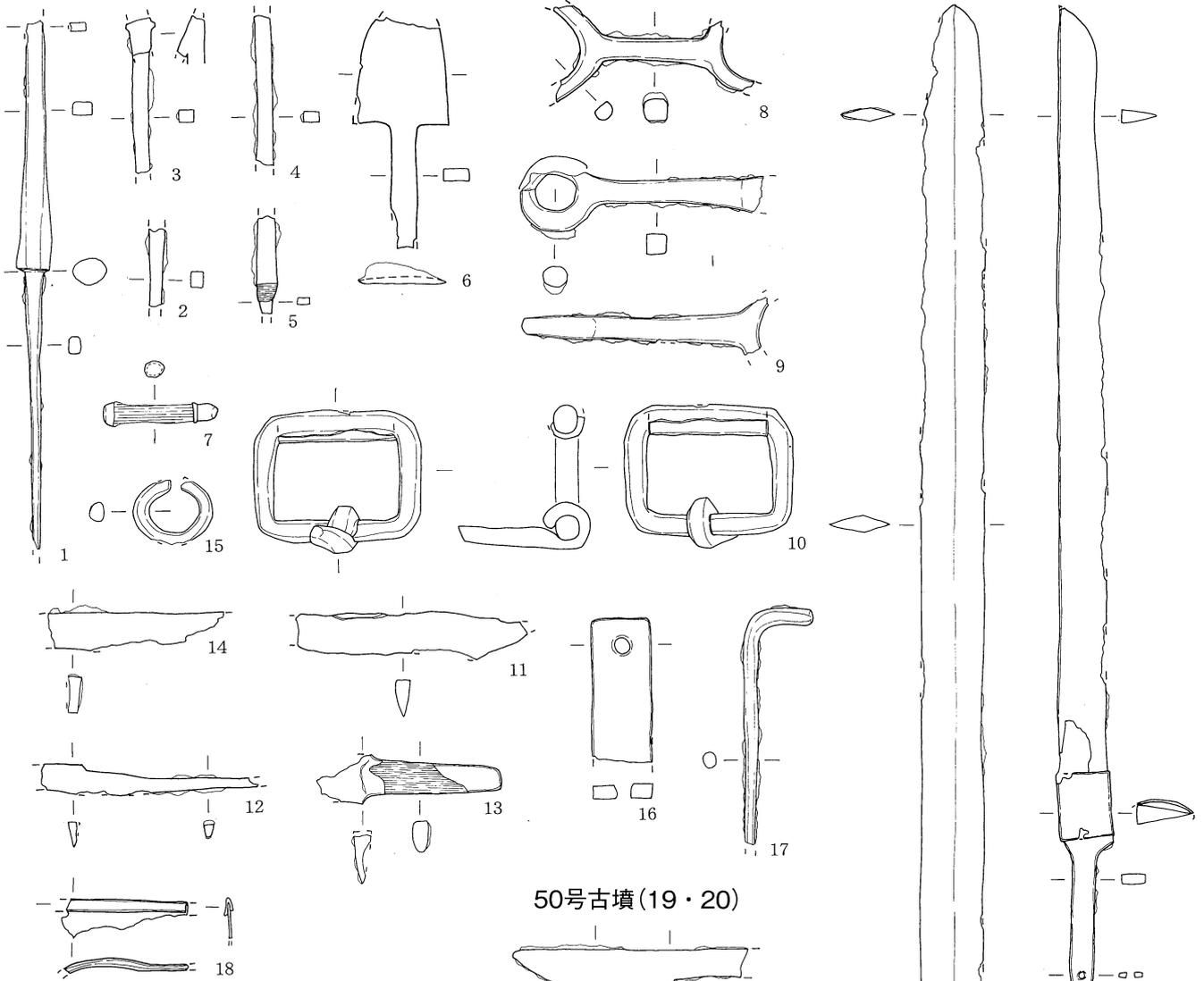


38号古墳周辺(116)



第28図 土器(4)

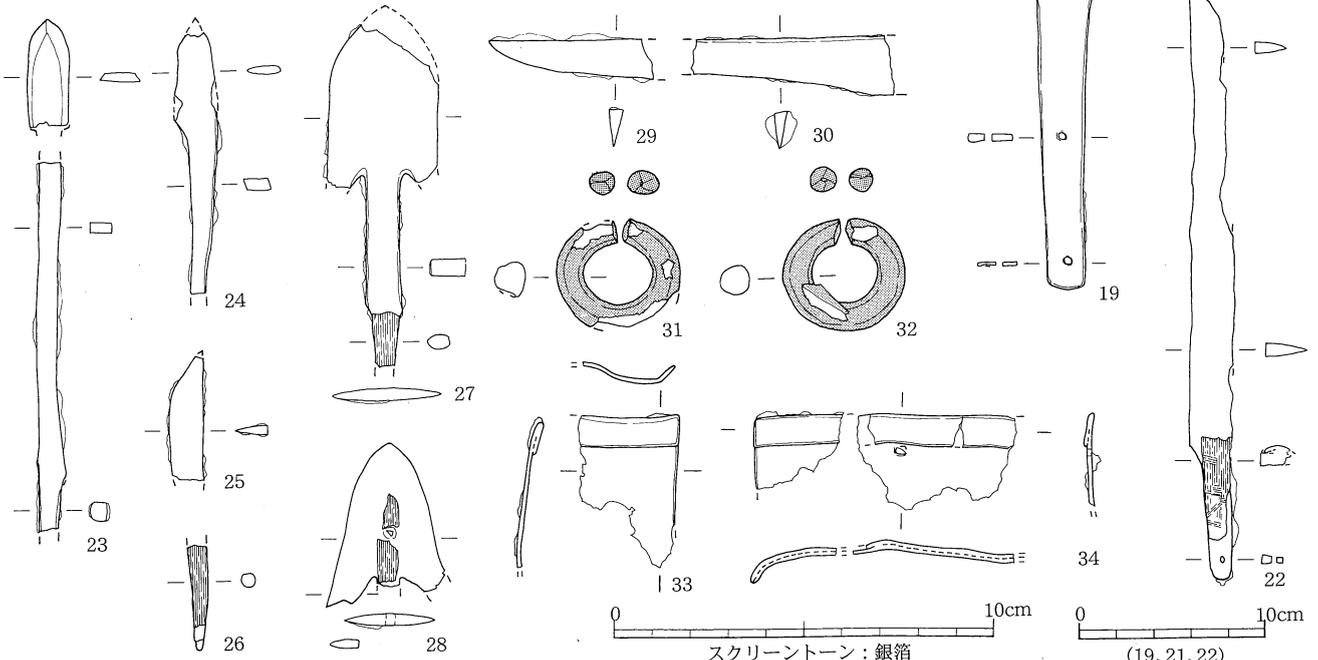
38号古墳(1~18)



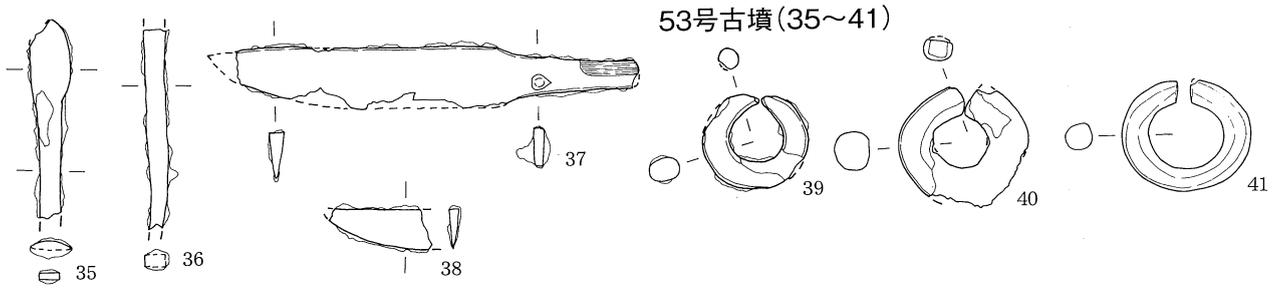
50号古墳(19・20)



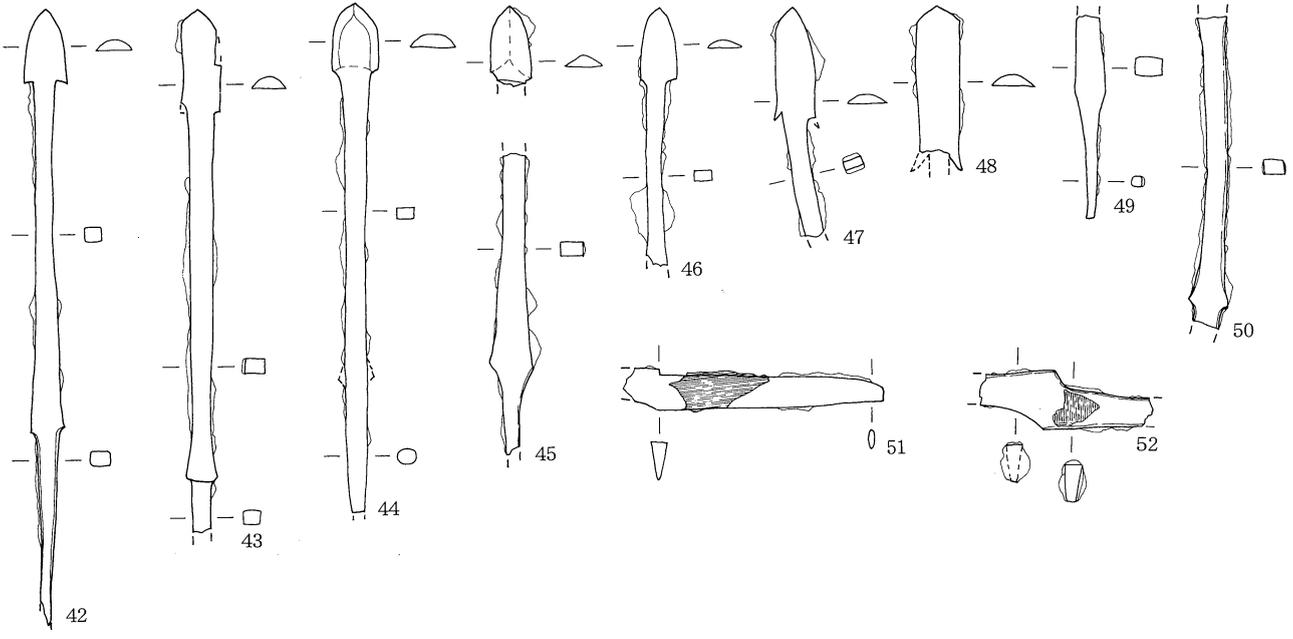
52号古墳(21~34)



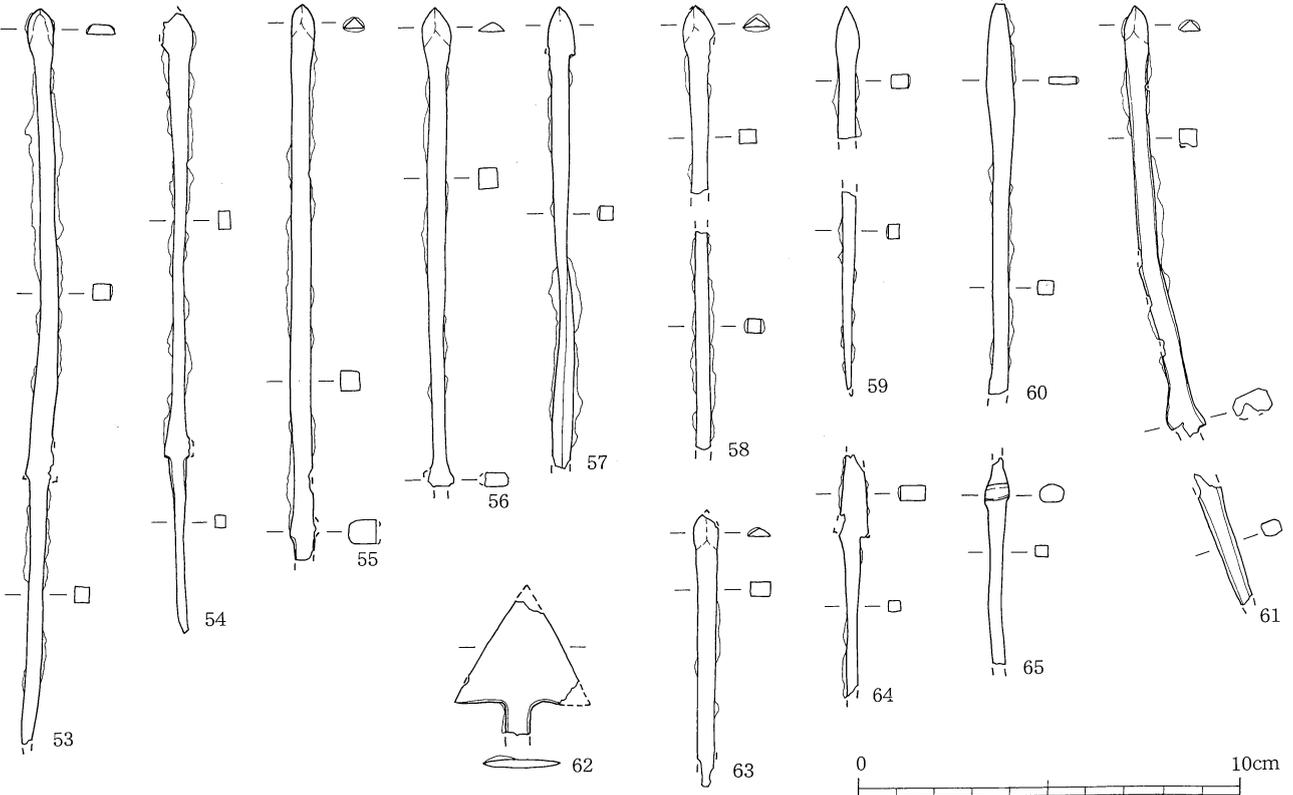
第29図 金属製品(1)



54号古墳(42~52)

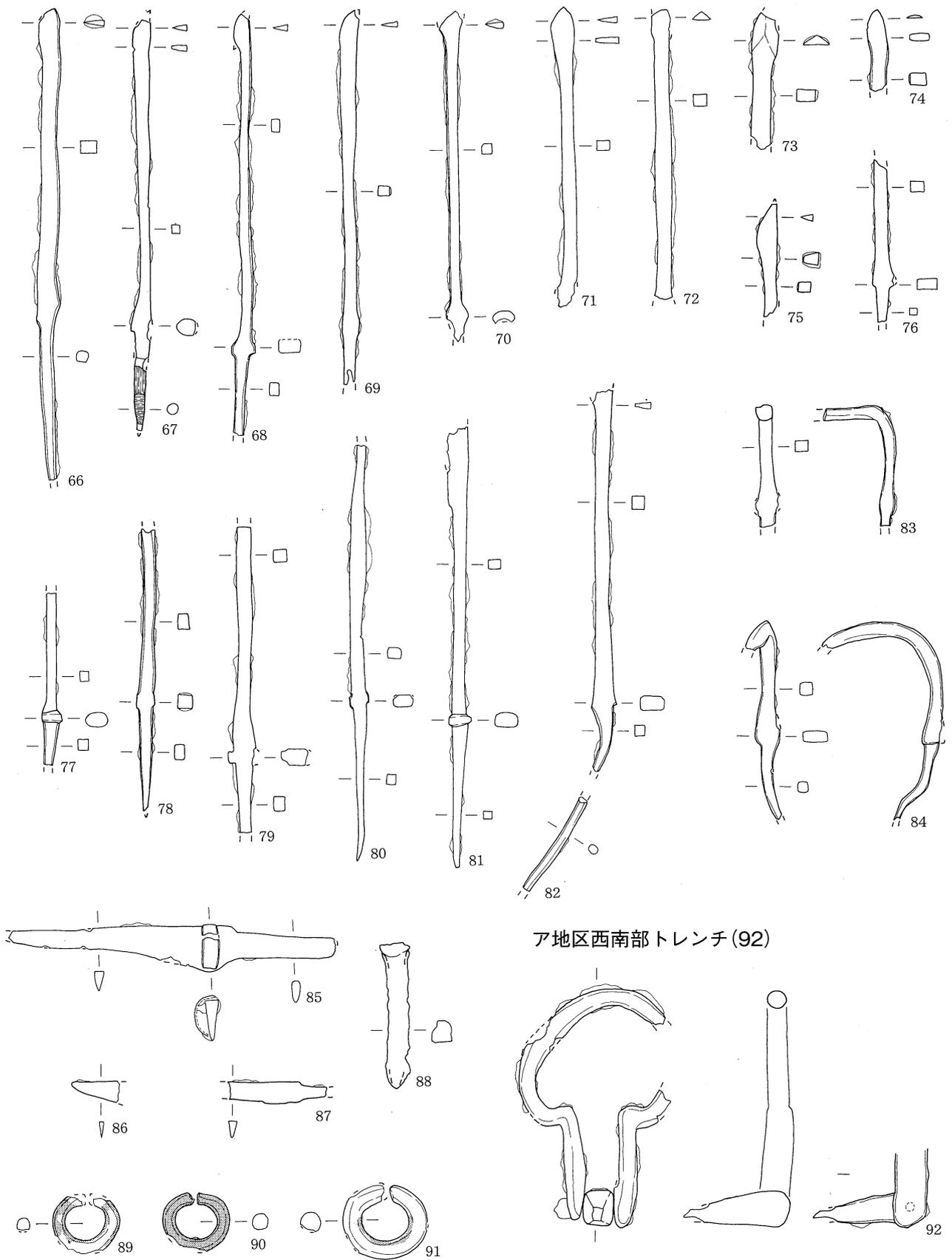


55号古墳(53~91)

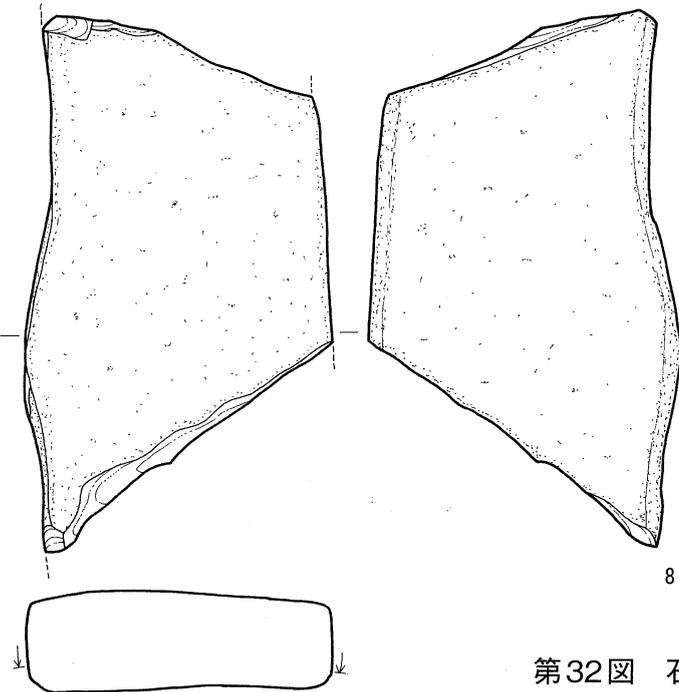
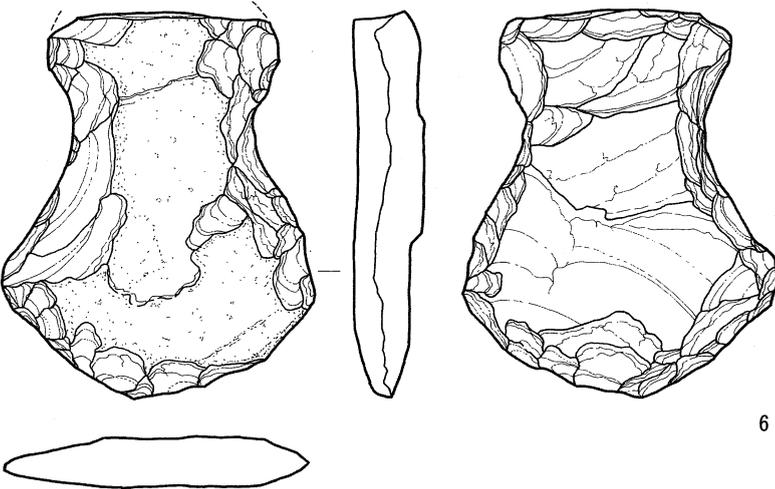
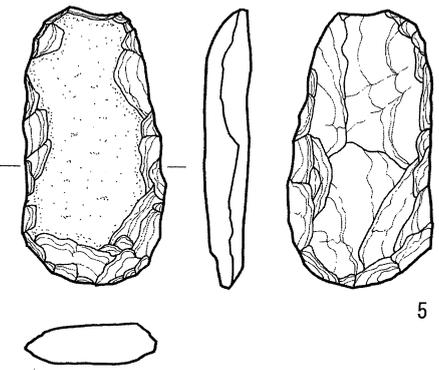
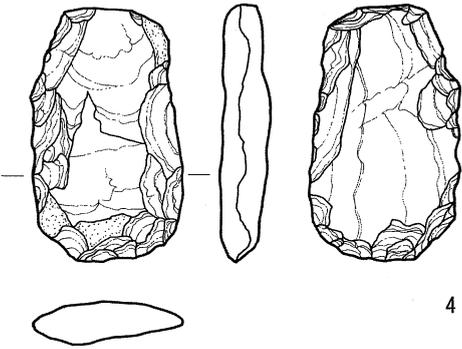
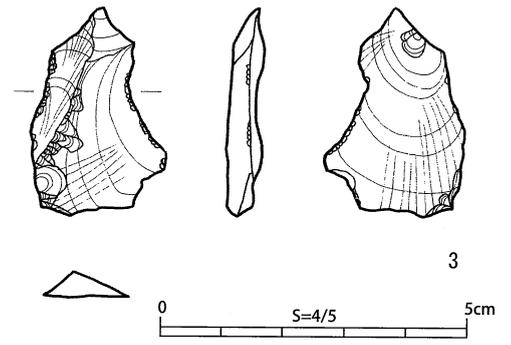
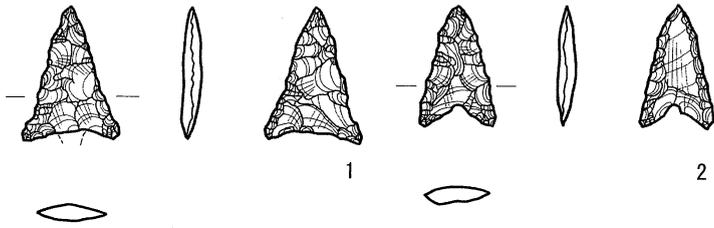


0 10cm

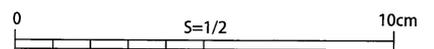
第30図 金属製品(2)

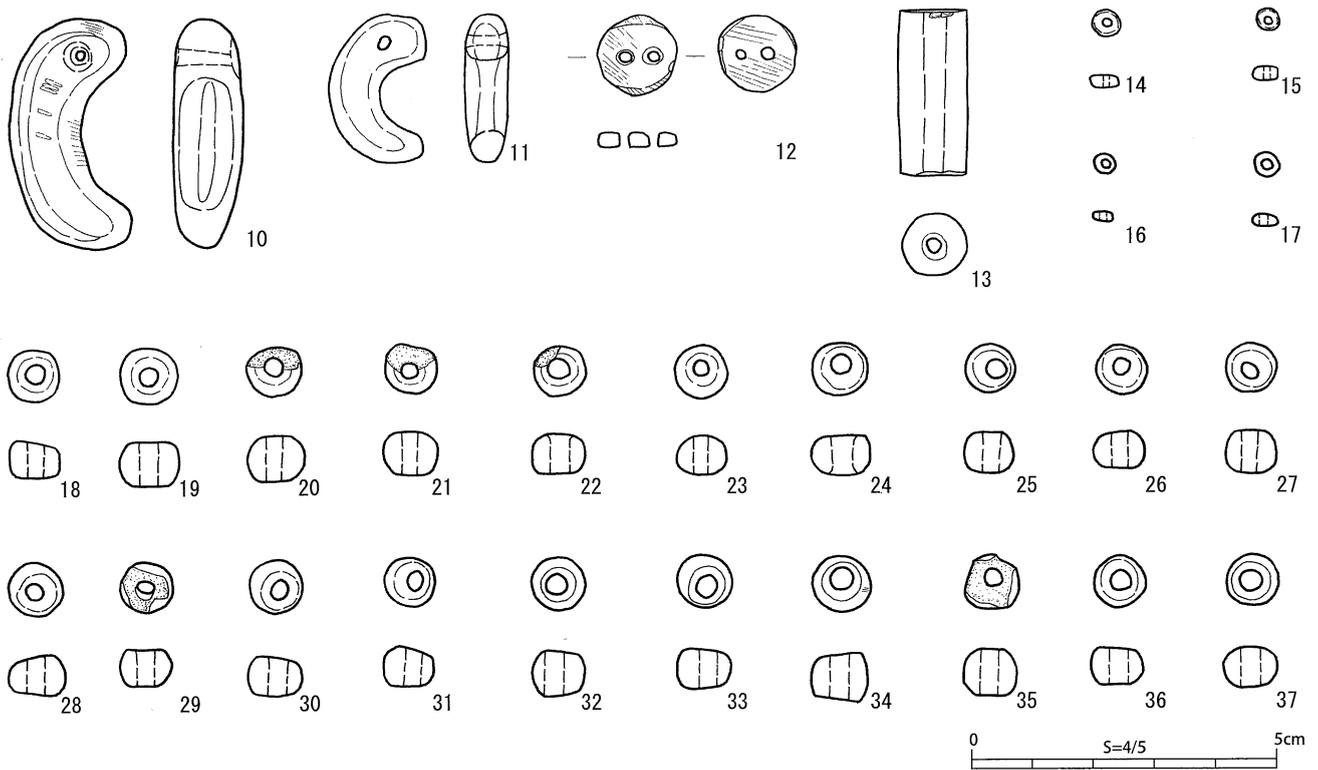


第31図 金属製品 (3)



第32图 石器





第33図 玉類

第6表 中山古墳群 I~IV次発掘調査出土石器・玉類一覽表

調査年次	No	図No	出土遺構	出土地点	調査区	器種	細別	石材	重量(g)	使用痕	欠損	備考	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)
I	3	1				石鏃	凹基有茎	黒曜石	0.6		基部欠損		(22.5)	16.3	3.6
III	7	2	55号墳	No58 周溝	ア	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.6				20.4	12.8	3.4
III	2	3	38号墳	No75 II層	オ	UF		黒曜石	2.9				34.8	22.8	6.3
III	11	4				打製石斧	短冊形	砂岩	46.2	刃縁・基部摩滅			67.8	40.4	13.8
I	10	5				打製石斧	短冊形		46.1				74.4	38.4	12.6
I	6	6				打製石斧	分銅形	砂岩	181.4	刃縁摩滅	端部欠損		(103.2)	83.4	19.4
I	7	7				打製石斧	短冊形	泥質片岩	99.1	刃縁摩滅			106.2	39.2	18.8
III	10	8		No2	イ	砥石		砂岩	410.1		両端欠損		(142.8)	(82.0)	27.8
II	4	9				磨石類		砂岩	371.3	磨			90.4	75.2	42.8
III	13	10	38号墳		オ	勾玉		メノウ	10.4				38.8	20.5	12.1
III	4	11	55号墳		ア	勾玉		土製	2.4				24.9	16.4	7.6
III	1	12	55号墳		ア	双口円板		滑石	0.6				13.8	13.4	2.8
III	5	13	55号墳		ア	管玉		碧玉	6.1				27.9	11.9	10.6
I	3	14	52号墳		テ	白玉		滑石	0.1				4.8	5.0	2.4
I	2	15	52号墳		テ	白玉		滑石	0.1				3.9	4.1	2.6
I		16	54号墳		テ・ト	小玉		ガラス	0.1				3.6	3.9	2.0
I		17	54号墳		テ・ト	小玉		ガラス	0.1				4.4	4.4	2.3
III	6	18	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.5				8.9	8.9	6.5
III	7	19	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.9				9.5	9.8	7.8
III	8	20	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.5				8.6	9.4	8.0
III	9	21	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.4				8.5	8.9	7.6
III	10	22	55号墳		ア	丸玉		不明	0.7				8.5	8.9	7.0
III	11	23	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.7				9.3	9.0	6.9
III	12	24	55号墳		ア	丸玉		不明	0.7				9.0	9.5	7.0
III	13	25	55号墳		ア	丸玉		不明	0.6				8.4	8.6	7.1
III	14	26	55号墳		ア	丸玉		不明	0.6				8.6	8.6	6.5
III	15	27	55号墳		ア	丸玉		不明	0.6				8.4	8.8	7.5
III	16	28	55号墳		ア	丸玉		不明	0.7				9.3	9.4	7.1
III	17	29	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.5				8.8	8.9	6.5
III	18	30	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.6				9.3	9.0	7.0
III	19	31	55号墳		ア	丸玉		不明	0.6				8.5	8.5	7.0
III	23	32	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.7				9.3	9.3	8.0
III	24	33	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.6				9.1	9.3	7.0
III	25	34	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.9				9.6	10.0	8.4
III	20	35	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.6				9.3	9.3	8.1
III	21	36	55号墳		ア	丸玉		不明	0.8				9.0	8.9	6.5
III	22	37	55号墳		ア	丸玉		凝灰岩	0.7				8.9	8.9	7.1

※ ○ は現存長を表す

VI 調査のまとめ

IV章の各次調査の、発見された遺構の項の最後でそれぞれ触れているが、もう一度、調査結果の要点について触れてみたい。

1 調査地について

今回の報告分はI次調査からIV次調査までで、中山霊園第2期造成対象地の西半分にあたる。対象地約28,900㎡のうち20,850㎡余りを発掘調査した。発見・調査した主な遺構は、古墳9基（うち2基は測量とトレンチ調査に限って実施し現地保存。残り7基について記録保存）、炭焼窯7基である。その他に土坑、石垣、石積み、集石、配石などを多数調査したが、いずれも近世か近代以降の所産であった。したがって、本書の記述・揭示図では近世、近代のものは詳しく触れていない。

また、同霊園第1期造成地（昭和40年代に造成）の頂部にある公園にマレットゴルフ場を造成する計画が策定されたが、同地には土段状の地形が残っていた。このため、III次調査に合せて土段状の地形にトレンチ調査を行った。その結果、空堀が存在していることが判明した。土段状の地形は小規模な山城跡であると推定し、鋏形原砦址と命名した。この調査では105㎡余りを発掘している。

2 古墳について

今回の調査範囲内には周知の古墳は16・38号古墳の2基のみが確認されていたが、調査の結果はさらに5基の湮滅古墳と2基の墳丘を残す古墳の追加を認めるものとなった。特にI次調査の北西部地区とそれに隣接するIII次調査の北東部地区で、5基の湮滅古墳と1基の墳丘を残す古墳を確認できたことは意義深い。この一帯に6基の古墳がまとまって存在していたことを示すものであり、中山丘陵の南斜面に濃密に古墳が分布する中でも、さらに小規模な古墳群としての集中があったことがわかる。このような小規模の古墳の集中が他にもあることは十分に予測され、中山古墳群の古墳の分布について再検討が必要と考える。

古墳の規模はいずれも小ぶりで、墳丘は周溝径からみて、大きいものでも長径15m、小さいもので7～8mと推定される。石室は残存形態から無袖か片袖の横穴式であったと考えるが、50号古墳については竪穴式の可能性も残した。石室規模は、長さは38号古墳のみで判明しており7.1mを測る。他は入口付近一帯が破壊されており残存値しか計測できなかったが3.7～4.6mを測る。最大幅はいずれも1.5～1.7mの範囲に収まる。

次に古墳の時期であるが、出土遺物からみると想定していた以上に築造年代に時期幅があった。最も古いものは52号古墳で6世紀の前半代に比定される。一方、新しいものでは7世紀末から8世紀前半代に比定される16・49号古墳で、この間200年にわたって古墳築造または古墳に関連する祭祀が継続されていたことが強く推定されるのである。後期古墳の範疇で捉えられると考えるが、中山古墳群の全体を俯瞰したとき、その年代観についても今後の検討が必要であろう。

3 炭焼窯について

I次調査で1基、III次調査で4基、IV次調査で2基の計7基（I次からXIII次までを合計すると29基）が発見されている。いずれも、いわゆる伏せ焼き法の製炭に用いられた坑内製炭遺構で、長方形、隅丸長方形ないしは長楕円形の平面形態を呈す。斜面の傾斜にあわせて掘り込まれており、深さは最深で55cm、底面の傾斜は5～10度を測る。

これらは、Ⅲ次調査までは出土遺物も炭化材以外に無く、近世以降のボヤ炭を焼いた簡易な炭焼窯遺構と捉えていた。ところが、Ⅳ次調査で平安時代前期を遡る土器片類が出土したことにより、時期比定に見直しが必要になってきた。そして、次の第2分冊で扱うⅤ次調査において、窖窯形の築窯製炭遺構（Ⅴ次2号炭焼窯）が従来の伏せ焼き法の炭焼窯と共に発見され、そこから出土した炭化材が放射性炭素年代測定により西暦1950年より $1,440 \pm 50$ 年遡るという値を示したことで、その他の炭焼窯も古代に遡る可能性がきわめて高くなったと考えるのである。

焼成されていた炭の原材はコナラを主として、樹齢も揃っており、いわゆるボヤ炭などの軟炭ではなく、ナラ炭のような硬炭を生産していたと考える。生産された炭の供給先は鍛冶、製陶業の燃料、官衙・寺院などへの暖房用であろう。

最後になりましたが、今回の一連の発掘調査と整理作業を実施するにあたり関係した皆様に満腔の謝意を表し、結びといたします。

写真図版



I次調査区、西から



I次調査区、東から



I次 第16号古墳背面周溝



I次 第49号古墳墳丘



I次 第50号古墳全景



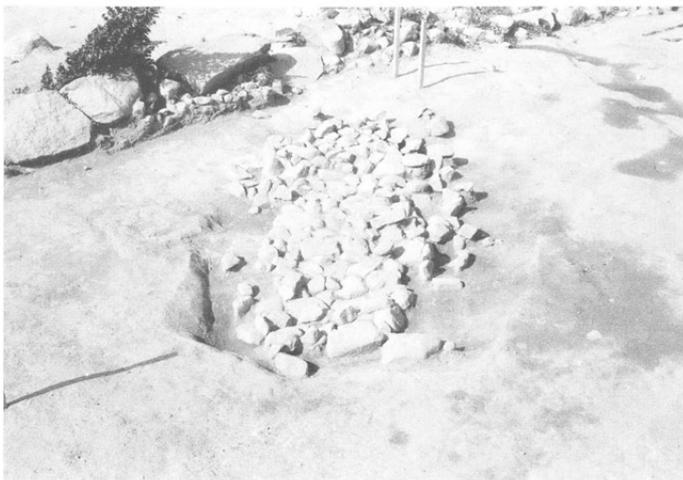
I次 第50号古墳石積



I次 第51号古墳全景



I次 第52号古墳周溝



I次 第52号古墳石室基底部



I次 第52号古墳石室遺物出土（鉄刀：21）



I次 第52号古墳石室遺物出土（土器：17～20）



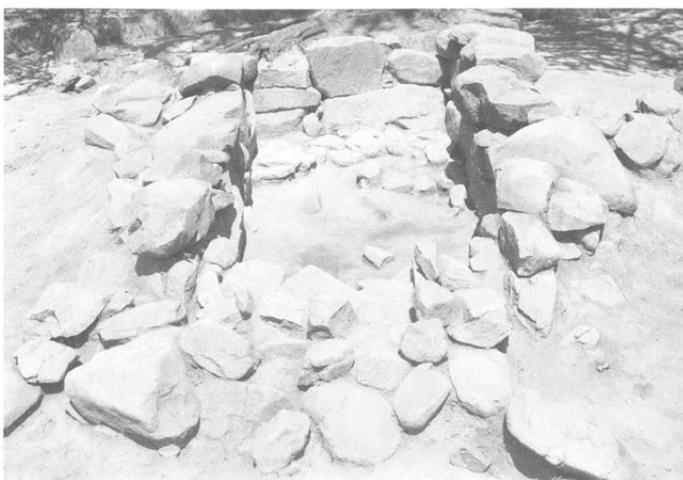
I次 第53号古墳周溝



I次 第53号古墳石室基底部



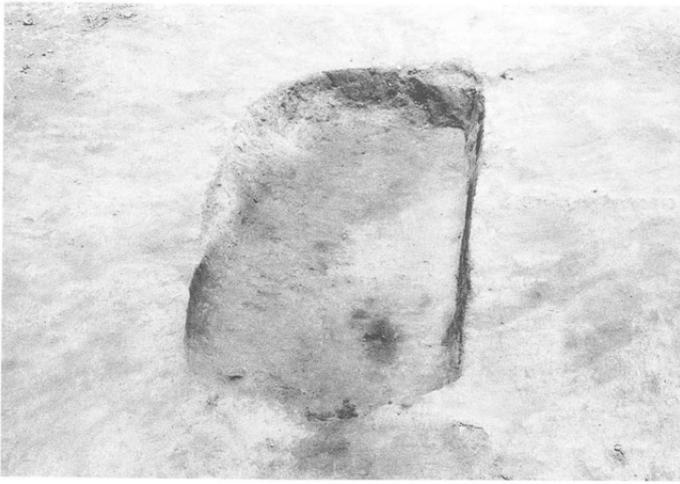
I次 第54号古墳墳丘



I次 第54号古墳石室



I次 第54号古墳石室奥壁



I次 炭焼窯



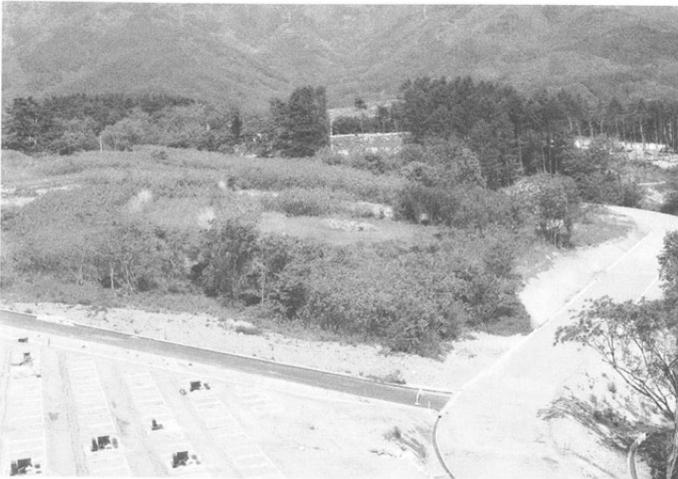
I次 近代の石垣



II次調査区、西から



II次調査区、東から



III次調査区、西から



III次調査区、東から



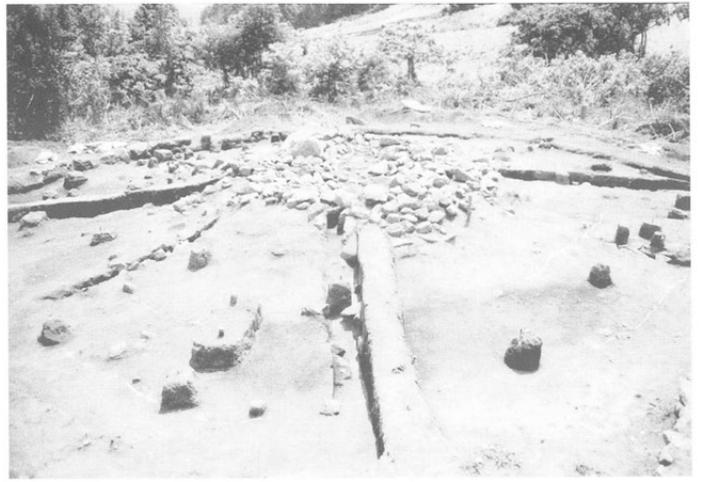
III次 第38号古墳墳丘 (洗い出し前)



III次 第38号古墳墳丘 (洗い出し後)



Ⅲ次 第38号古墳墳丘側面



Ⅲ次 第38号古墳周溝調査中



Ⅲ次 第38号古墳完掘



Ⅲ次 第38号古墳石室完掘



Ⅲ次 第55号古墳全景



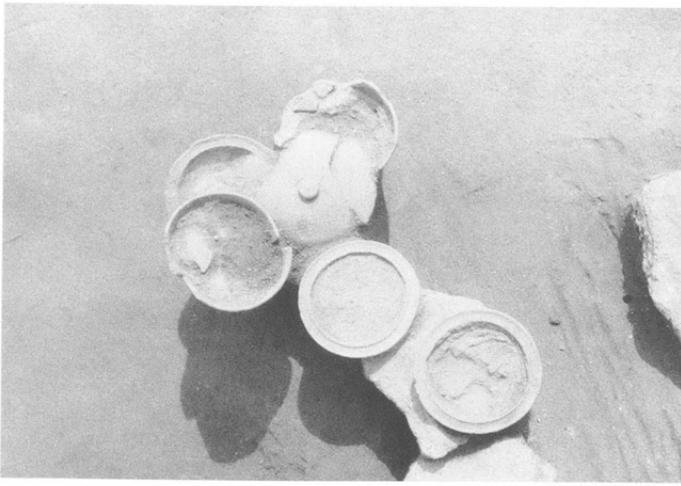
Ⅲ次 第55号古墳石室礫・遺物出土状況



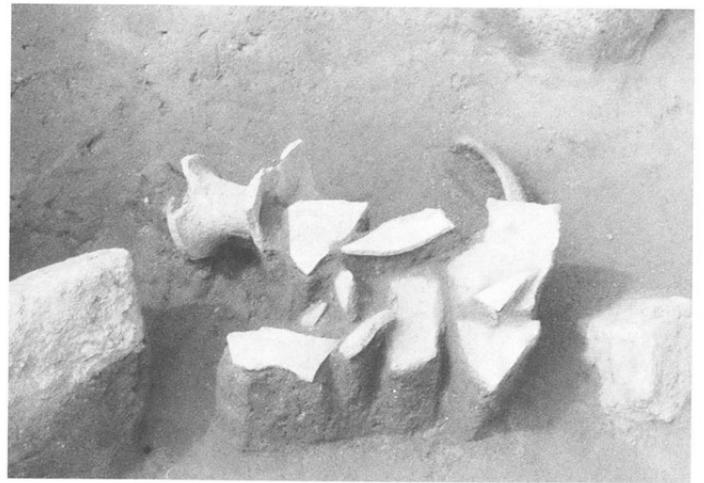
Ⅲ次 第55号古墳石室



Ⅲ次 第55号古墳石室掘り方



Ⅲ次 第55号古墳石室遺物出土（土器：88～93）



Ⅲ次 第55号古墳石室遺物出土（土器：97）



Ⅳ次調査区、西から



Ⅳ次調査区、北から



Ⅳ次 炭焼窯1



Ⅳ次 炭焼窯1遺物出土



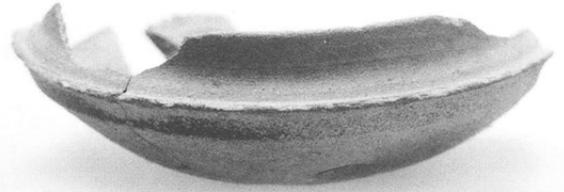
Ⅳ次 炭焼窯2



Ⅳ次 炭焼窯2遺物出土



11



21



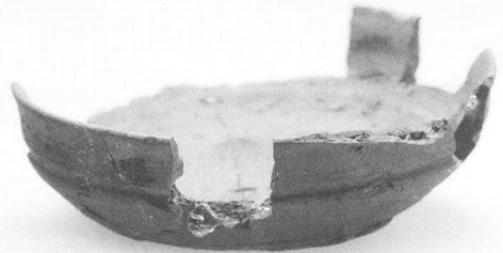
16



22



19



23



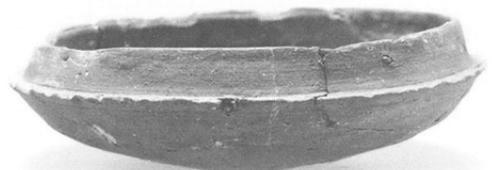
35



24



43



40



45



46



47



48



51



49



53



55



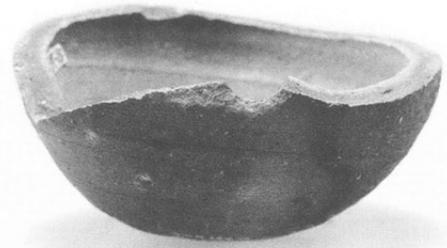
54



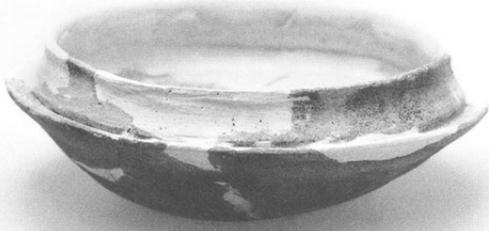
56



58



61



86



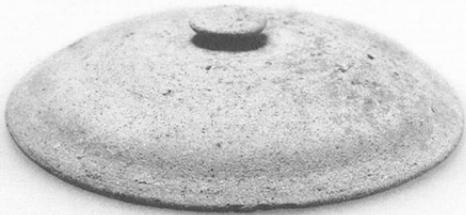
88



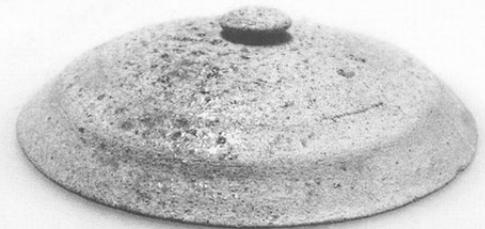
89



90



91



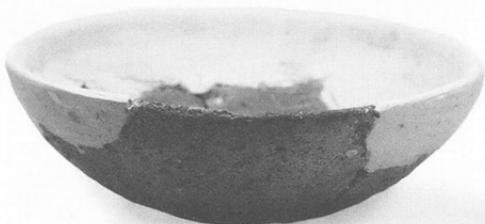
92



93



97



104

長野県松本市 中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし なかやまこふんぐん・くわがたはらいせき・くわがたはらとりでし							
書名	長野県松本市 中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址							
副書名	中山霊園拡張に伴う第Ⅰ～Ⅳ次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.168							
編著者名	直井雅尚、宮島義和、森義直							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2003(平成15)年3月24日(平成14年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかやまこふんぐん 中山古墳群	なかやま 松本市中山4905番地	20202	419	36度 11分 38秒	137度 59分 33秒	Ⅰ:19900424 ～19900831	6,300㎡	市営霊園拡張
くわがたはらいせき 鍬形原遺跡			372	36度 11分 38秒	137度 59分 33秒	Ⅱ:19910422 ～19910601	8,400㎡	
くわがたはらとりでし 鍬形原砦址	なかやま 松本市中山1742番地3		447	36度 11分 51秒	137度 59分 31秒	Ⅲ:19920520 ～19920730 Ⅳ:19930420 ～19930521	3,760㎡ 3,033㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中山古墳群	古墳	古墳後期	古墳3基、湮滅古墳6基	土師器、須恵器、金属製品、玉類		2基の古墳を測量、7基の古墳を記録保存		
鍬形原遺跡	生産址	縄紋	なし	土器		平安時代前期以前に遡る炭焼窯を調査		
		奈良～平安	炭焼窯7基	土師器、須恵器、炭化材				
		近世・近代	土坑50基、集石2基、石垣多数	なし				
鍬形原砦址	城館	中世	空堀	なし		トレンチ調査		
要約	平成2年度から13年度にかけて13次にわたって行われた、中山古墳群、鍬形原遺跡、不動沢古窯址および鍬形原砦址の発掘調査のうち、平成2年度から5年度までのⅠ～Ⅳ次調査の報告書。中山古墳群、鍬形原砦址と、便宜的に鍬形原遺跡を扱っている。後期古墳9基を調査し、多量の遺物出土をみた。また、7基の炭焼窯は坑内製炭遺構で、平安時代前期以前に遡るものであることがわかった。古墳2基を現状保存した。							

松本市文化財調査報告 No.168

長野県松本市

中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址

—中山霊園拡張に伴う第I～IV次発掘調査報告書—

発行日 平成15年3月24日

発行 松本市教育委員会

〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社

